

令和7年度 学修行動調査レポート

令和8年5月

拓殖大学 FD委員会

はじめに

本学は、大学の大衆化と学生の多様化が一層進む中、大学教育の質を社会に保証していくことが求められており、これに対応するために各種の施策に取り組んでいる。

大学基準協会「大学評価研究」（第13号2014年8月）において、「現状の教育課程の内容が、学生の主体的な学修を十分に促す内容となっているか、学生が卒業までに教育目標に沿った学修成果を十分に達成できているかを検証し、今後の具体的な改善方策につなげていくPDCAサイクルを確立する必要がある。そのためには、学修時間・学修行動の実態把握が必要となる」との学修行動調査の必要性が述べられている。この趣旨を踏まえ、本学では、学生の質保証や学修成果の可視化への取組に向け、学生本人が、自らの課程を通じた学修成果を把握するために、教育の学修経験を問う「学修行動調査」を院生を含む全ての学生を対象に平成30(2018)年度から実施している。

令和2(2020)年度からは、学修行動調査結果に対する所見で、卒業・修了認定・学位授与の方針に掲げる目標値を学生が達成しているかを把握し評価を行うとともに、その結果を踏まえ、「教育課程や教育内容・方法などの改善方策」を示している。

なお、令和3(2021)年度「学修行動調査」は、「授業改善のための学生アンケート」をはじめ、文部科学省による「全国学生調査」や学生部による「学生実態調査」が実施されていることに伴い、調査内容の重複を回避し、かつ学生及び教員の負担軽減とするため、実施を取り止めた。

目次

● 調査目的／調査概要	2
● 回答者プロフィール	3
● 授業中での経験	12
● 授業時間外の学修態度	19
● 本年度の週当たりの学修等時間	24
● 入学時と比べ、身に付いた学修成果・経験	31
● 学部設問項目	43

調査目的／調査概要

＜調査目的＞

本調査は、学生の主体的な学修を促す教育課程となっているか、卒業・修了時まで
教育目標に沿った成果が上がっているかなどを検証し、その結果を教育課程や授業の
改善に資することを目的に実施した。

＜調査概要＞

- ・ 調査方法：インターネット調査（Web調査：Takudai Portalからリンク）
- ・ 調査対象：拓殖大学 学部生、大学院生(約1万人)
- ・ 調査期間：2025年12月1日（月）～2026年1月16日（金）
- ・ 回答者数：2184名

	商学部	政経学部	外国語 学部	工学部	国際学部	学年計
1年生	215	284	128	75	52	754
2年生	157	134	71	96	56	514
3年生	148	147	50	69	58	472
4年生	105	76	61	70	43	355
学部計	625	641	310	310	209	2095

	学年計
博士課程前期 1 年	28
博士課程前期 2 年	43
博士課程後期 1 年	3
博士課程後期 2 年	3
博士課程後期 3 年	5
修士課程 1 年	3
修士課程 2 年	4
大学院生計	89

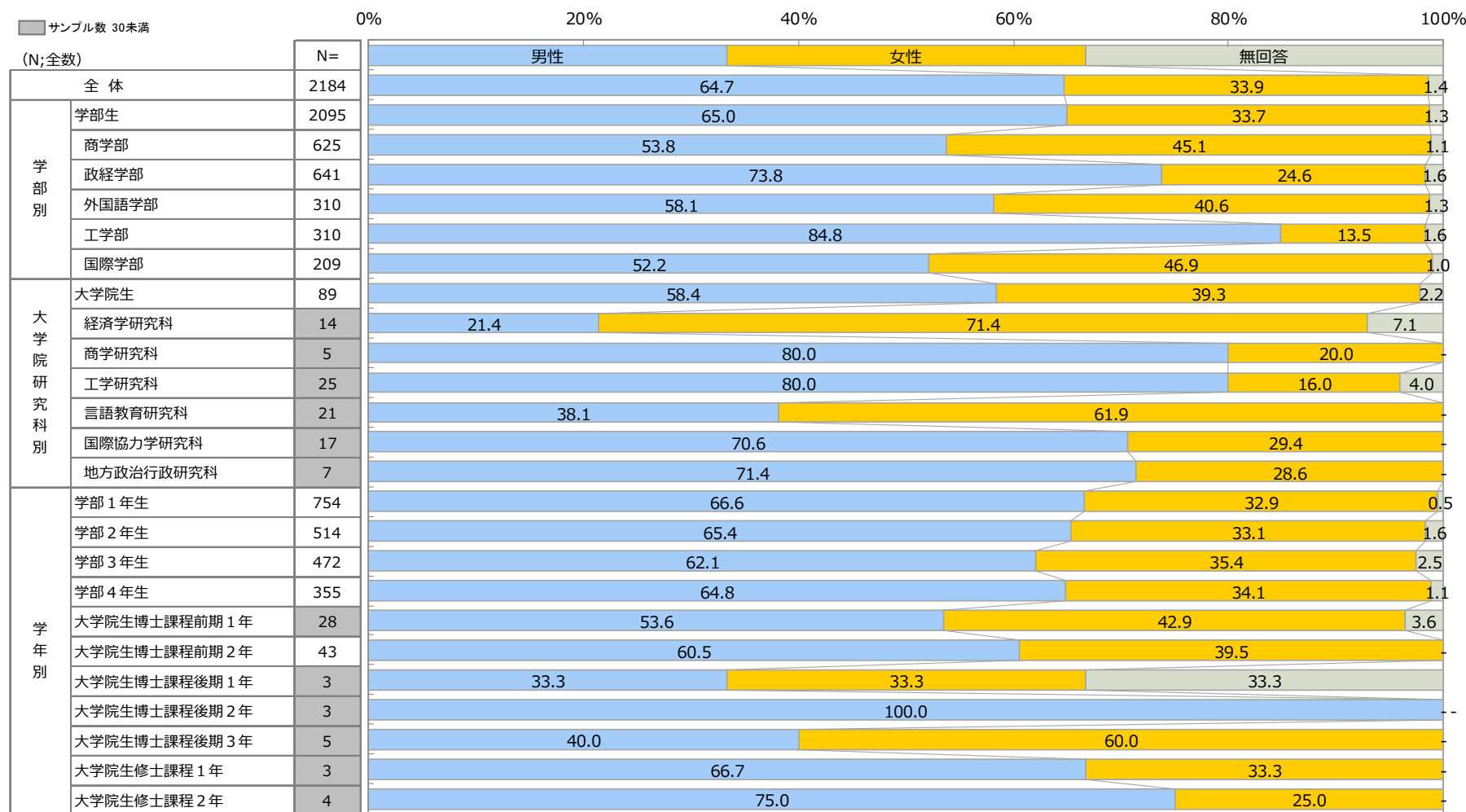
- ・ 調査主体：拓殖大学
- ・ 調査実施：ビデオリサーチ

回答者プロフィール

性別

Q1.あなたの性別をお知らせください。(SA)

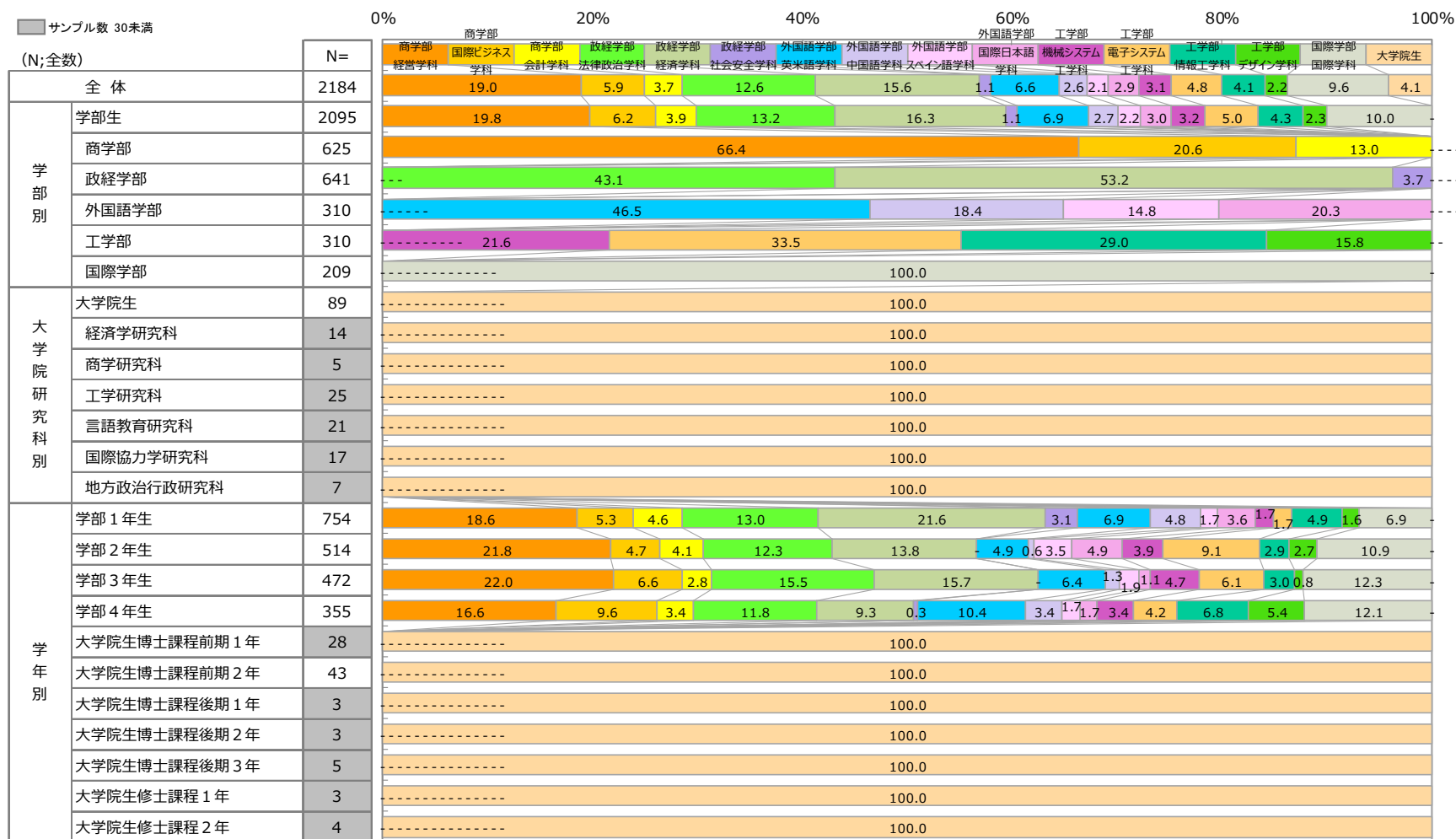
- ・性別は、全体で「男性」64.7%、「女性」33.9%、「無回答」1.4%である。
- ・学部生、大学院生いずれも「男性」が「女性」を上回る。



所属

Q2.あなたの所属をお知らせください。(SA)

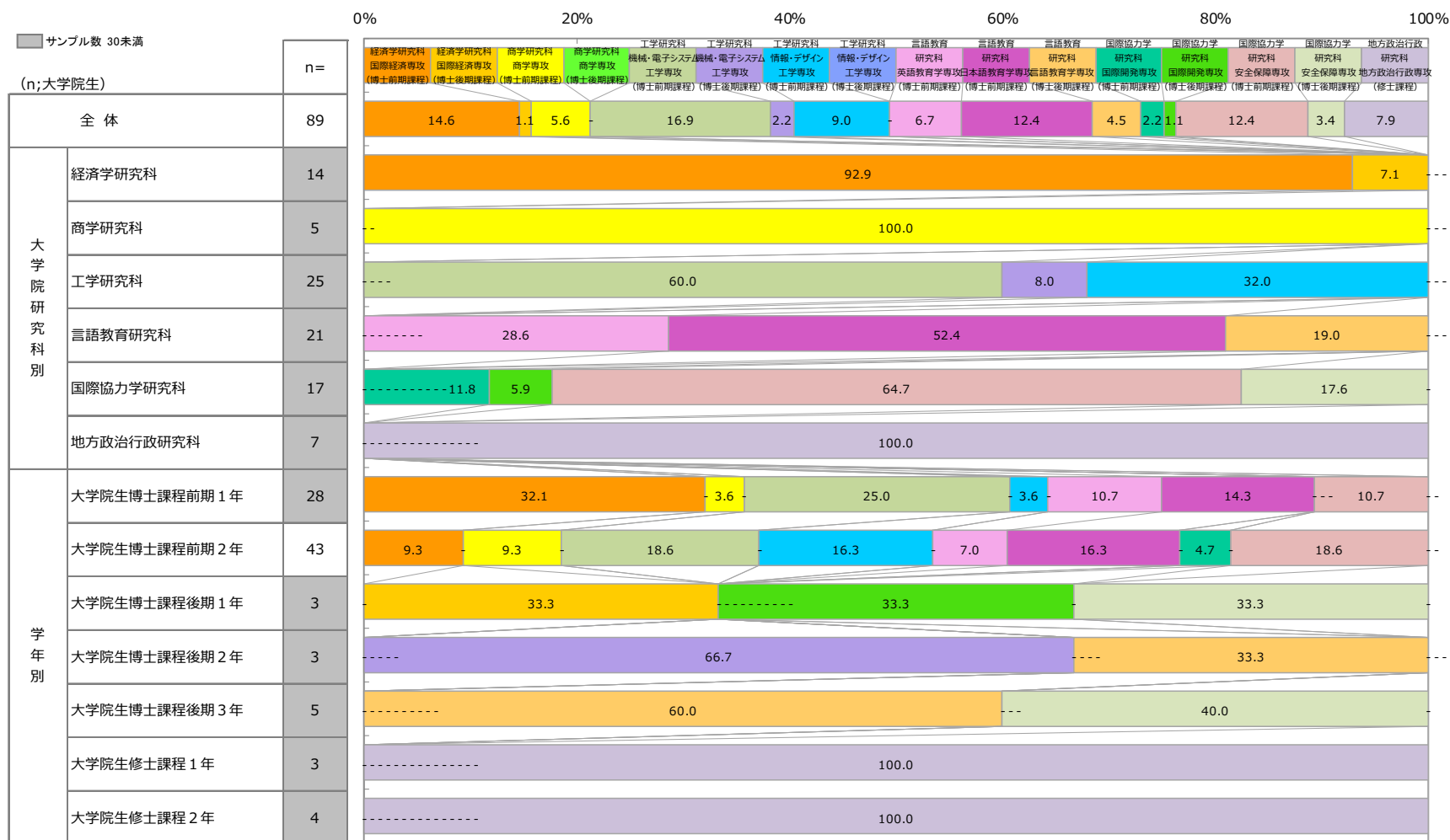
- ・所属は、全体で「商学部 経営学科」が19.0%、「政経学部 経営学科」が15.6%、「政経学部 法律政治学科」が12.6%で10%を上回る。
なお「大学院生」は4.1%である。



所属（大学院生）

Q2SQ.あなたの所属をお知らせください。（SA）

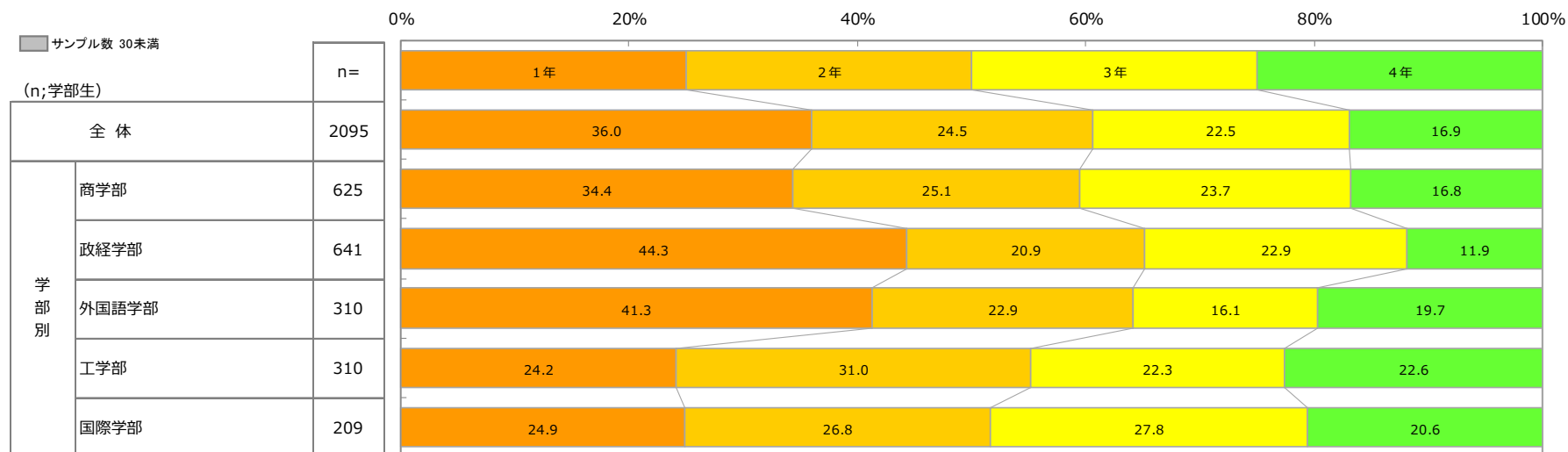
- ・大学院生の所属は、「工学研究科 機械・電子システム工学専攻（博士前期課程）」が16.9%、「経済学研究科 国際経済専攻（博士前期課程）」が14.6%、「言語教育研究科 日本語教育学専攻（博士前期課程）」、「国際協力学研究科 安全保障専攻（博士前期課程）」が12.4%で10%を上回る。



学年（学部生）

Q2SQ2.あなたの学年をお知らせください。（SA）

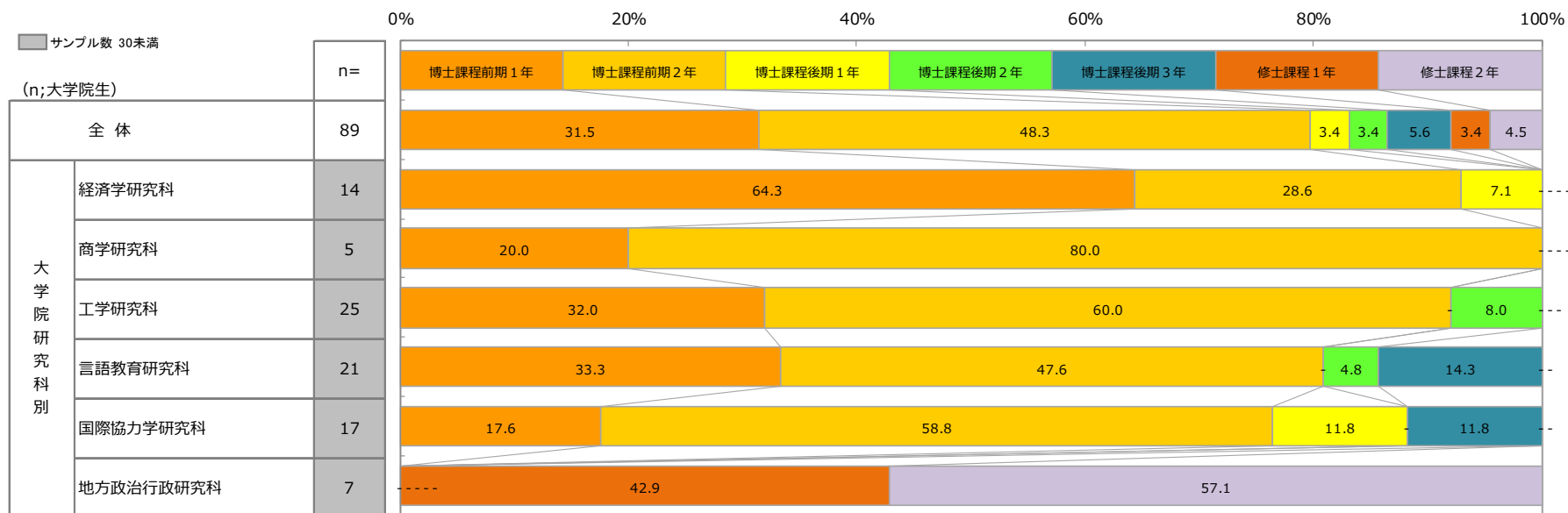
- ・学部生の学年は、「1年」が36.0%、「2年」が24.5%、「3年」が22.5%、「4年」が16.9%である。



学年（大学院生）

Q2SQ3.あなたの学年をお知らせください。（SA）

- ・大学院生の学年は、「博士課程前期2年」が48.3%、「博士課程前期1年」が31.5%である。「博士課程前期」が合計約8割を占める。



外国人留学生比率

Q3.あなたは外国人留学生ですか。(SA)

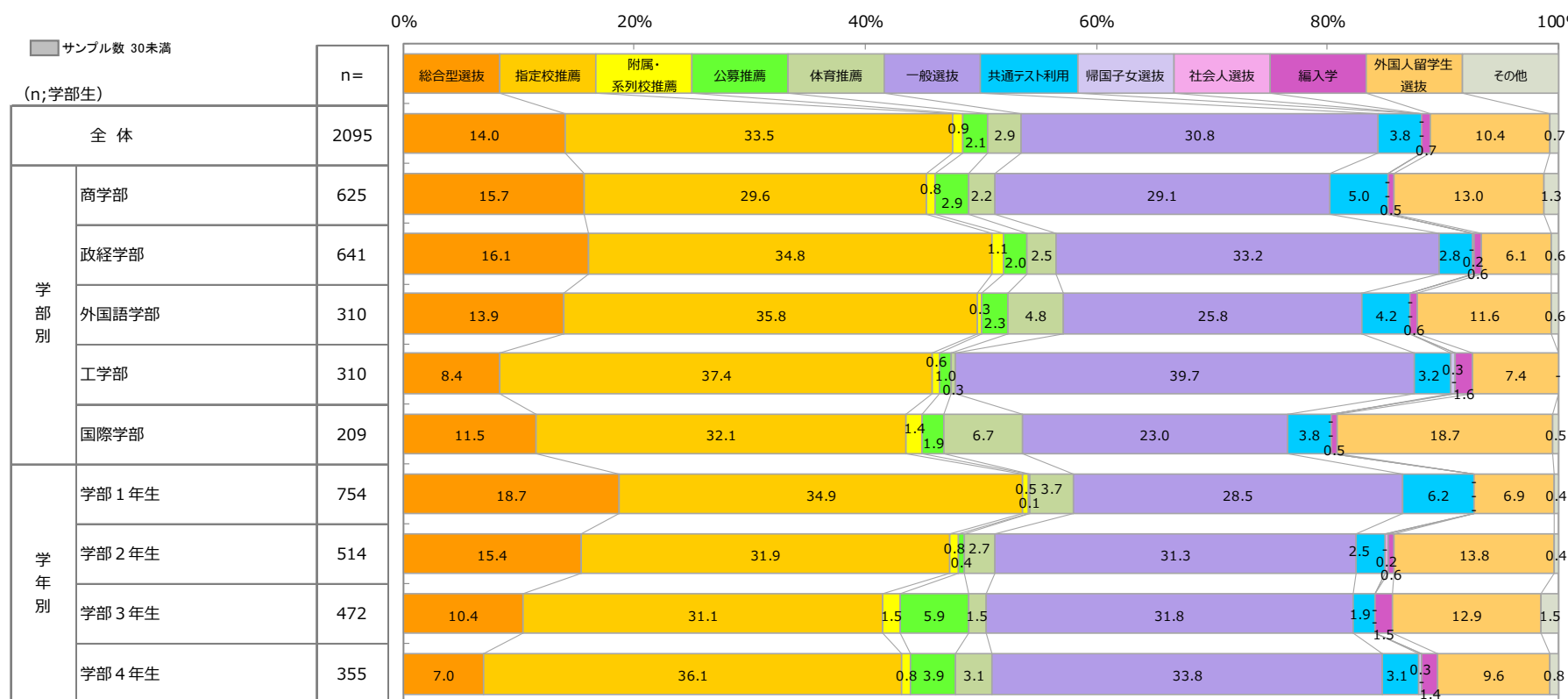
- ・外国人留学生比率は、全体の15.7%。国際学部が20.1%で最も多く、商学部が18.9%で続く。大学院生は約6割が外国人留学生と回答。



入試種類（学部生）

Q4. 拓殖大学へはどのような選抜方法で入学しましたか。
(SA)

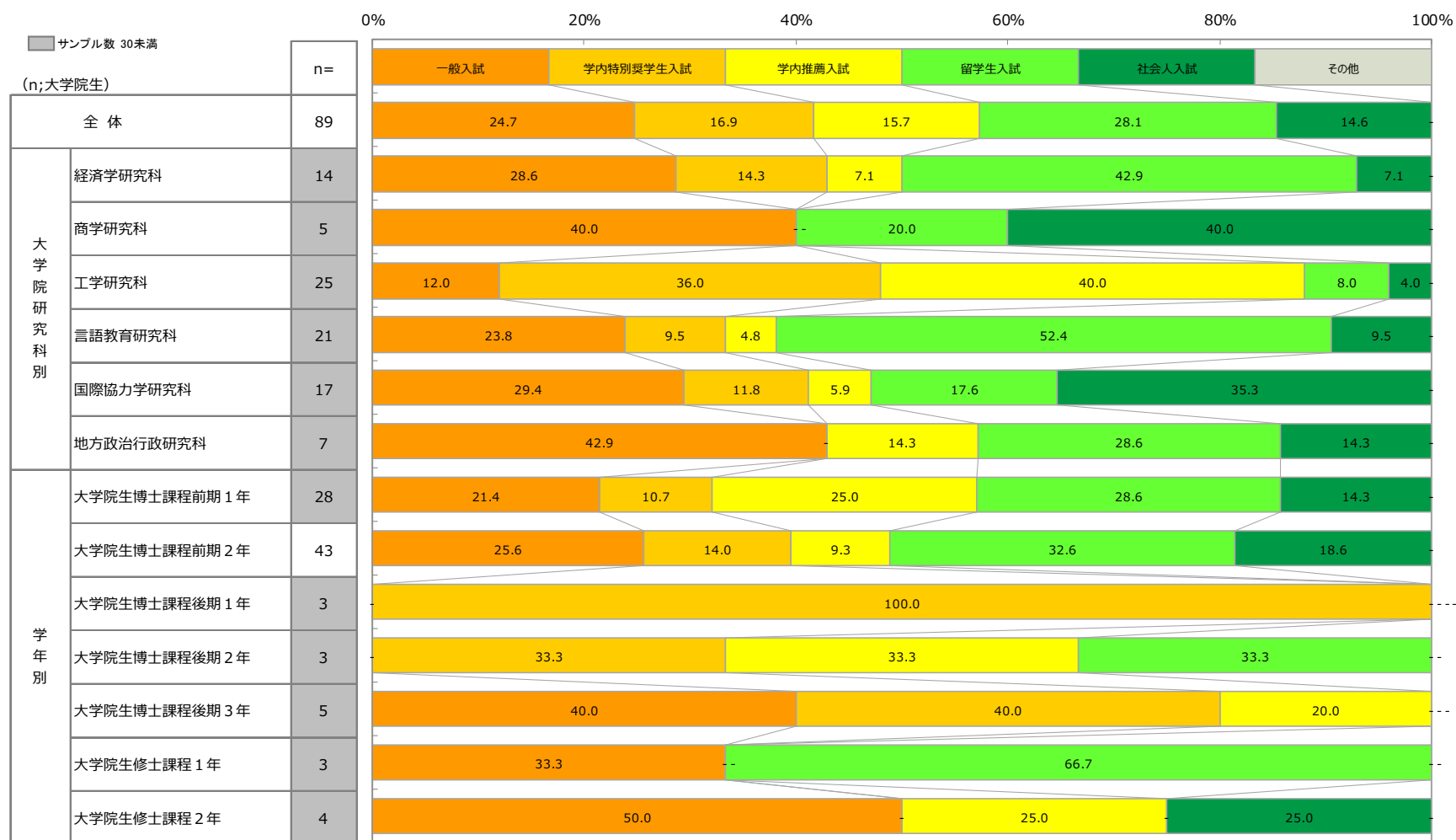
- ・学部生の入試種類は、全体では「指定校推薦」が33.5%で最も多く、「一般選抜」が30.8%で続く。
- ・学部別では、工学部は「一般選抜」が「指定校推薦」を上回る。商学部、政経学部、外国語学部、国際学部は「指定校推薦」が最も多い。国際学部は「外国人留学生選抜」も多い。
- ・学年別では、学部3年生は「一般選抜」、他の学年では「指定校推薦」が最も多い。



入試種類（大学院生）

Q5. 拓殖大学大学院へはどのような選抜方法で入学しましたか。（SA）

- ・大学院生の入試種類は、「留学生入試」が28.1%で最も多く、次いで「一般入試」24.7%、「校内特別奨学生入試」16.9%と続く。

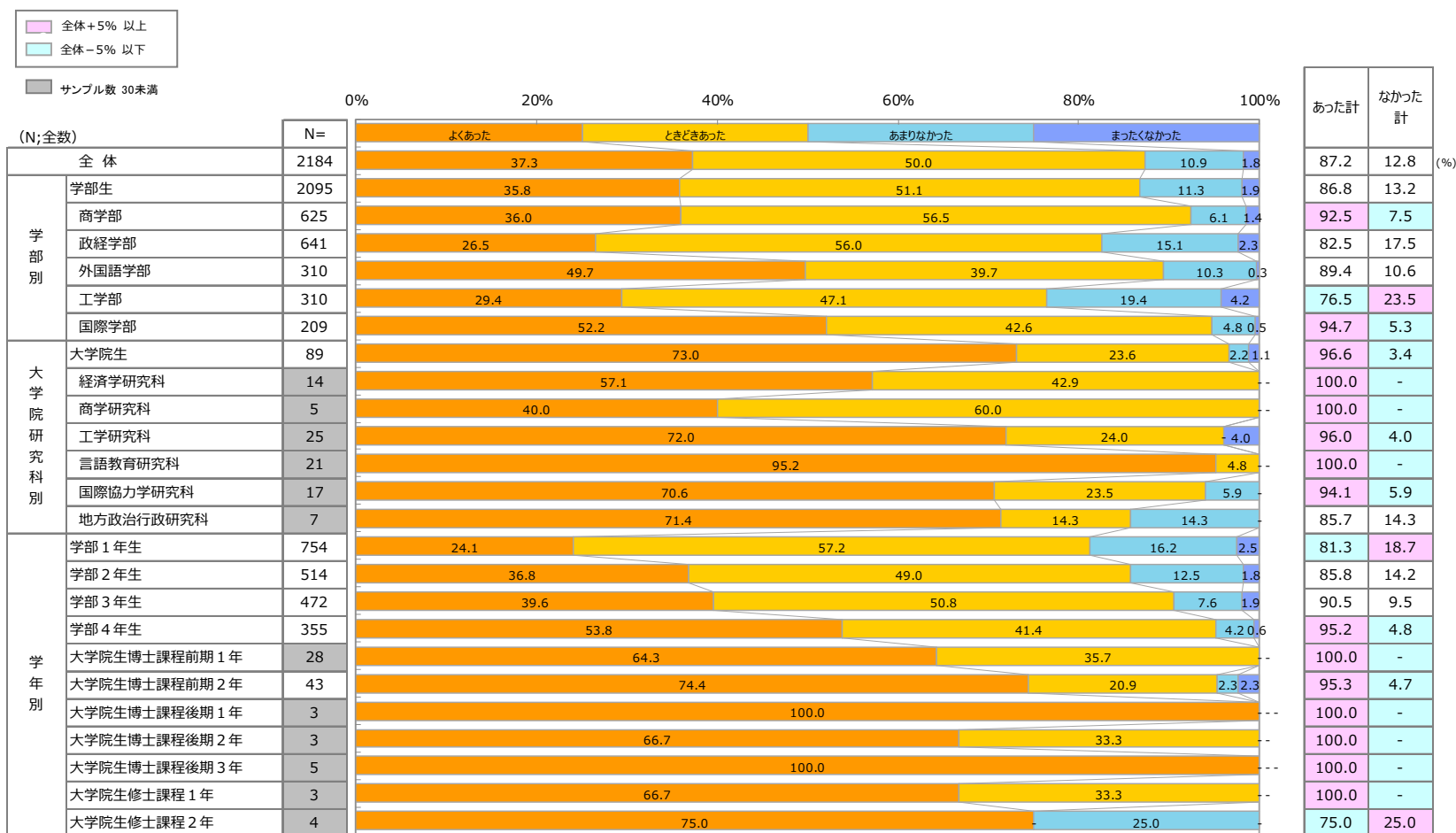


授業中での経験

自分の考えや課題を発表する授業有無

Q6.自分の考えや課題を発表する授業はありましたか。
(SA)

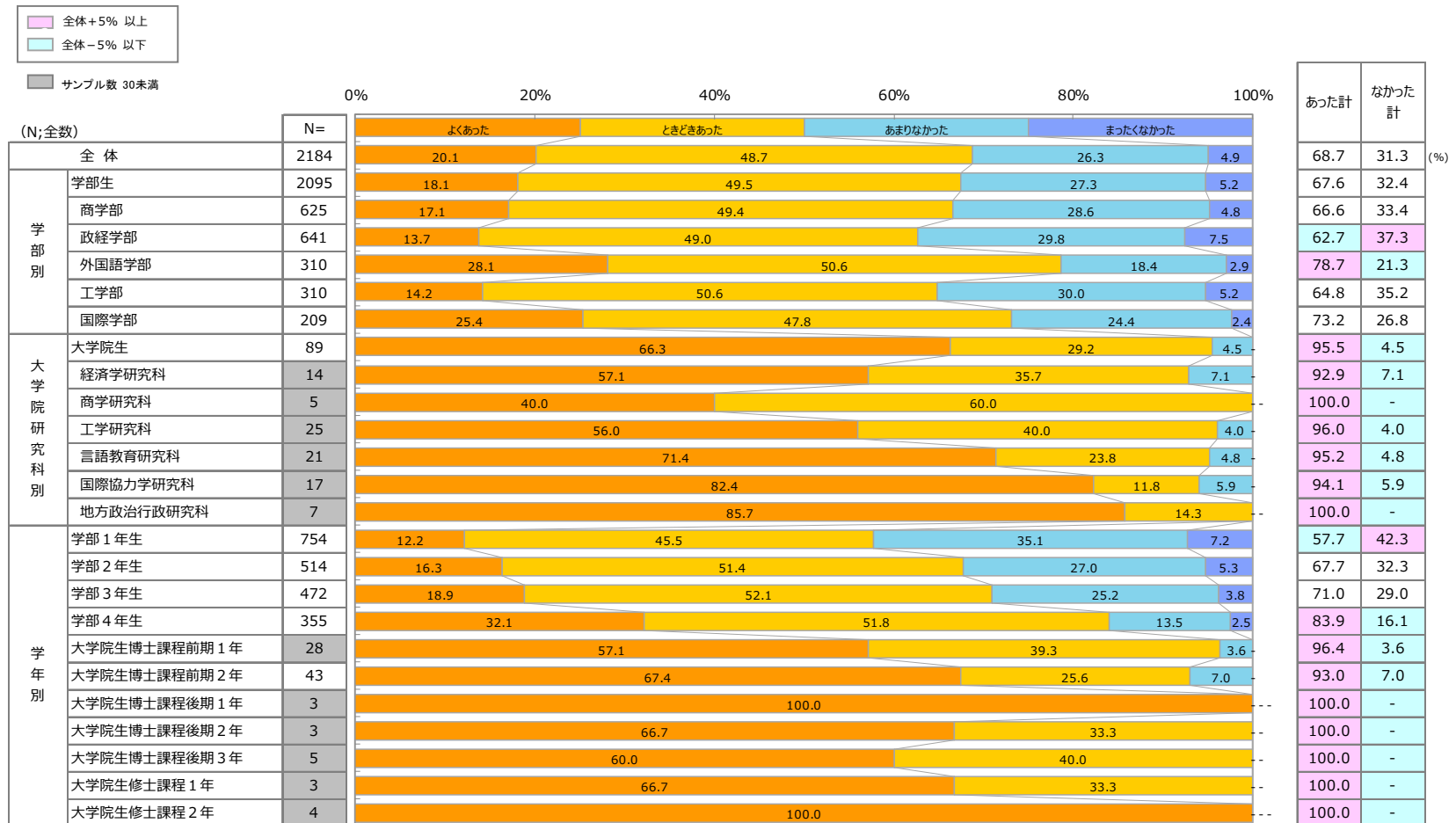
- ・自分の考えや課題を発表する授業が「あった計（よくあった＋ときどきあった）」は全体の87.2%と、「なかった計（あまりなかった＋まったくなかった）」の12.8%を上回る。
- ・学部別では、各学部で「あった計」が「なかった計」を大きく上回る。
「あった計」をみると、国際学部が94.7%で最も高く、商学部が92.5%で続く。
また、大学院生は「あった計」が96.6%（全体より＋9.4pt）に達する。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と学年が上がるにつれ「あった計」が上がる。



教員への質問・意見を述べたことの経験有無

Q7. 教員に質問したり、意見を述べたことはありましたか。(SA)

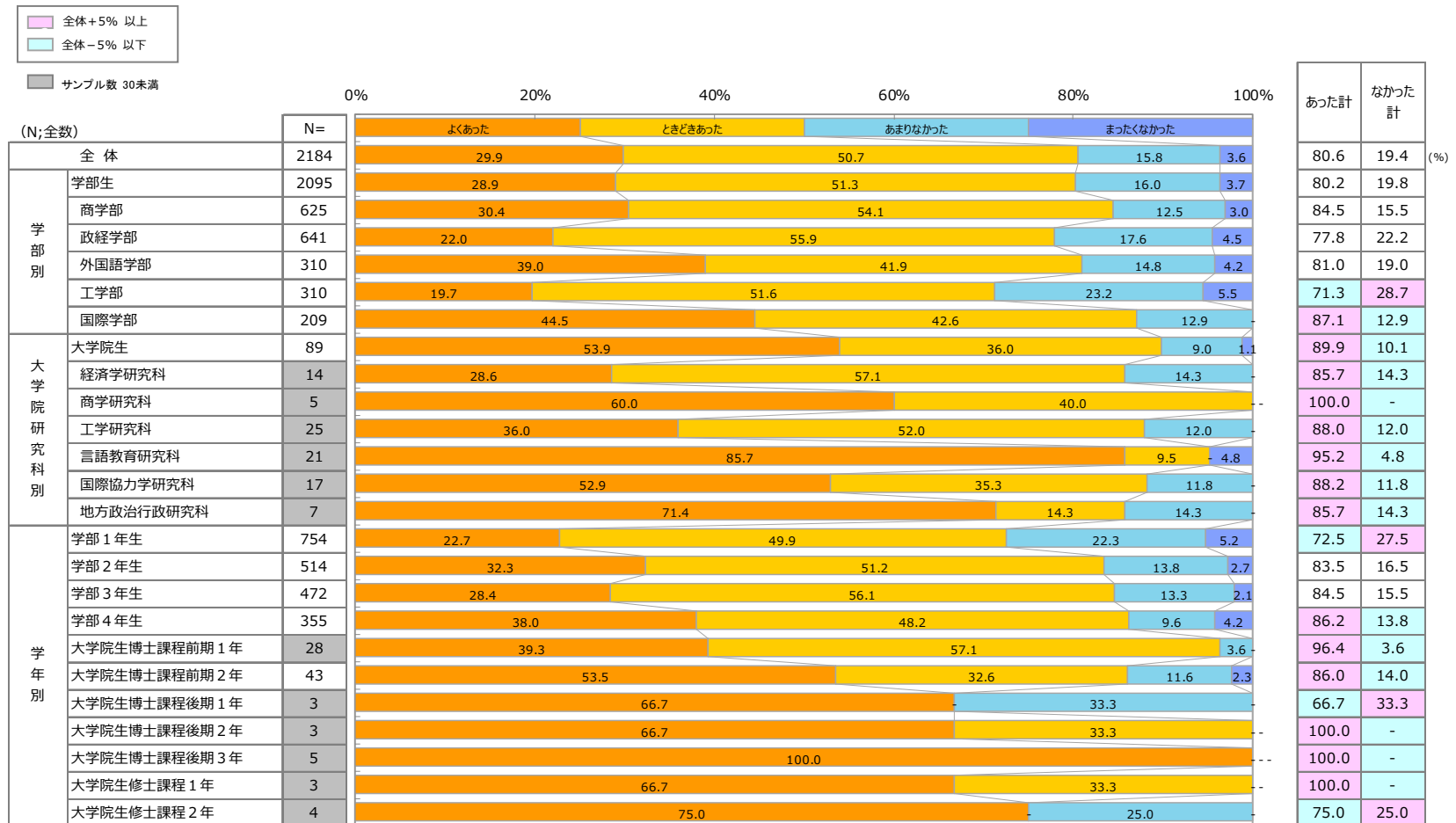
- ・教員への質問・意見を述べたことの経験が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の68.7%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の31.3%を上回る。
- ・学部別では、各学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。なお、「なかった計」は、全体に比べ政経学部で5pt以上上回っている。「あった計」をみると、外国語学部が78.7%（全体より+10.0pt）で最も高く、国際学部が73.2%（全体より+4.5pt）で続く。また、大学院生は「あった計」が95.5%に達する。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と学年が上がるにつれ「あった計」が上がる。



学生同士が議論する授業有無

Q8.学生同士が議論する授業はありましたか。(SA)

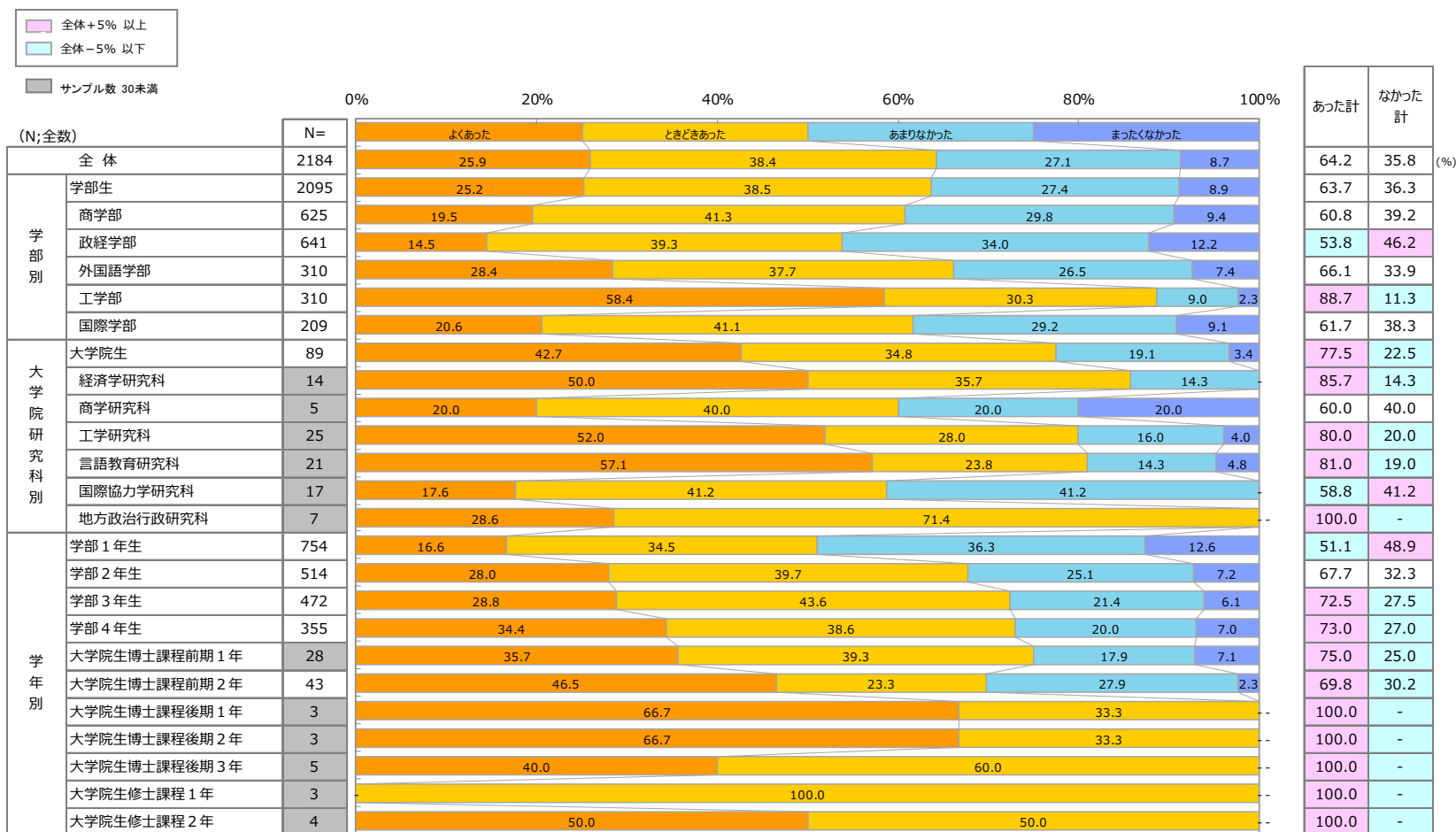
- ・学生同士が議論する授業が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の80.6%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の19.4%を上回る。
- ・学部別では、各学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。
「あった計」をみると、国際学部が87.1%（全体より+6.5pt）で最も高く、
商学部が84.5%（全体より+3.9pt）で続く。また大学院生は「あった計」が89.9%。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と学年が上がるにつれ「あった計」が上がる。



演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業有無

Q9.演習、実験、実習、フィールドワークなどを通して体験する授業はありましたか。(SA)

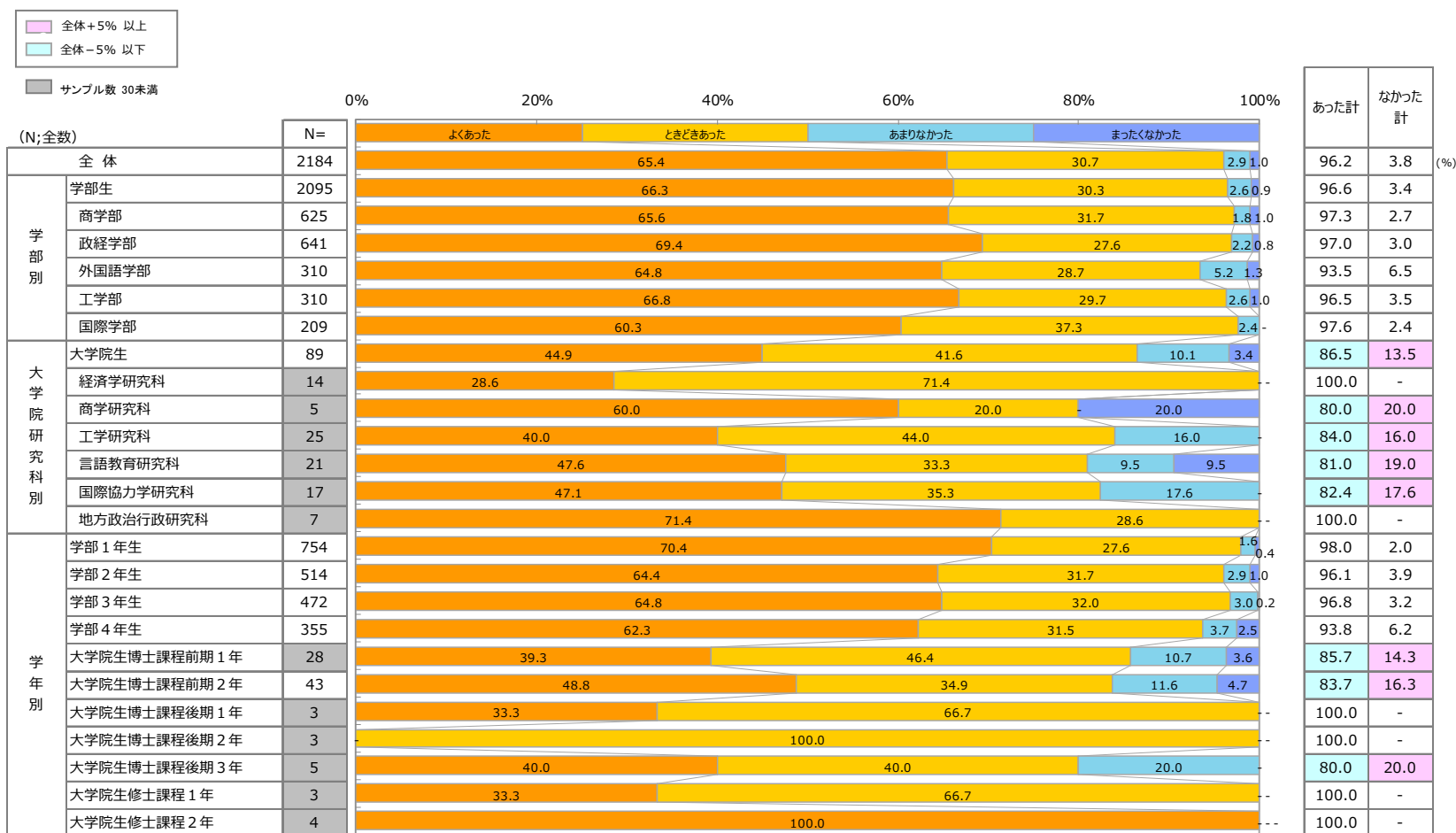
- ・演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の64.2%で、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の35.8%を上回る。
- ・学部別では、各学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。なお、「なかった計」は、全体に比べ政経学部で10pt以上上回っている。「あった計」をみると、工学部が88.7%（全体より+24.5pt）で最も高く、外国語学部が66.1%（全体より+1.9pt）で続く。また大学院生は「あった計」が77.5%。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と学年が上がるにつれ「あった計」が上がる。



定期的な小テスト・レポートのある授業有無

Q10.定期的な小テストやレポートが課せられた授業はありましたか。(SA)

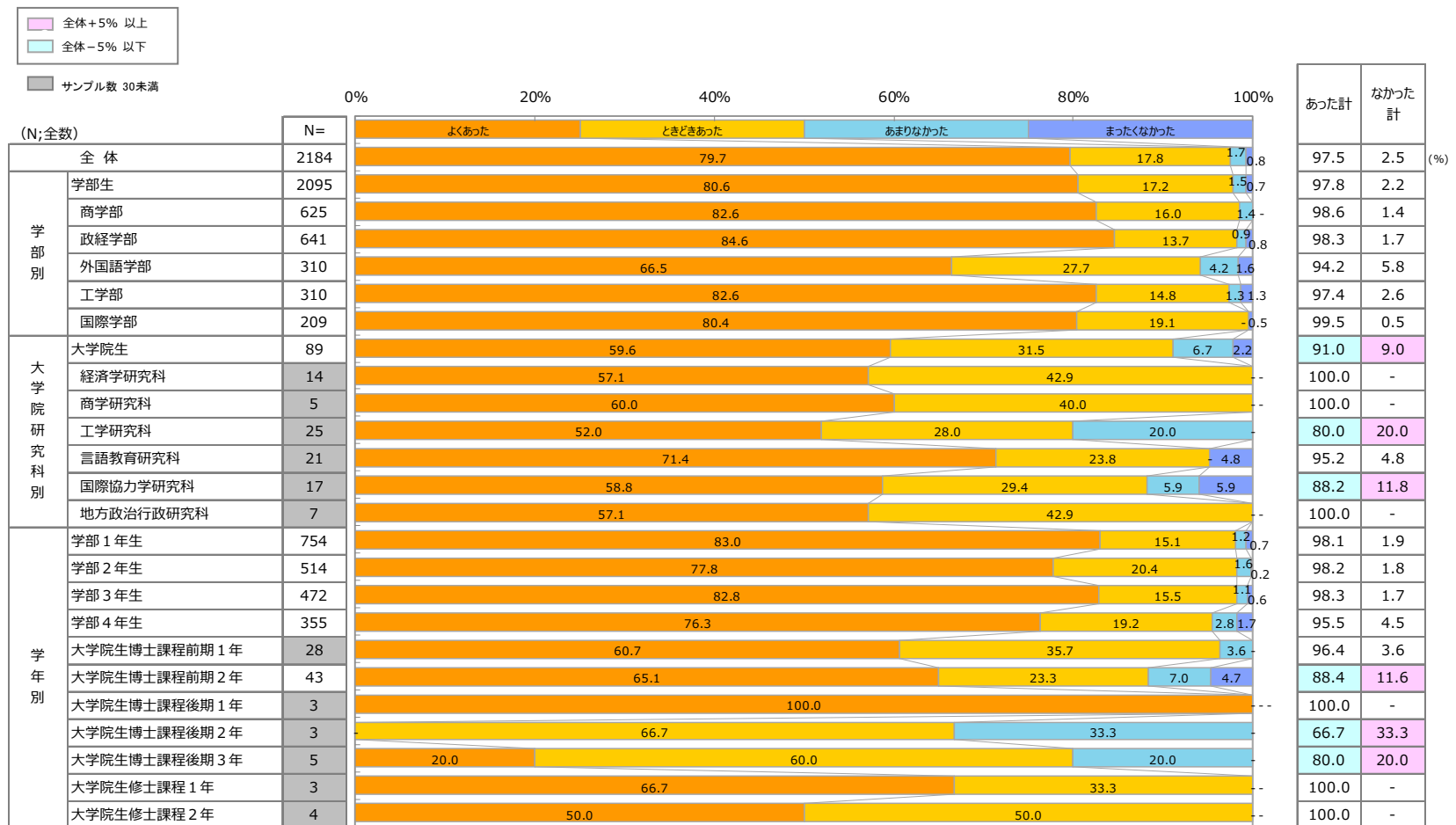
- ・定期的な小テスト・レポートのある授業が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の96.2%に達した。
- ・各学部をみても「あった計」は93%以上。
また、大学院生の「あった計」は86.5%。
- ・学年別で「あった計」をみると、学部1年生が98.0%で最も高く、続いて3年生の96.8%となった。



Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業有無

Q11.Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業はありましたか。(SA)

- ・ Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の97.5%に達した。
- ・ 各学部をみても「あった計」は94%以上。
また、大学院生の「あった計」は91.0%。
- ・ 学年別で「あった計」をみると、学部1～3年生が98%台。4年生も95.5%。

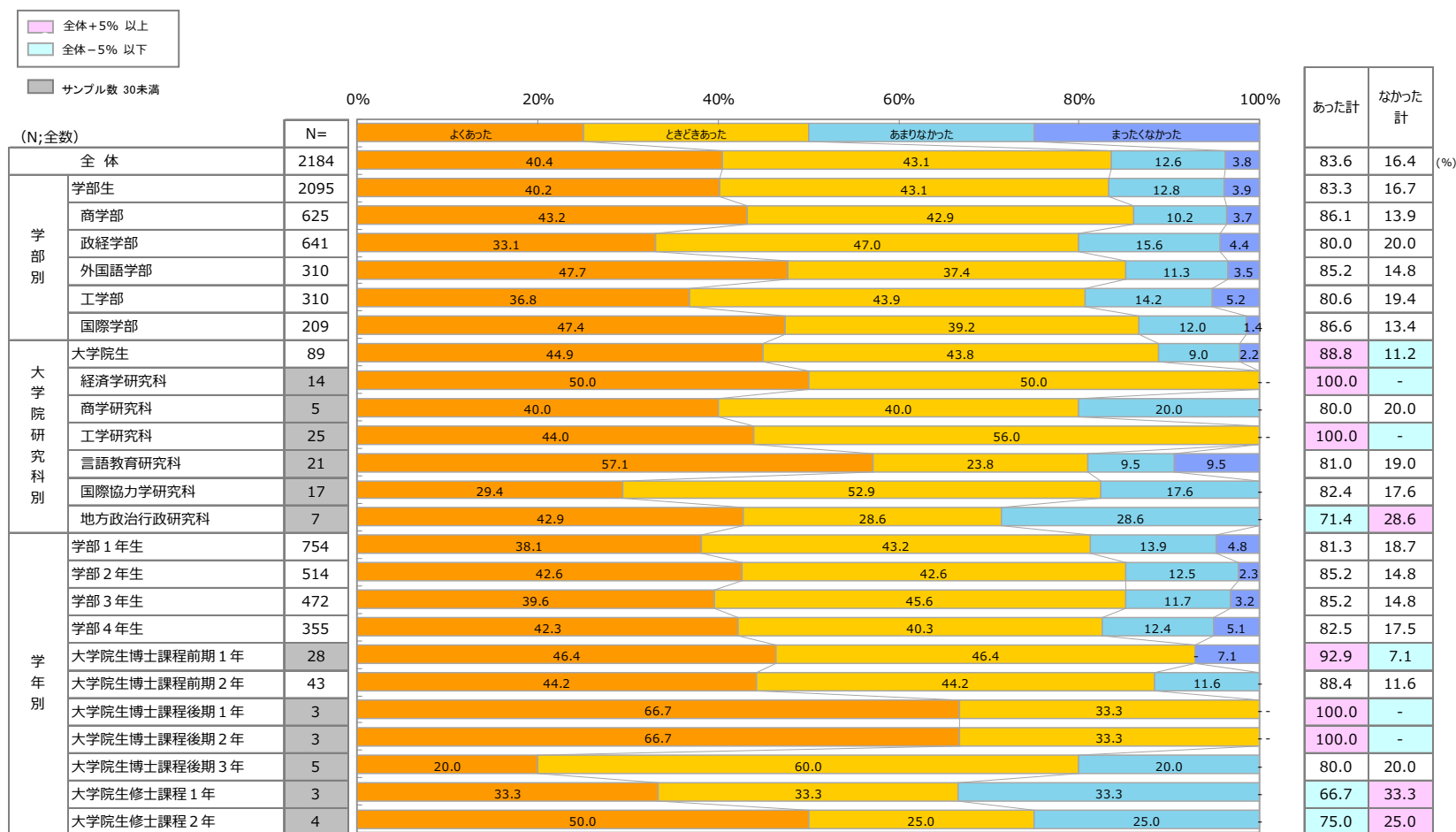


授業時間外の学修態度

他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験有無

Q12.他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強したことがありますか。(SA)

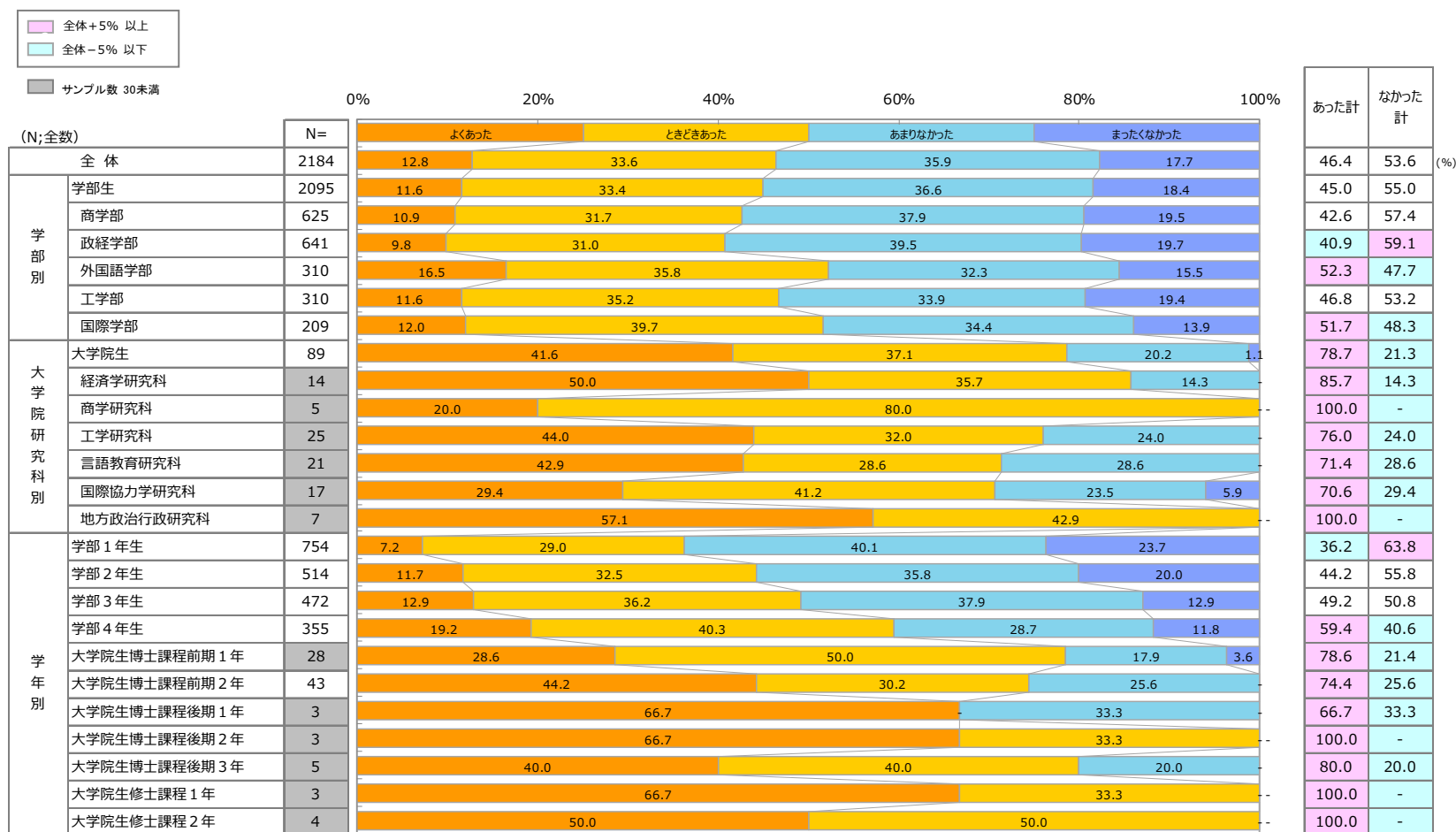
- ・他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の83.6%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の16.4%を上回る。
- ・学部別では、各学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。
「あった計」をみると、国際学部が86.6%（全体より+3.0pt）で最も高い。大学院生は「あった計」が88.8%。
- ・学年別で「あった計」をみると、学部2年生と3年生が85.2%で、1年生と4年生より高い。



教職員への学修に関する相談経験有無

Q13. 教職員に学修に関する相談をしたことがありましたか。(SA)

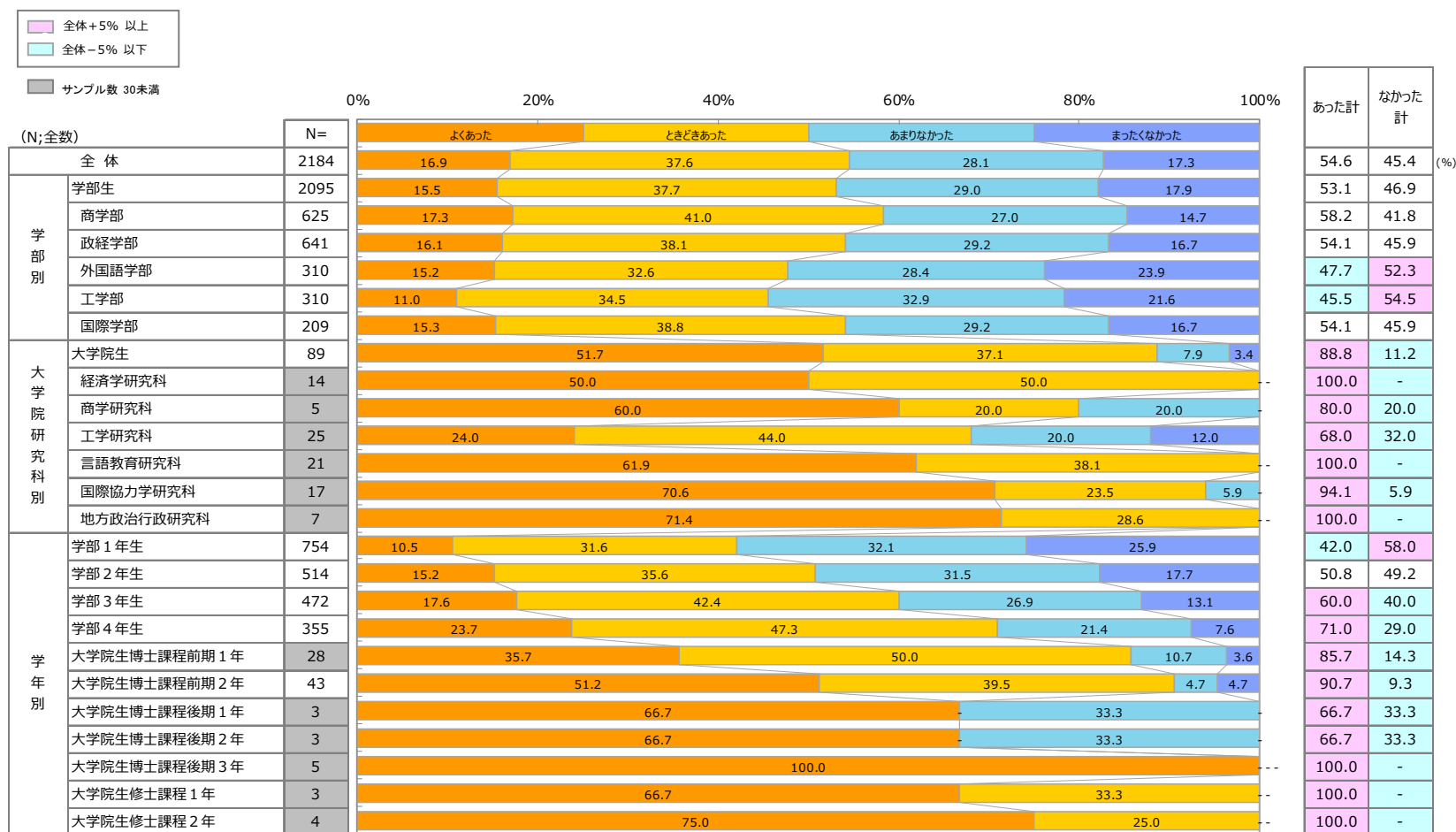
- ・教職員への学修に関する相談経験が「あった計（よくあった＋ときどきあった）」は全体の46.4%と、「なかった計（あまりなかった＋まったくなかった）」の53.6%より下回る結果。
- ・学部別では、外国語学部、国際学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。「あった計」をみると、外国語学部が52.3%（全体より＋5.9pt）で最も高い。大学院生は「あった計」が78.7%と、学部生よりも高い。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「あった計」が上がる。



授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験の有無

Q14.授業や課題のために図書館で資料・文献を調べたことがありましたか。(SA)

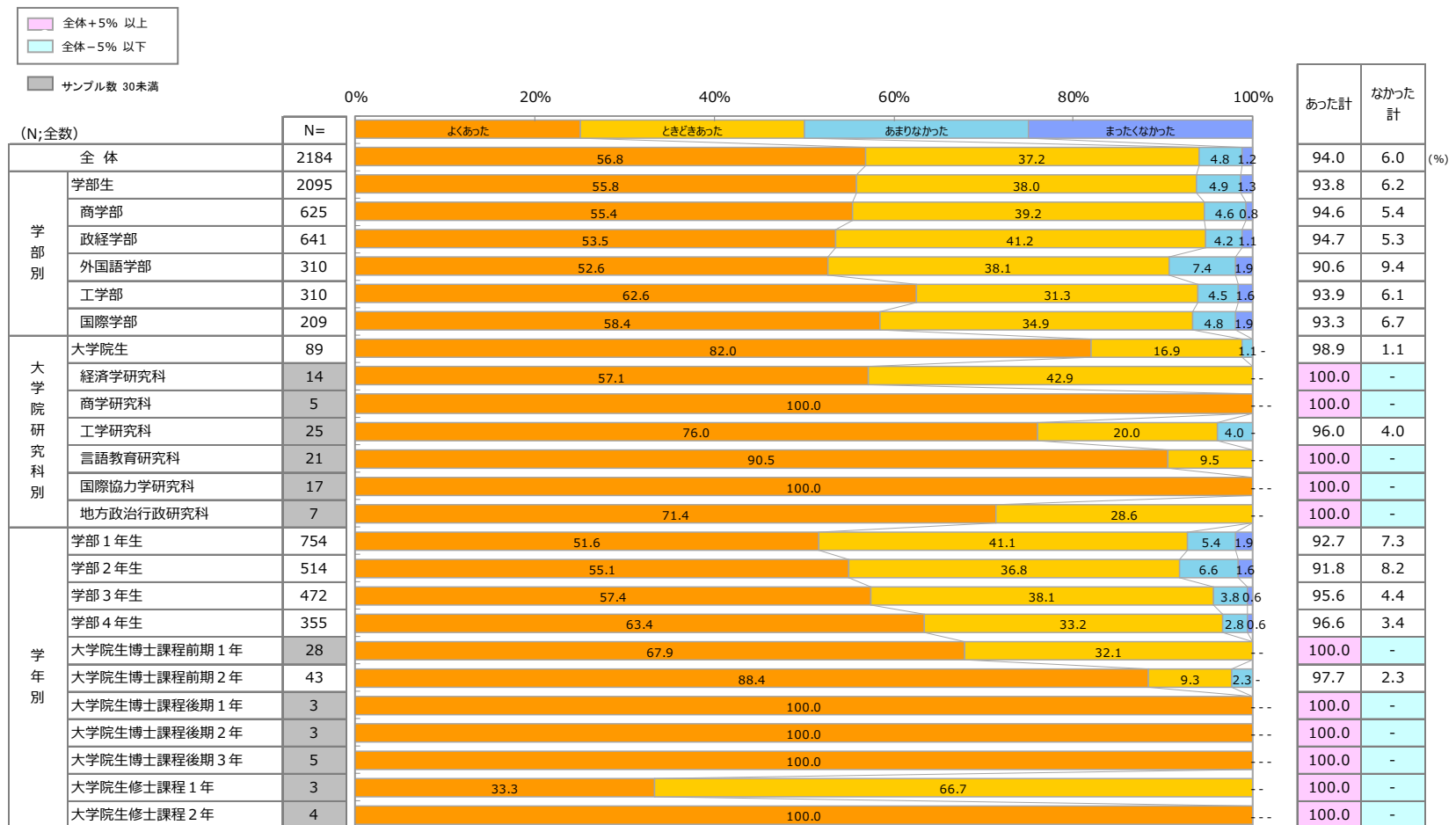
- ・授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験が「あった計（よくあった＋ときどきあった）」は全体の54.6%と、「なかった計（あまりなかった＋まったくなかった）」の45.4%を上回る。
- ・学部別では、商学部、政経学部、国際学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。「あった計」をみると、商学部が58.2%（全体より+3.6pt）で最も高い。大学院生は「あった計」が88.8%と、学部生よりも高い。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「あった計」が上がる。



授業や課題のためインターネットでの情報収集経験有無

Q15.授業や課題のためにインターネットで情報を集めたりしたことがありましたか。(SA)

- ・授業や課題のためインターネットでの情報収集経験が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の94.0%に達している。
- ・各学部をみても「あった計」は90%以上。
大学院生は「あった計」が98.9%に達する。
- ・学年別で「あった計」をみると、学部4年生が96.6%で最も高く、続いて3年生の95.6%となった。

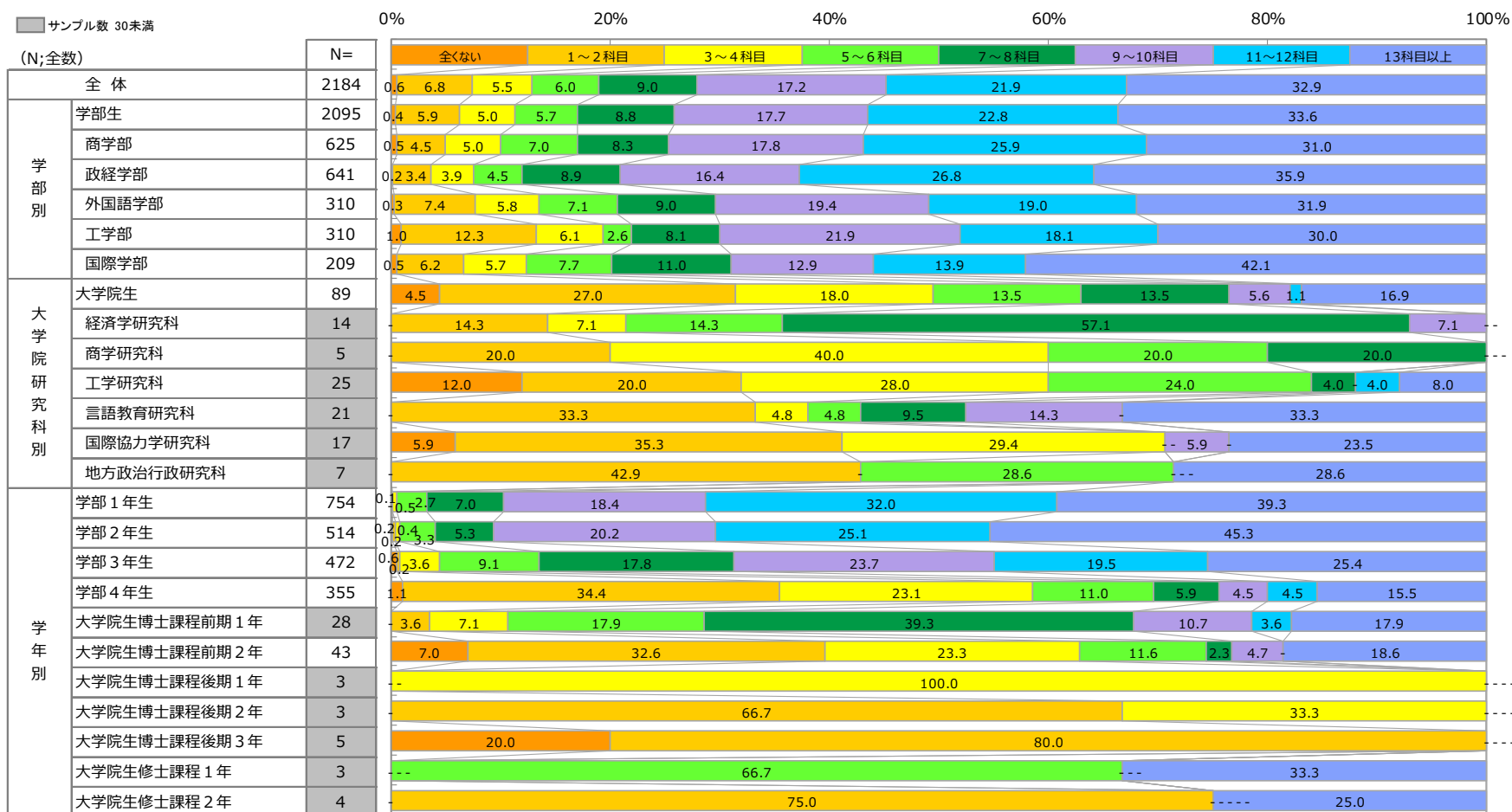


本年度の週当たりの
学修等時間

週当たりの授業出席科目数

Q16.どの程度授業に出席しましたか。(SA)

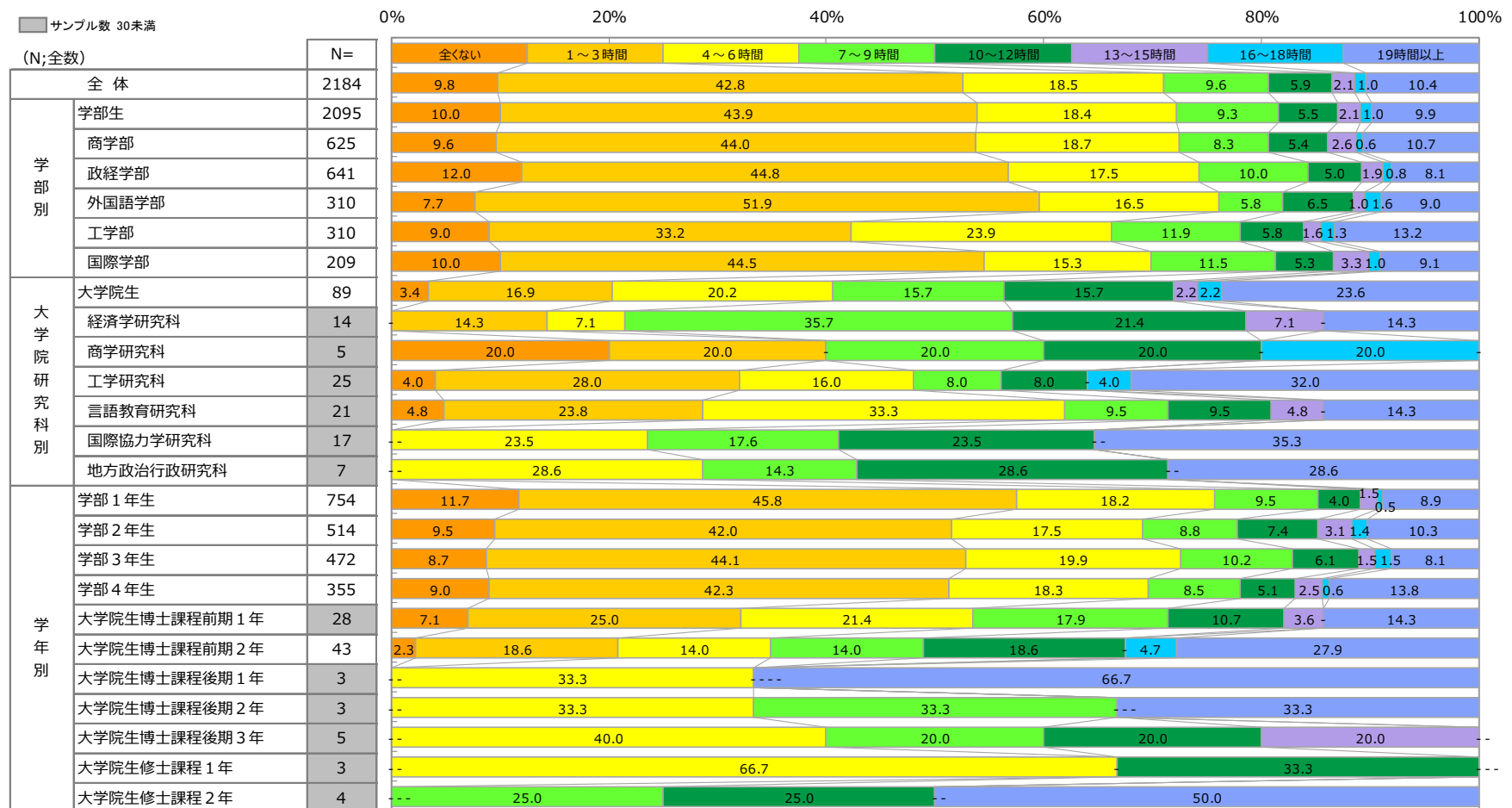
- ・週当たりの授業出席科目数は「13科目以上」が全体の32.9%で最も多い。
「11～12科目」が21.9%、「9～10科目」が17.2%で続く。
- ・学部別では、全ての学部で「13科目以上」が最も多く、国際学部が42.1%で最も高い。
大学院生は「1～2科目」が27.0%と最も多く、以降、「3～4科目」が18.0%、「13科目以上」が16.9%と続く。
- ・学年別で学部生をみると、学部1～3年生は「13科目以上」が最も多い。
4年生では「1～2科目」が34.4%で最も多い。



週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間

Q17.授業時間以外に授業と関連した学修や経験をどの程度しましたか。(SA)

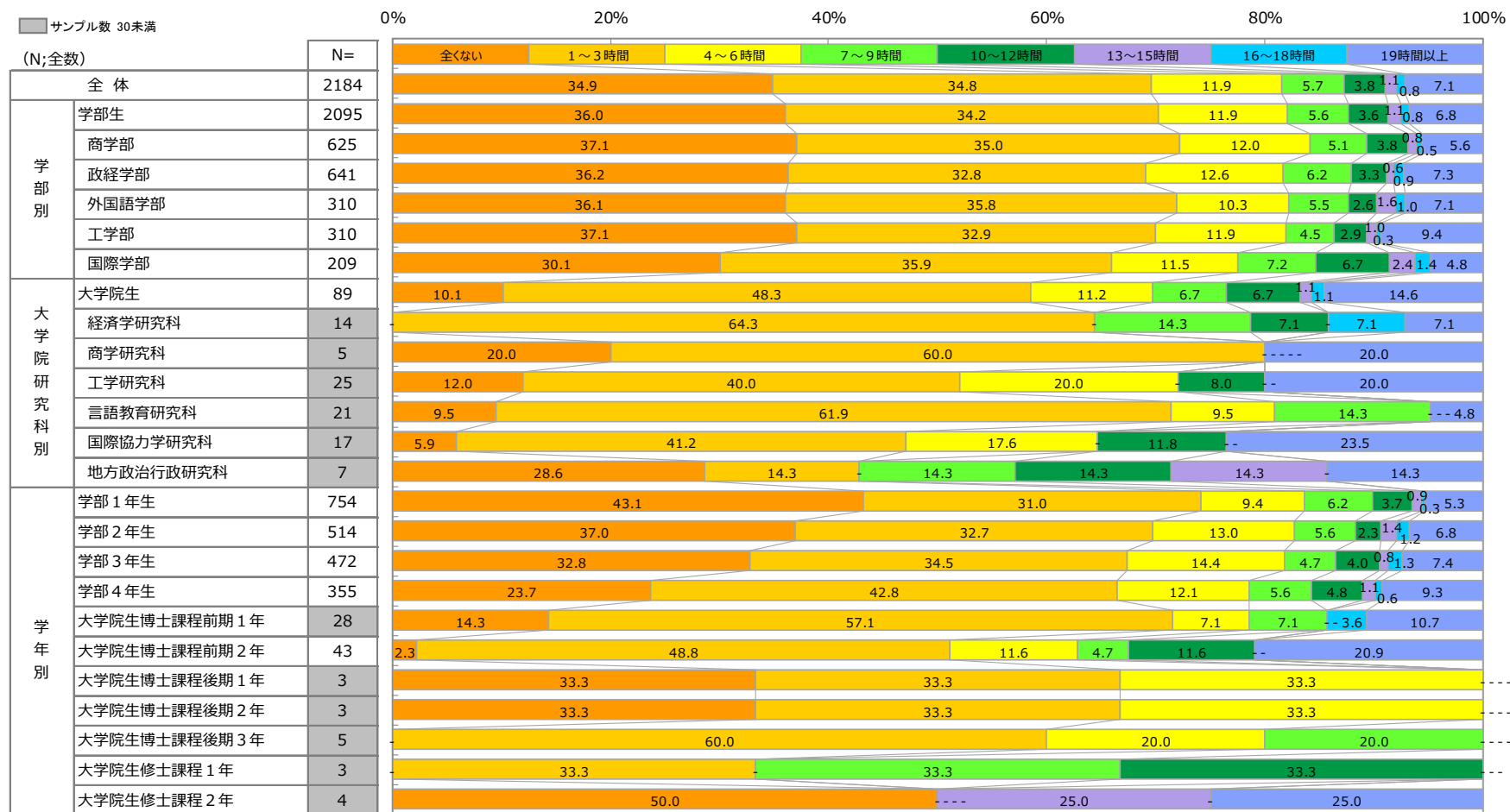
- ・週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間は全体でみると、「1～3時間」が42.8%で最も多い。以降、「4～6時間」が18.5%、「19時間以上」が10.4%で続く。なお「全くない」は9.8%。
- ・学部別では、全ての学部で「1～3時間」が最も多く、外国語学部が51.9%で最も高い。なお、工学部は「19時間以上」が13.2%で他の学部よりやや高い。大学院生は「19時間以上」が23.6%で最も多く、「4～6時間」が20.2%と続く。
- ・学年別では、学部1年生から4年生までどの学年でも「1～3時間」が最も多い。



週当たりの授業と関連しない読書時間

Q18.授業と関連しない読書をどの程度しましたか（マンガ・雑誌を除く）。（SA）

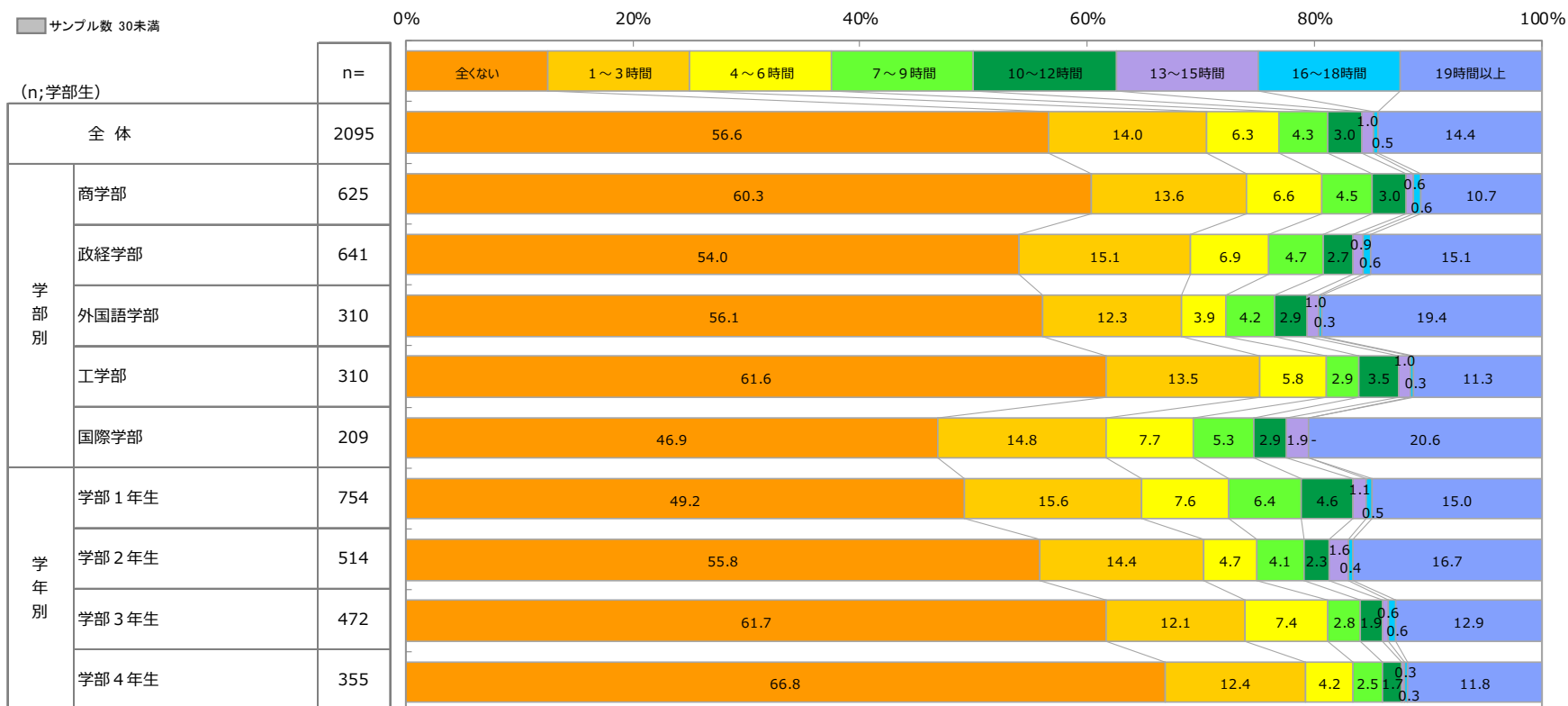
- ・週当たりの授業と関連しない読書時間は全体でみると、「1～3時間」が34.8%で最も多い（「全くない」を除く）。
- ・学部別で、1時間以上の合計をみると、国際学部（69.9%）が最も時間を割いており、外国語学部（63.9%）が続く。大学院生も「1～3時間」（48.3%）が最も多いが、「10～12時間」、「19時間以上」でも学部生より高く、学部生より時間を割いていることが窺える。
- ・学年別では、学部1年生から4年生までどの学年でも「1～3時間」が最も多い（「全くない」を除く）。



週当たりの部活動・サークル活動参加時間

Q19.どの程度部活動やサークル活動に参加しましたか。
(SA)

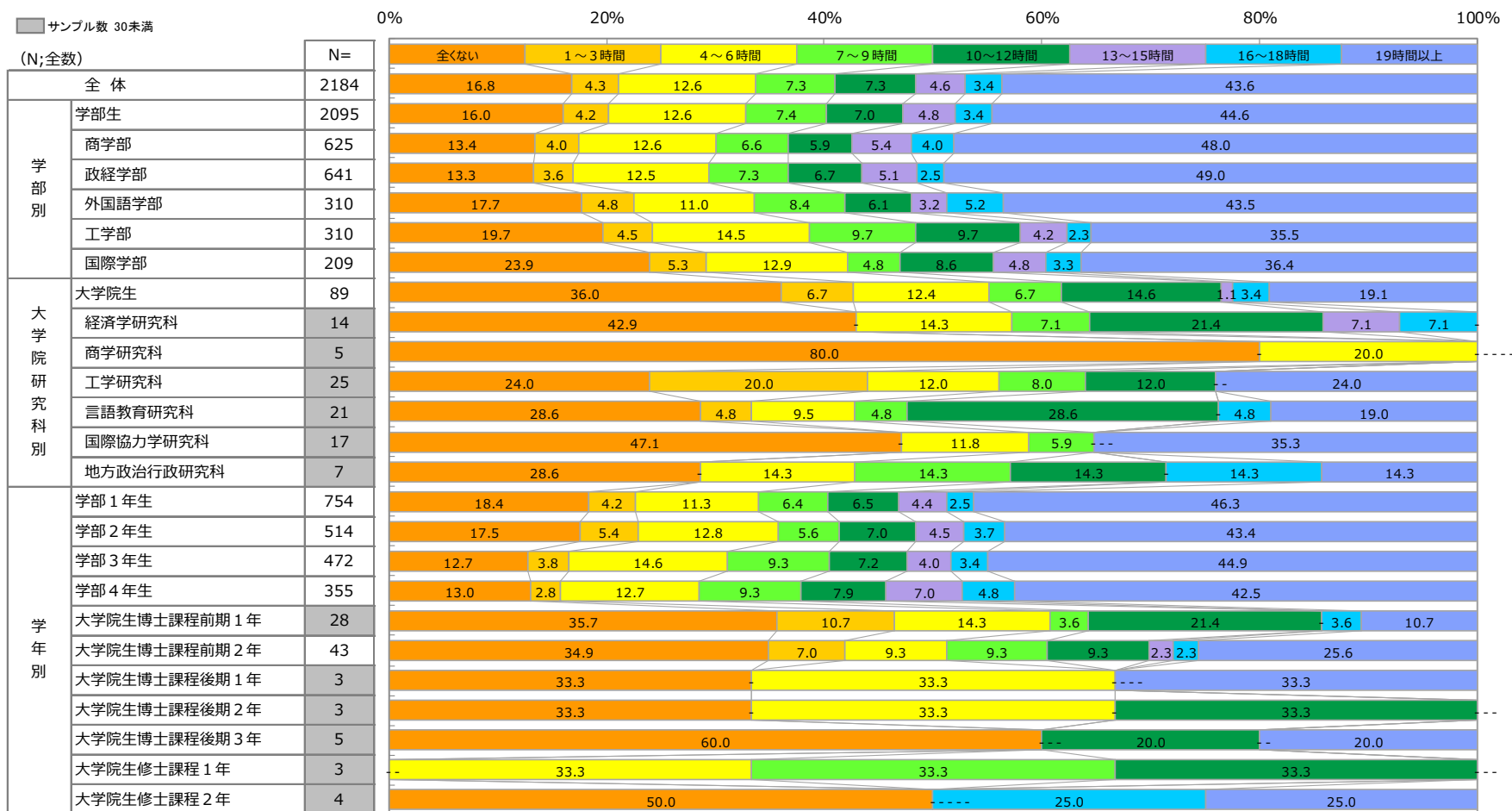
- ・学部生の週当たりの部活動・サークル活動参加時間は全体でみると、「全くない」を除いて、「19時間以上」が14.4%で最も多い。「1～3時間」が14.0%で続く。
- ・学部別で、1時間以上の合計をみると、国際学部（53.2%）が最も時間を割いており、政経学部（46.0%）が続く。「19時間以上」では、外国語学部、国際学部が他の学部と比べてやや高い。
- ・学年別では、学部1年生の1時間以上の部活動・サークル活動の参加が最も多く（50.8%）、2年生（44.2%）と続く。



週当たりのアルバイト・就労時間

Q20.どの程度アルバイトや仕事をしましたか。(SA)

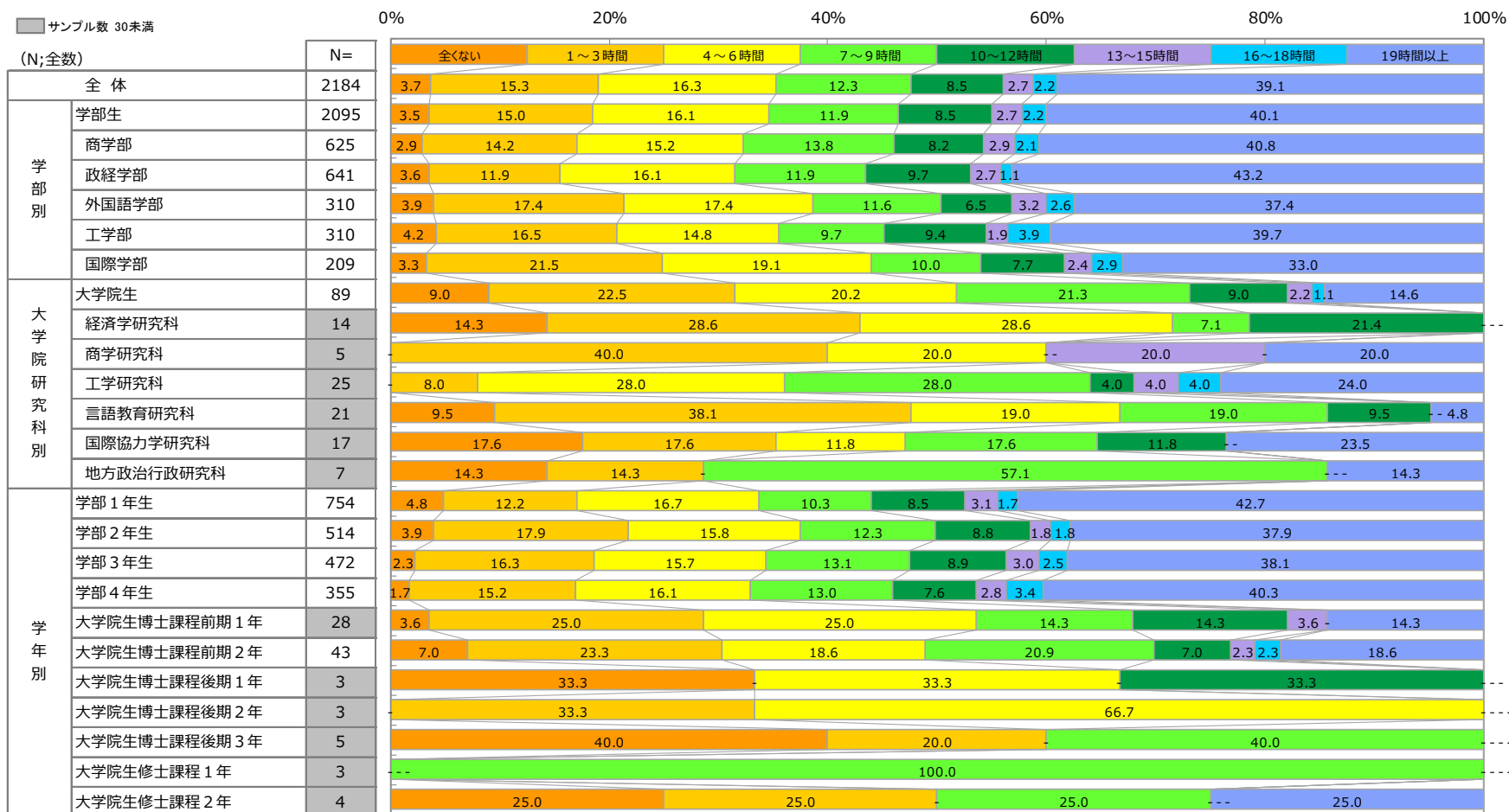
- ・週当たりのアルバイト・就労時間は全体でみると、「19時間以上」が43.6%で最も多い。「4～6時間」が12.6%、「7～9時間」と「10～12時間」が7.3%で続く(「全くない」を除く)。
- ・学部別で、1時間以上の合計をみると、政経学部(86.7%)が最も時間を割いており、商学部(86.5%)が続く。学部生は全ての学部で「19時間以上」が最も多く、政経学部(49.0%)、商学部(48.0%)、外国語学部(43.5%)、国際学部(36.4%)、工学部(35.5%)の順。大学院生も、「全くない」を除いて「19時間以上」が19.1%で最も多い。
- ・学年別では、学部1年生から4年生までどの学年でも「19時間以上」が最も多い。



週当たりの個人的な趣味活動時間

Q21.どの程度個人的な趣味活動をしましたか。(SA)

- ・週当たりの個人的な趣味活動時間は全体でみると、「19時間以上」が39.1%で最も多い。「4～6時間」が16.3%、「1～3時間」が15.3%で続く。
- ・学部別で、1時間以上の合計をみると、学部間での差はさほどない（いずれも95%以上）。
学部生は全ての学部で「19時間以上」が最も多い。
大学院生は「1～3時間」が22.5%で最も多い。
- ・学年別では、学部1年生から4年生までどの学年でも「19時間以上」が最も多い。

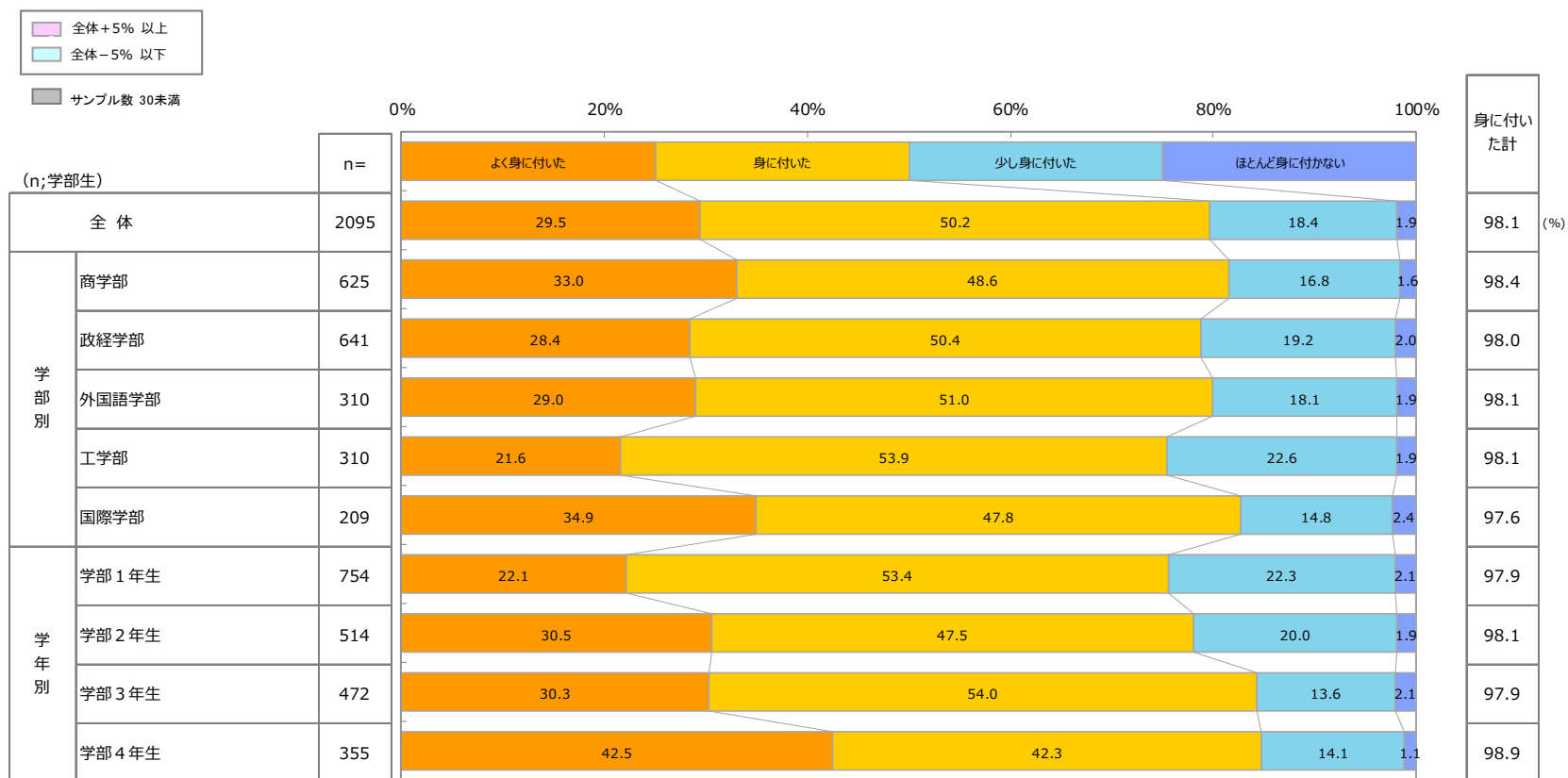


入学時と比べ、身に付いた
学修成果・経験

一般的な教養

Q22.一般的な教養が身に付き了吗。(SA)

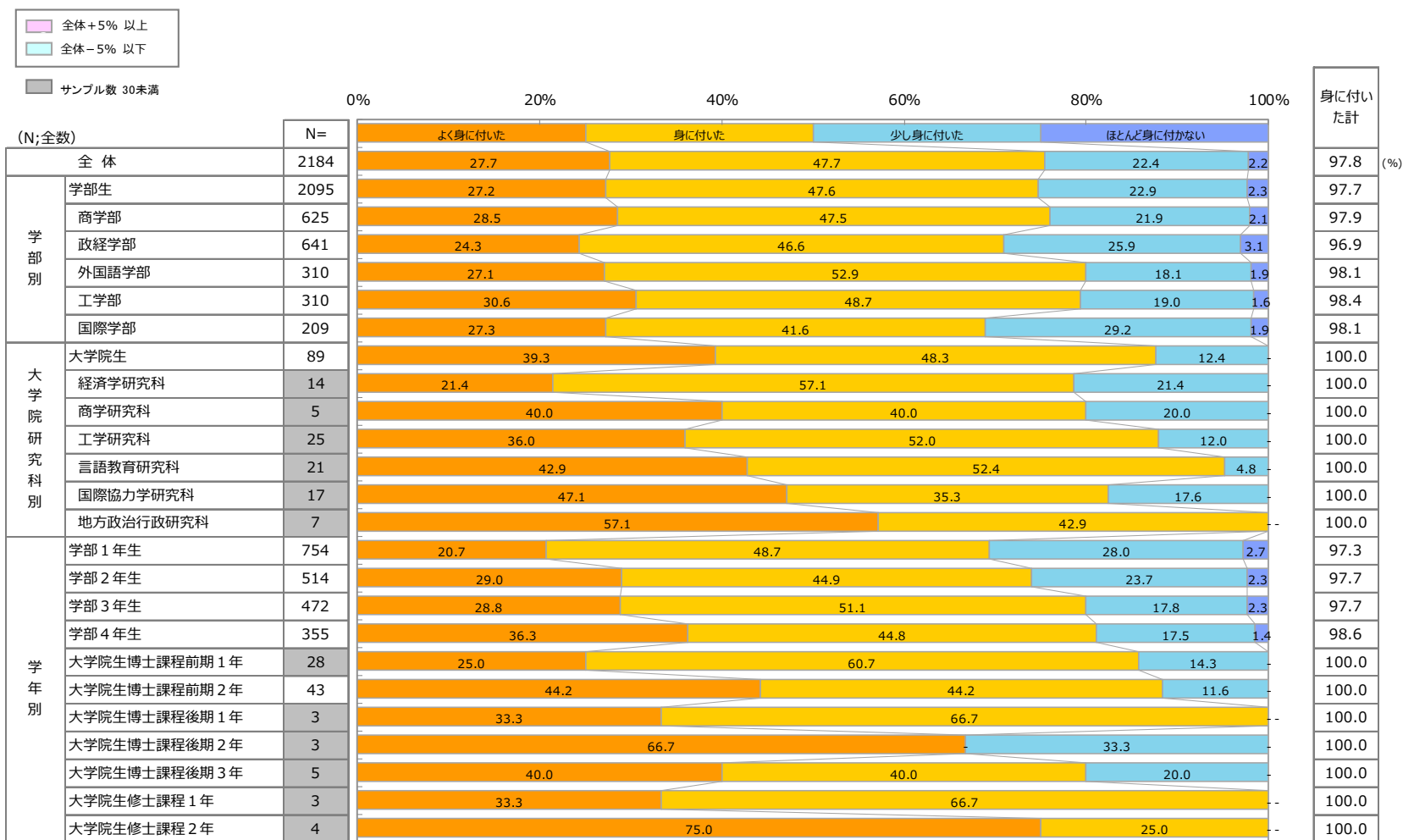
- ・学部生の一般的な教養の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の98.1%に達し、「よく身に付いた」は29.5%となった。
- ・学部別では、各学部で「身に付いた計」が95%以上。
「よく身に付いた」をみると、国際学部が34.9%で最も高く、商学部が33.0%と続く。
- ・学年別では、学部4年生は「よく身に付いた」が42.5%で最も高い。



専門分野に関する知識・技能

Q23.専門分野に関する知識・技能が身に付き了吗。
(SA)

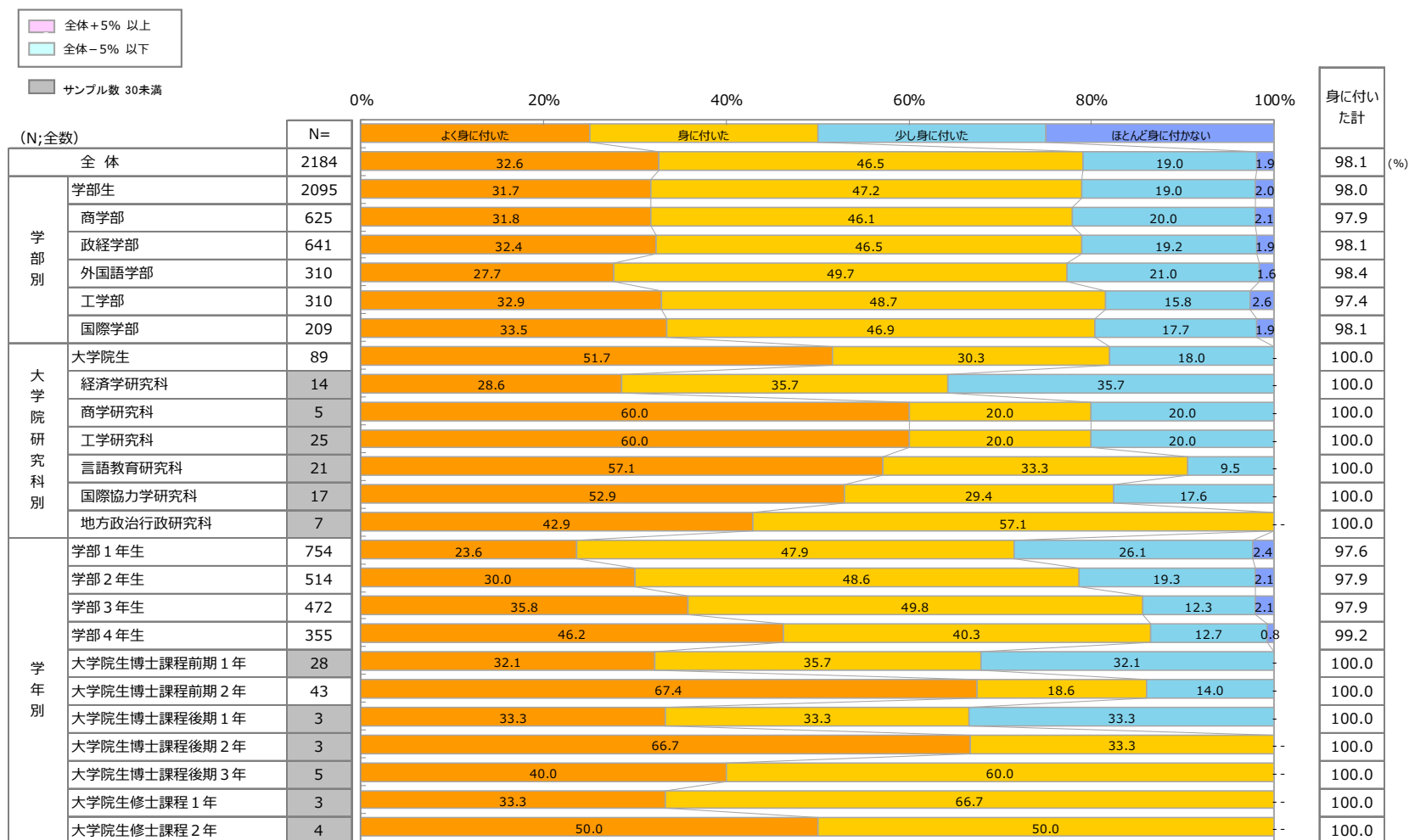
- ・専門分野に関する知識・技能の「身に付いた計（よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた）」は全体の97.8%に達し、「よく身に付いた」は27.7%となった。
- ・学部別では、各学部で「身に付いた計」が95%以上。
「よく身に付いた」は工学部が30.6%で最も高く、商学部が28.5%と続く。
大学院生は「身に付いた計」が100.0%に達し、「よく身に付いた」が39.3%となった。
- ・学年別では、学部4年生で「よく身に付いた」が36.3%で最も高い。



情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力

Q24.情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力は身に付きましたか。(SA)

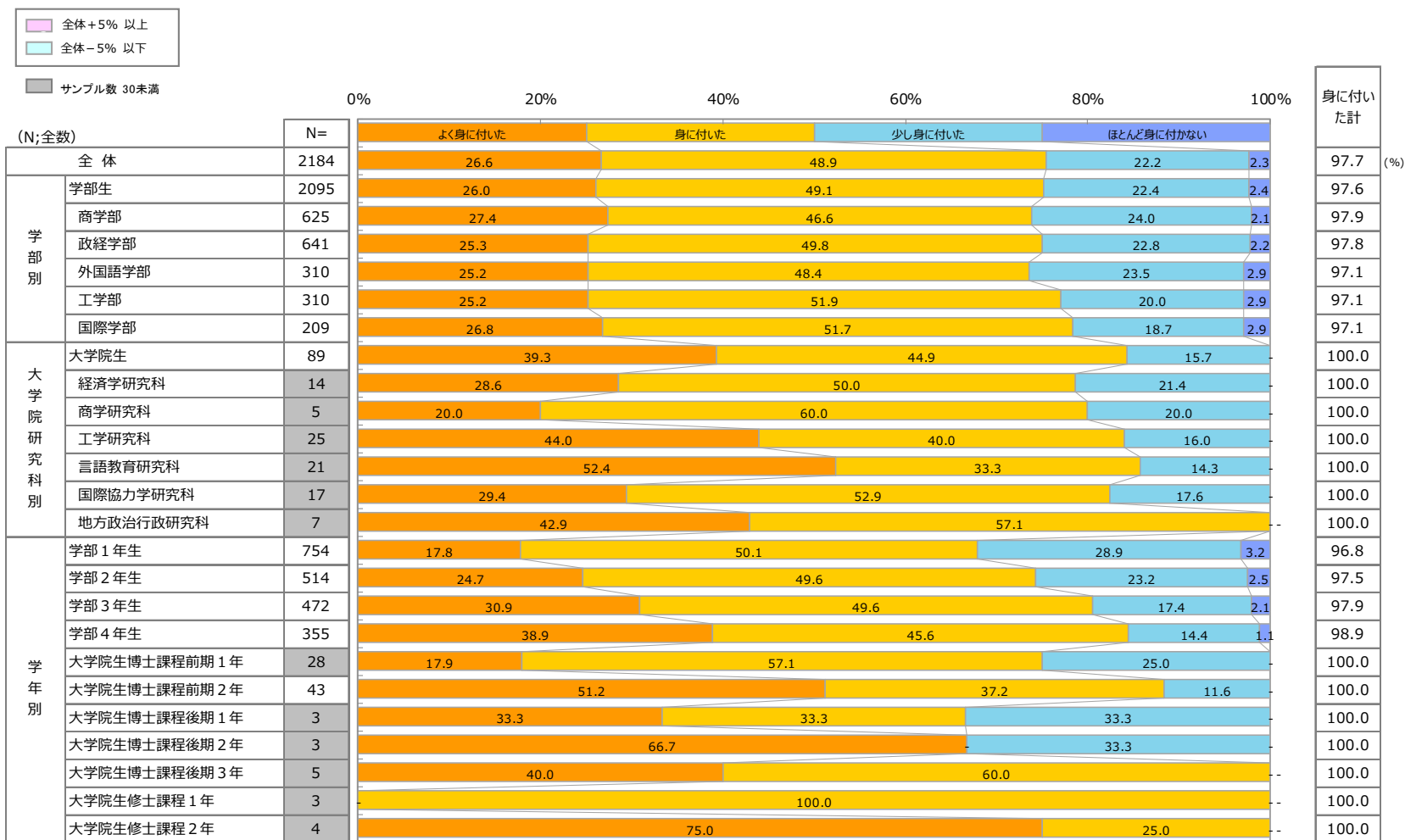
- ・情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力の「身に付いた計（よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた）」は全体の98.1%に達し、「よく身に付いた」は32.6%となった。
- ・学部別では、各学部で「身に付いた計」が95%以上。
「よく身に付いた」は国際学部が33.5%で最も高く、工学部が32.9%と続く。
大学院生は「身に付いた計」が100.0%に達し、「よく身に付いた」が51.7%となった。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がり、4年生は46.2%。



物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力

Q25.物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力は身に付きましたか。(SA)

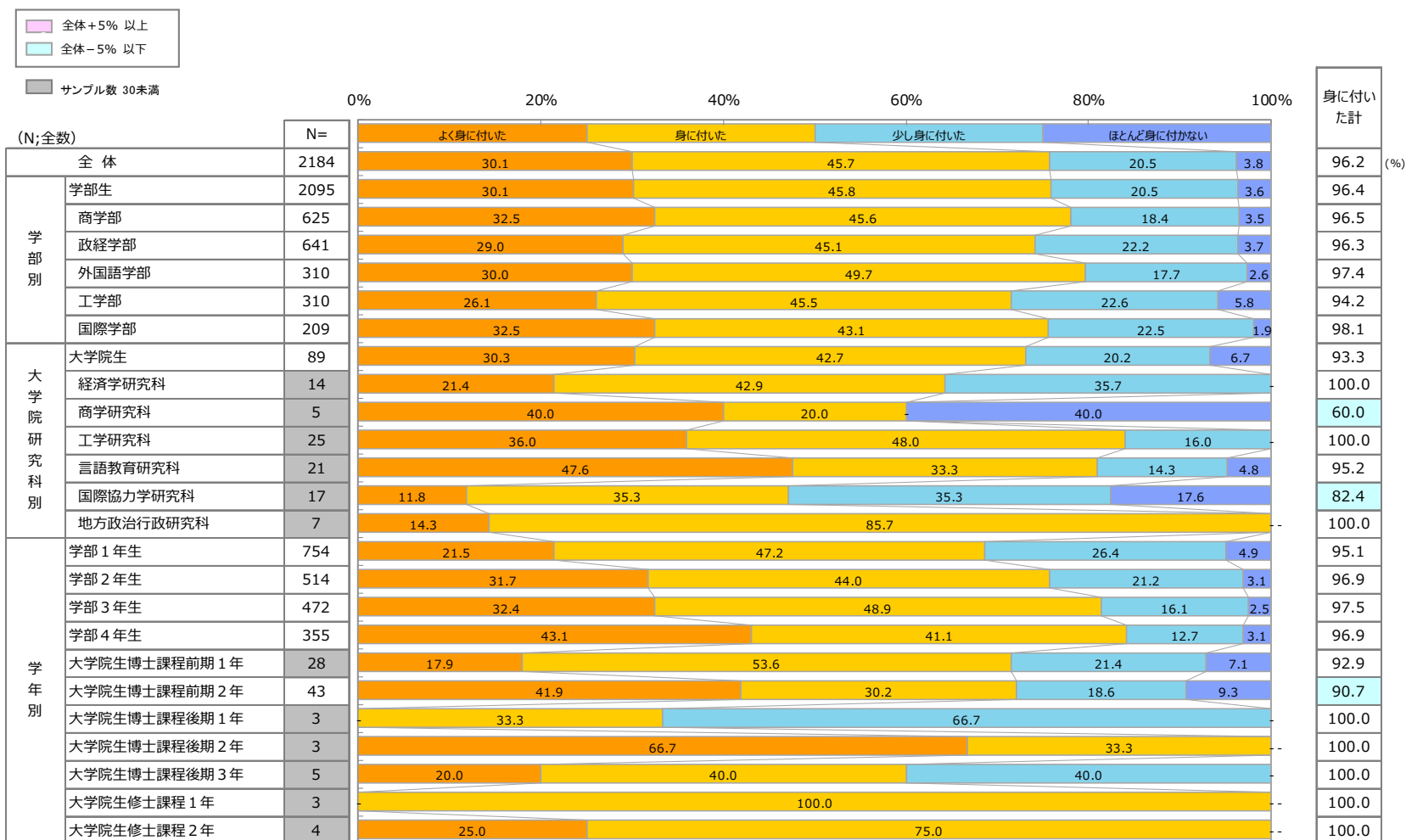
- ・物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力の「身に付いた計（よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた）」は全体の97.7%に達し、「よく身に付いた」は26.6%となった。
- ・学部別では、各学部で「身に付いた計」が95%以上。
「よく身に付いた」は商学部が27.4%で最も高く、国際学部が26.8%と続く。
大学院生は「身に付いた計」が100.0%に達し、「よく身に付いた」が39.3%となった。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がり、4年生は38.9%。



他の人と協力して物事を進めていく力

Q26.他の人と協力して物事を進めていく力は身に付きましたか。(SA)

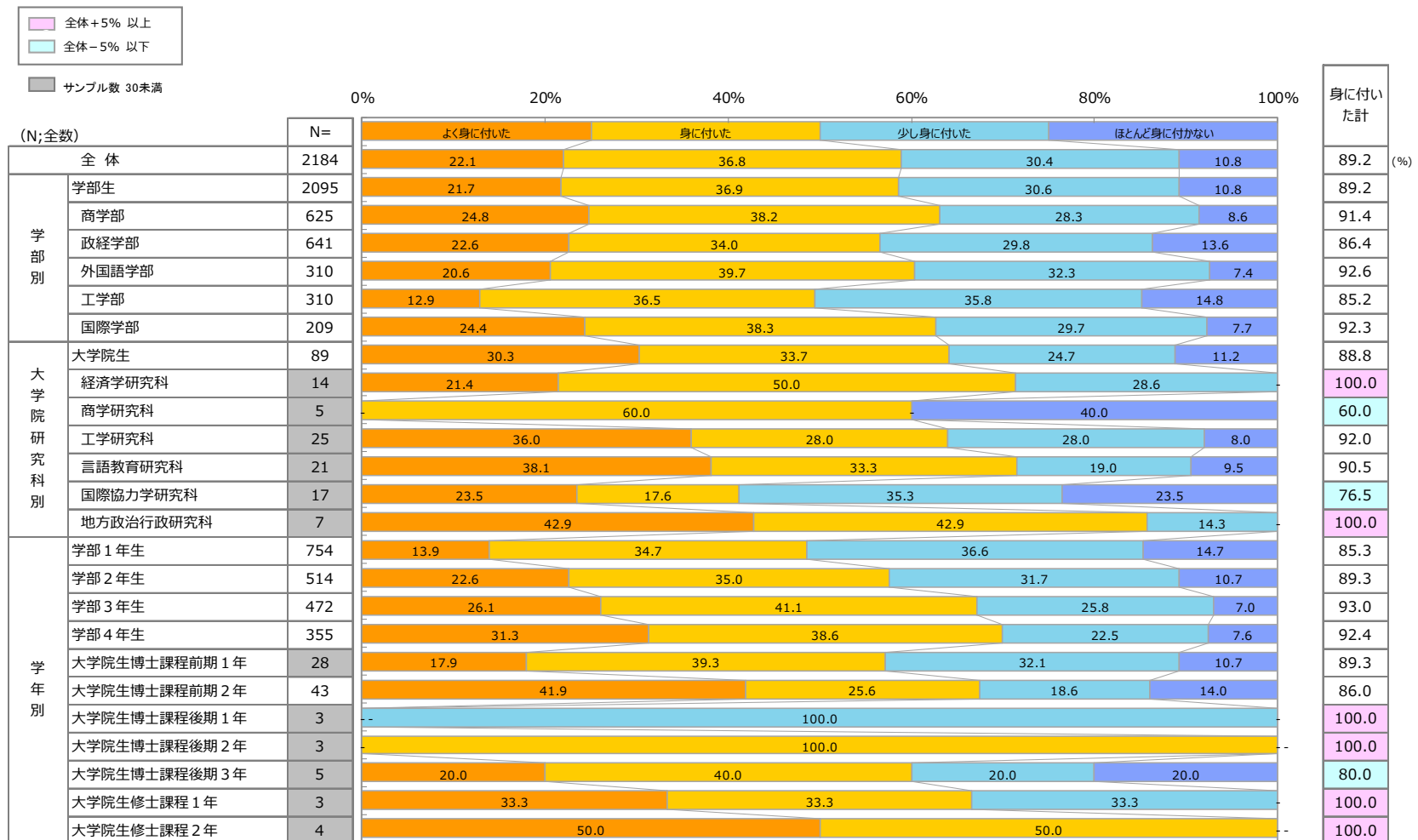
- ・他の人と協力して物事を進めていく力の「身に付いた計（よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた）」は全体の96.2%に達し、「よく身に付いた」は30.1%となった。
- ・学部別では、「身に付いた計」は国際学部が98.1%と最も高く、外国語学部が97.4%で続く。「よく身に付いた」でみると、商学部と国際学部が32.5%で最も高く、外国語学部が30.0%と続く。大学院生は「身に付いた計」は93.3%で、「よく身に付いた」は30.3%。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がり、4年生は43.1%。



必要な場合のリーダーシップを発揮できる力

Q27.必要な場合のリーダーシップを発揮できる力は身に付きましたか。(SA)

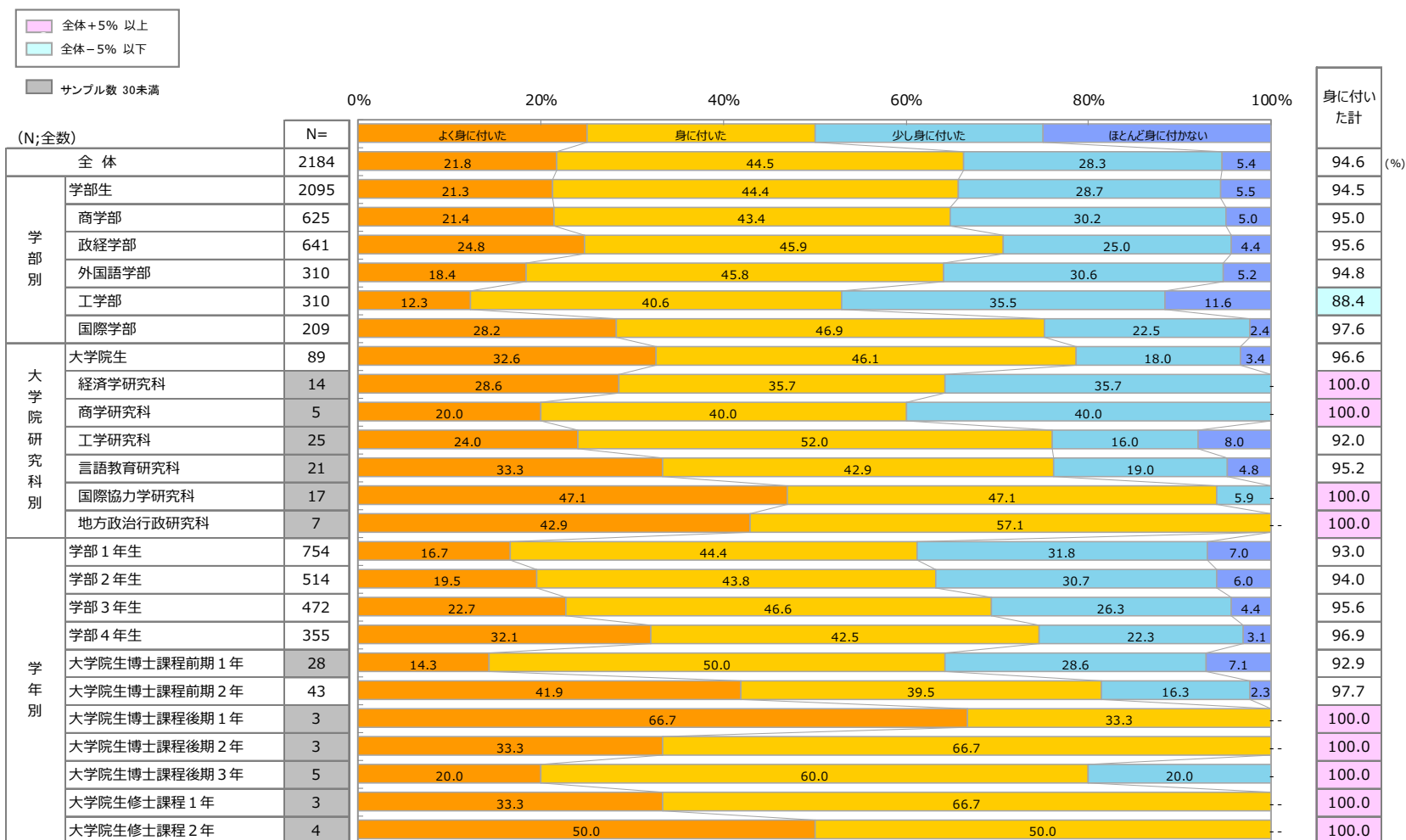
- ・必要な場合のリーダーシップを発揮できる力の「身に付いた計（よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた）」は全体の89.2%。「よく身に付いた」は22.1%となった。
- ・学部別では、「身に付いた計」は外国語学部が92.6%と最も高く、国際学部が92.3%で続く。「よく身に付いた」でみると、商学部が24.8%と最も高く、国際学部が24.4%で続く。大学院生は「身に付いた計」が88.8%で、「よく身に付いた」は30.3%。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がり、4年生は31.3%。



社会（国民・地域・国際等）が直面する課題を理解する力

Q28.社会（国民・地域・国際等）が直面する課題を理解する力は身に付きましたか。（SA）

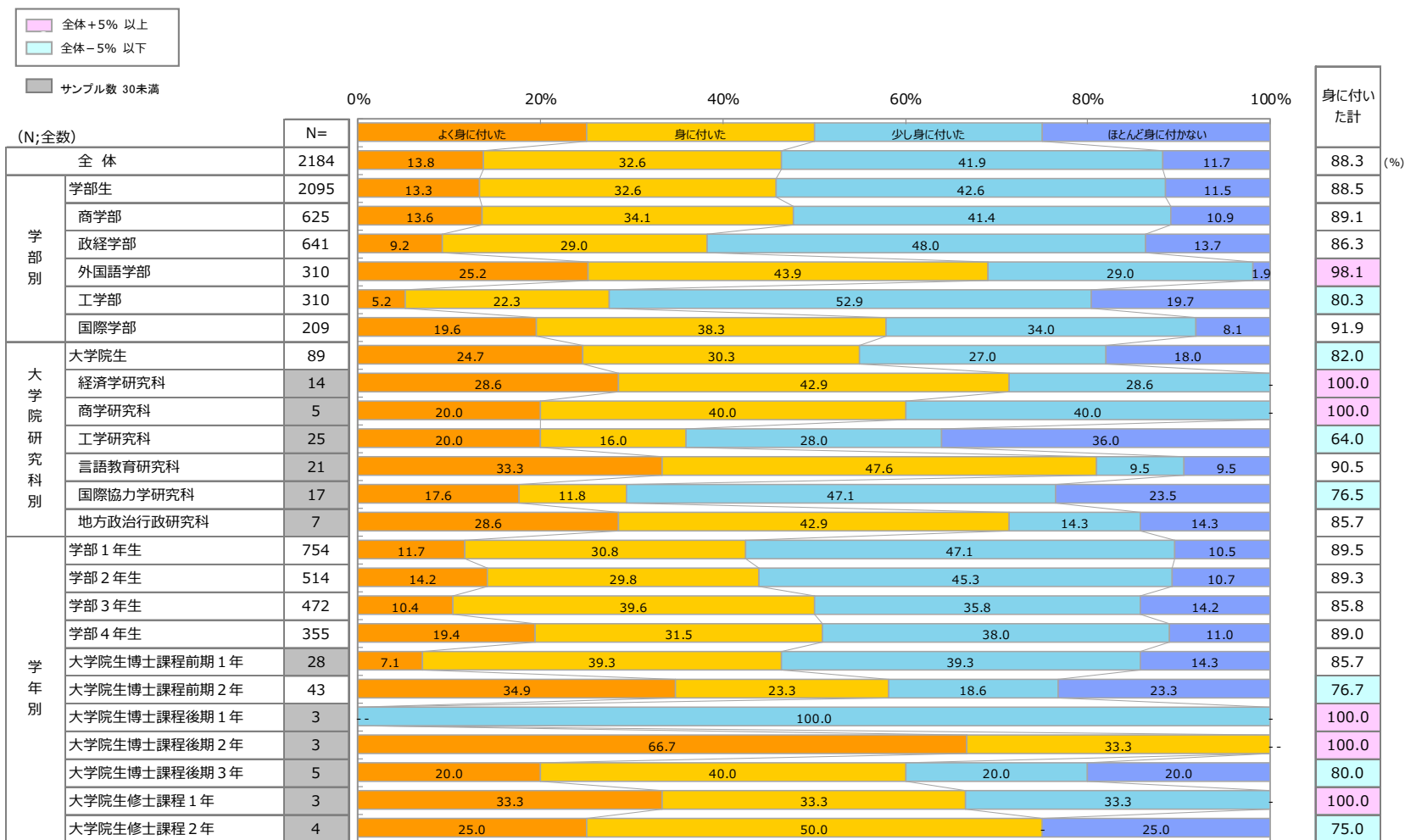
- ・社会（国民・地域・国際等）が直面する課題を理解する力の「身に付いた計（よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた）」は全体の94.6%に達し、「よく身に付いた」は21.8%となった。
- ・学部別では、「身に付いた計」は国際学部が97.6%と最も高く、政経学部が95.6%で続く。「よく身に付いた」をみても、国際学部が28.2%と最も高く、政経学部が24.8%で続く。
- ・大学院生は「身に付いた計」が96.6%に達し、「よく身に付いた」は32.6%となった。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がり、4年生は32.1%。



外国語の運用能力

Q29.外国語の運用能力は身に付きましたか。(SA)

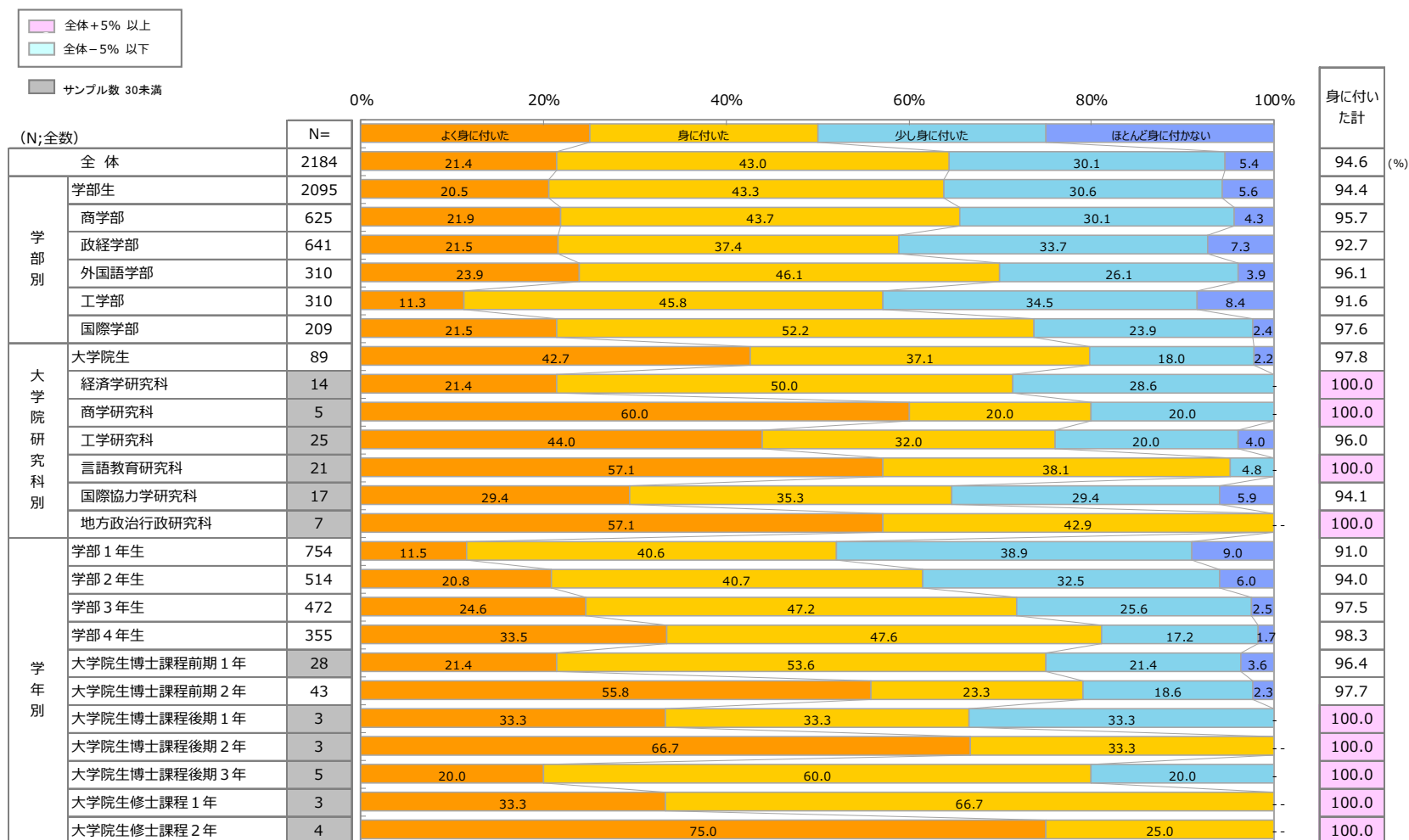
- ・外国語の運用能力の「身に付いた計（よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた）」は全体の88.3%となり、「よく身に付いた」は13.8%となった。
- ・学部別では、「身に付いた計」は外国語学部が98.1%と最も高く、国際学部が91.9%で続く。「よく身に付いた」をみても、外国語学部が25.2%と最も高く、国際学部が19.6%で続く。大学院生は「身に付いた計」が82.0%で、「よく身に付いた」は24.7%となった。
- ・学年別で学部生をみると、「よく身に付いた」で4年生は19.4%と他の学年より高め。



学修した内容をまとめて、それを発表する力

Q30.学修した内容をまとめて、それを発表する力は身に付きましたか。(SA)

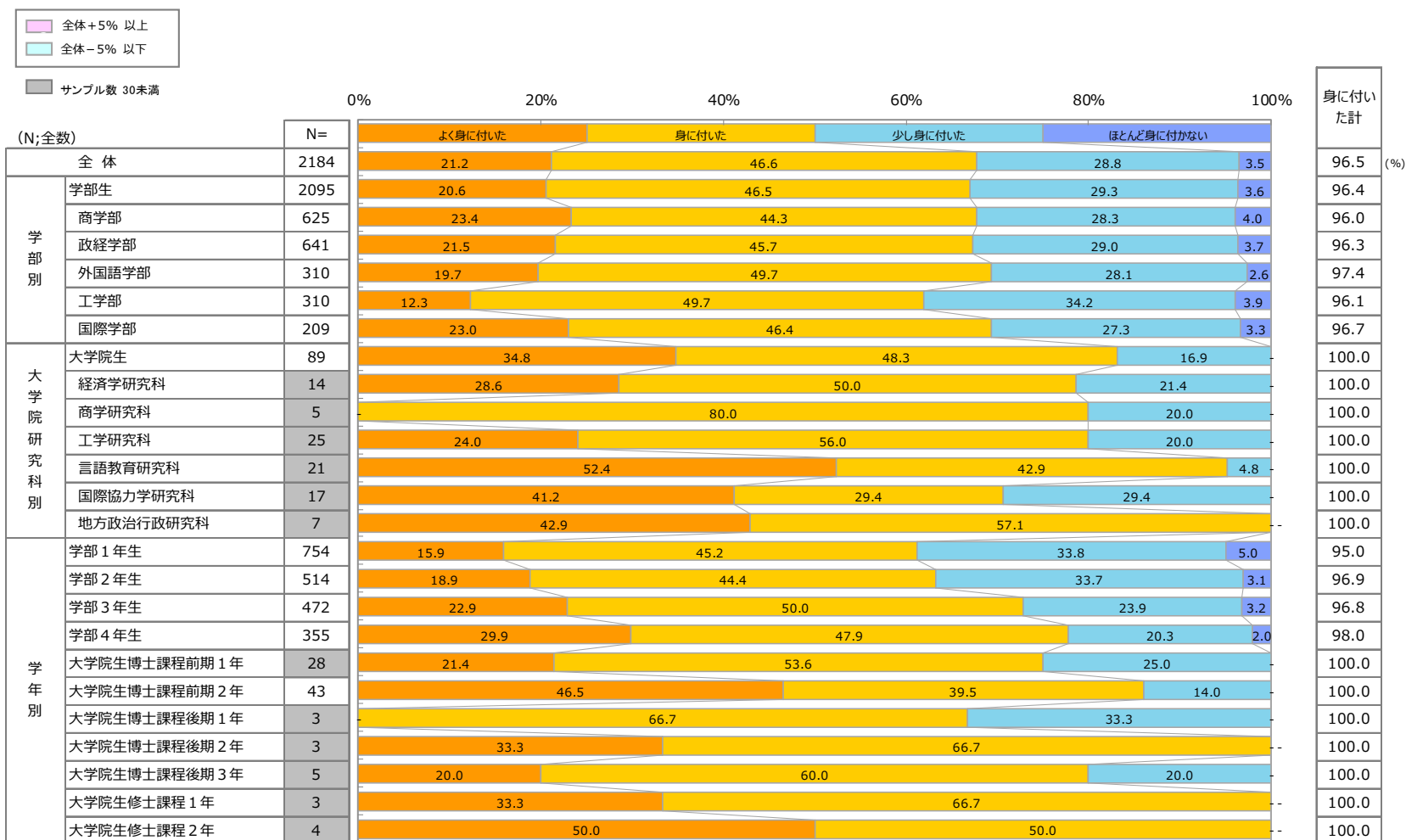
- ・学修した内容をまとめて、それを発表する力の「身に付いた計（よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた）」は全体の94.6%に達し、「よく身に付いた」は21.4%となった。
- ・学部別では、「身に付いた計」は国際学部が97.6%と最も高く、外国語学部が96.1%で続く。「よく身に付いた」をみると、外国語学部が23.9%と最も高く、商学部が21.9%で続く。
- ・大学院生は「身に付いた計」が97.8%に達し、「よく身に付いた」は42.7%となった。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がり、4年生は33.5%。



表現すべき内容を文章にして書ける力

Q31.表現すべき内容を文章にして書ける力は身に付きましたか。(SA)

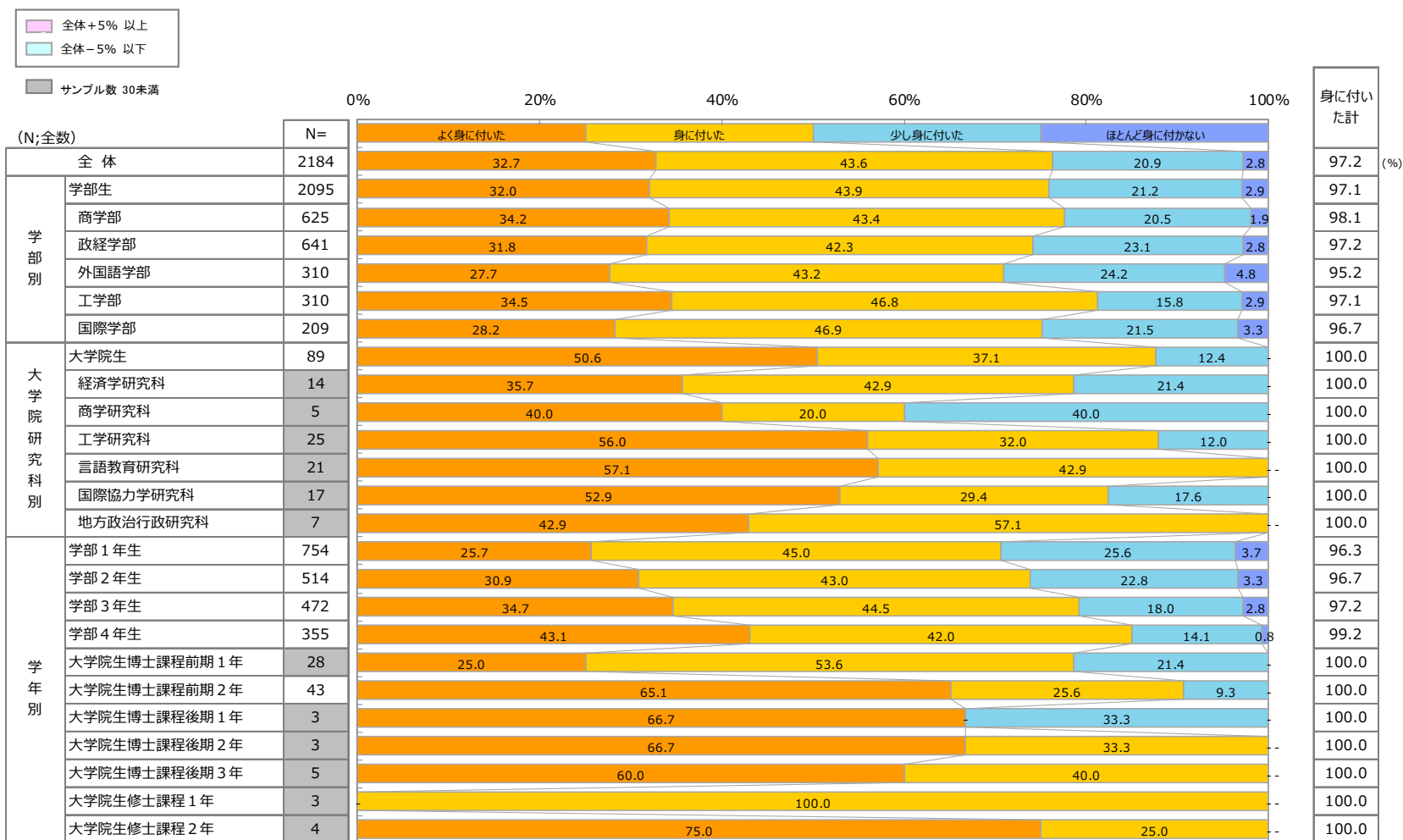
- ・表現すべき内容を文章にして書ける力の「身に付いた計（よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた）」は全体の96.5%に達し、「よく身に付いた」は21.2%となった。
- ・学部別では、どの学部でも「身に付いた計」が95%以上。
「よく身に付いた」をみると、商学部が23.4%と最も高く、国際学部が23.0%で続く。
- ・大学院生は「身に付いた計」が100.0%に達し、「よく身に付いた」は34.8%となった。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がり、4年生は29.9%。



パソコンで文書や資料を作成する力

Q32.パソコンで文書や資料を作成する力は身に付き
たか。(SA)

- ・パソコンで文書や資料を作成する力の「身に付いた計（よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた）」は全体の97.2%に達し、「よく身に付いた」は32.7%となった。
- ・学部別では、どの学部でも「身に付いた計」が95%以上。
「よく身に付いた」をみると、工学部が34.5%と最も高く、商学部が34.2%で続く。
大学院生は「身に付いた計」が100.0%に達し、「よく身に付いた」は50.6%となった。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がり、4年生は43.1%。

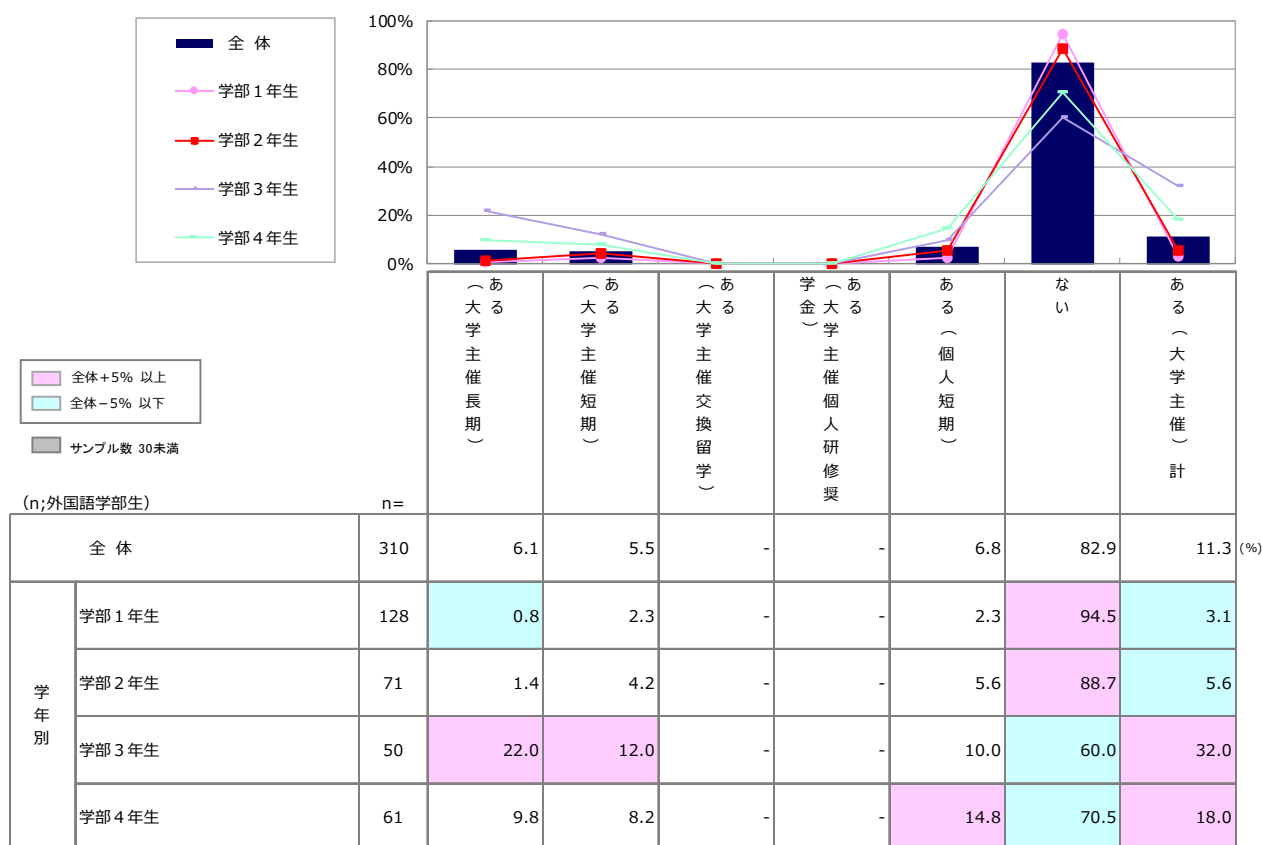


学部設問項目

海外での語学研修経験

Q33.海外で語学研修をしたことがありますか（入学以来本年度3月までの実施予定も含む）。（MA）
（外国語学部生のみ）

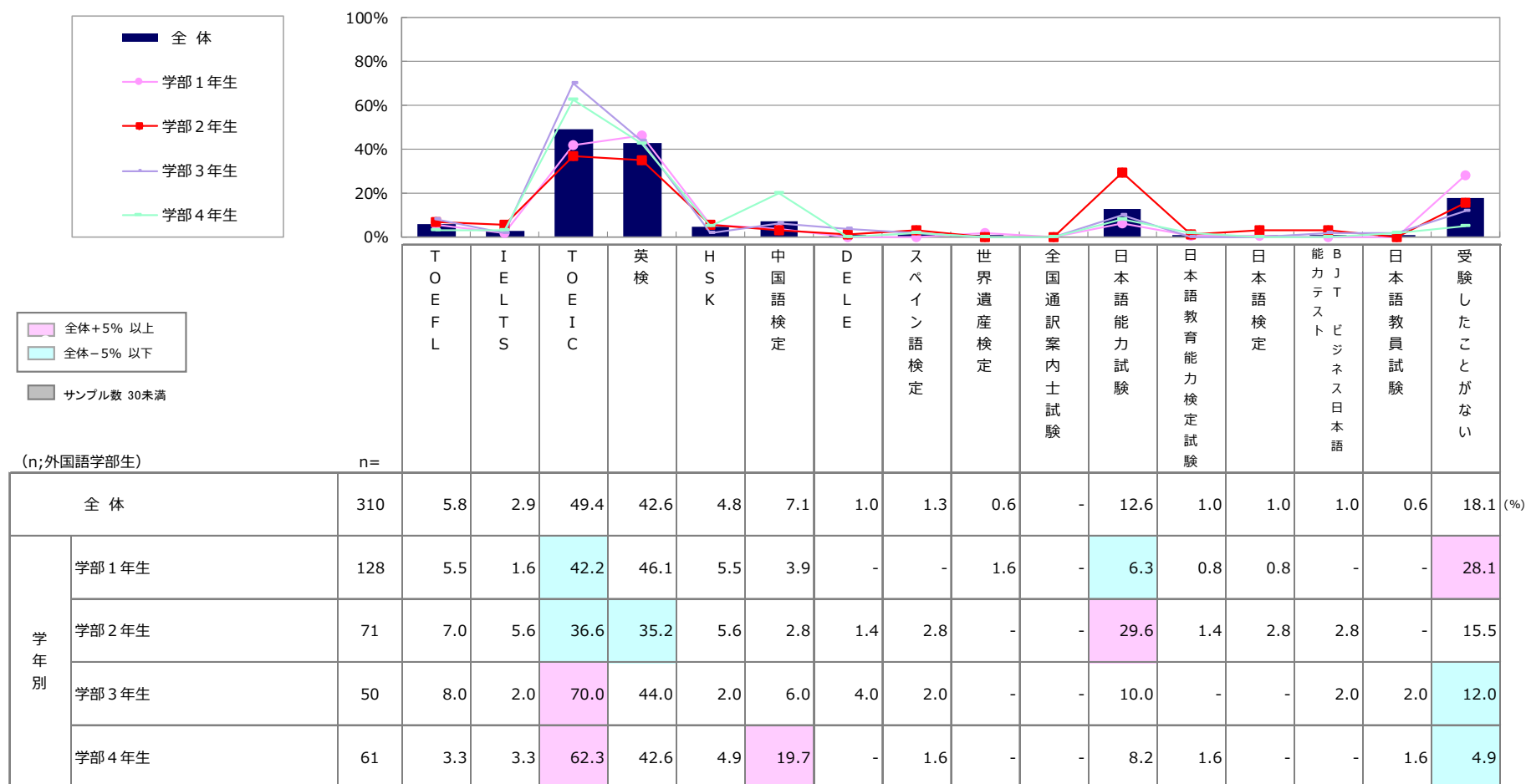
- ・外国語学部生の海外での語学研修経験は「ない」が82.9%。
「ある（大学主催）計」は11.3%と「ある（個人短期）」6.8%を上回る。
大学主催では「長期」が6.1%で最も高い。「短期」が5.5%で続く。
- ・学年別では、学部3年生は「ある（大学主催）計」が32.0%と他の学年と比べて高い。
4年生は「ある（大学主催）計」も18.0%と3年生の次に高い一方、「ある（個人短期）」も14.8%と他の学年より高め。



語学検定試験受検有無

Q34.語学に関する検定試験を受検したことがありますか。
(MA) (外国語学部生のみ)
※以下の検定試験を受検したことがない方は、何もチェックせずに、次に進んでください。

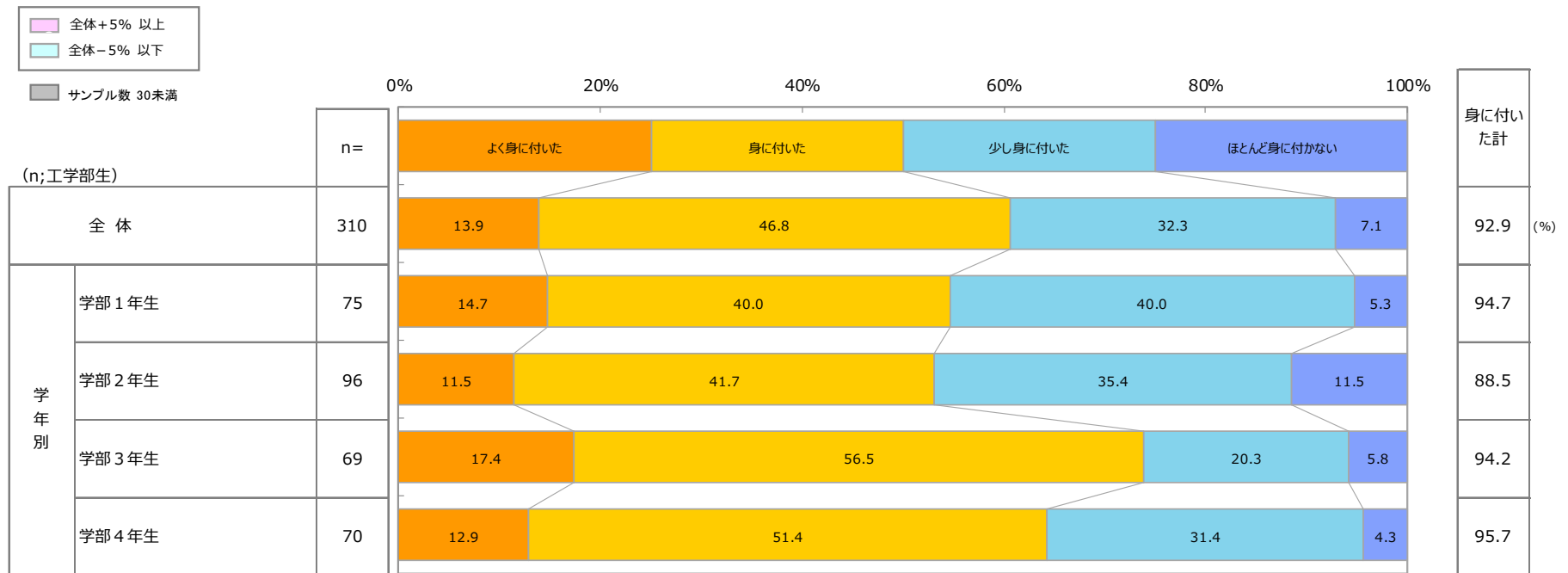
- ・受検経験がある語学検定試験は「TOEIC」が49.4%、「英検」が42.6%と英語の検定が上位にあがり、「日本語能力試験」が12.6%で続く。
- ・学年別でみると、「TOEIC」は学部3年生と4年生が高く、1年生と2年生が低い。「英検」は1年生が46.1%と最も高く、2年生が35.2%と最も低い。「日本語能力試験」は2年生が29.6%と他の学年に比べて高い。



リーダーシップ能力や課題に対する解決能力

Q35.実験・実習・演習によって、リーダーシップ能力や課題に対する解決能力が身に付き了吗。(SA)
(工学部生のみ)

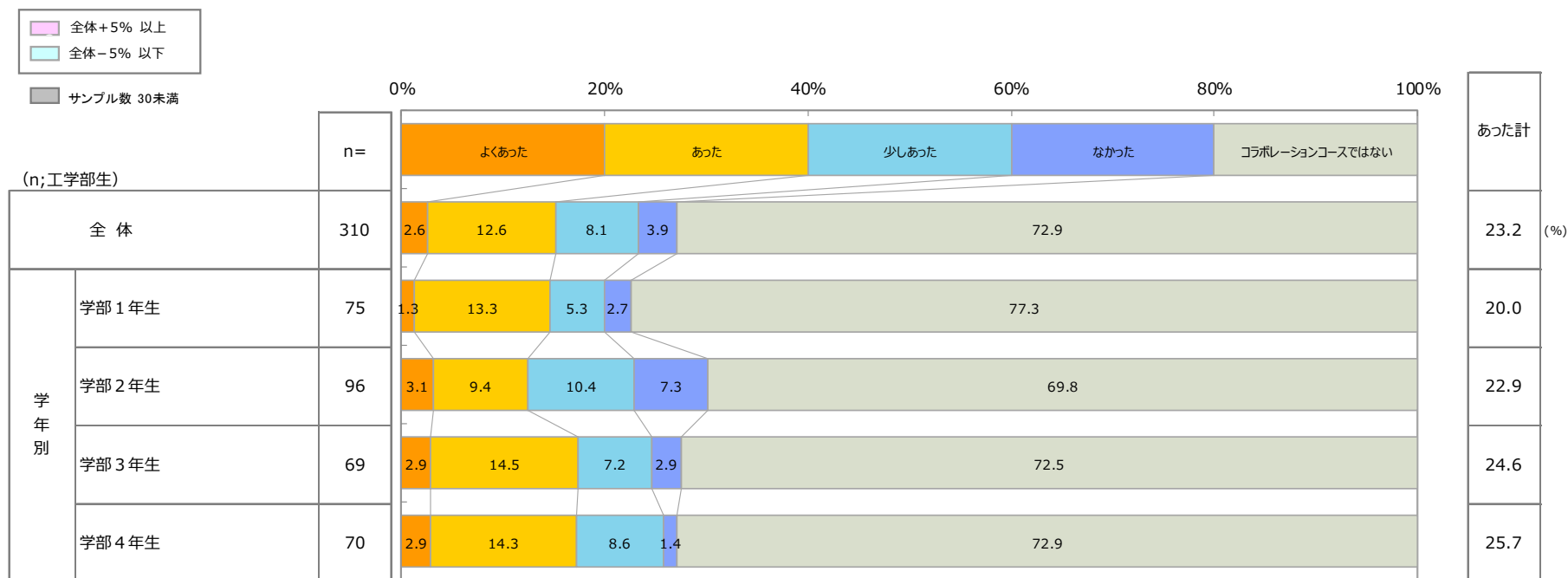
- 工学部生のリーダーシップ能力や課題に対する解決能力の「身に付いた計（よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた）」は全体の92.9%に達し、「よく身に付いた」は13.9%となった。
- 学年別では、学部2年生以外は「身に付いた計」が95%前後。2年生は88.5%。「よく身に付いた」をみると、3年生が17.4%と最も高く、1年生が14.7%で続く。



コラボレーションコースでの他学科の教員や学生と話す機会の有無

Q36. (コラボレーションコースの学生への質問) コラボレーションコースの授業を履修して、他学科の教員や学生と話す機会がありましたか。
(SA) (工学部生のみ)

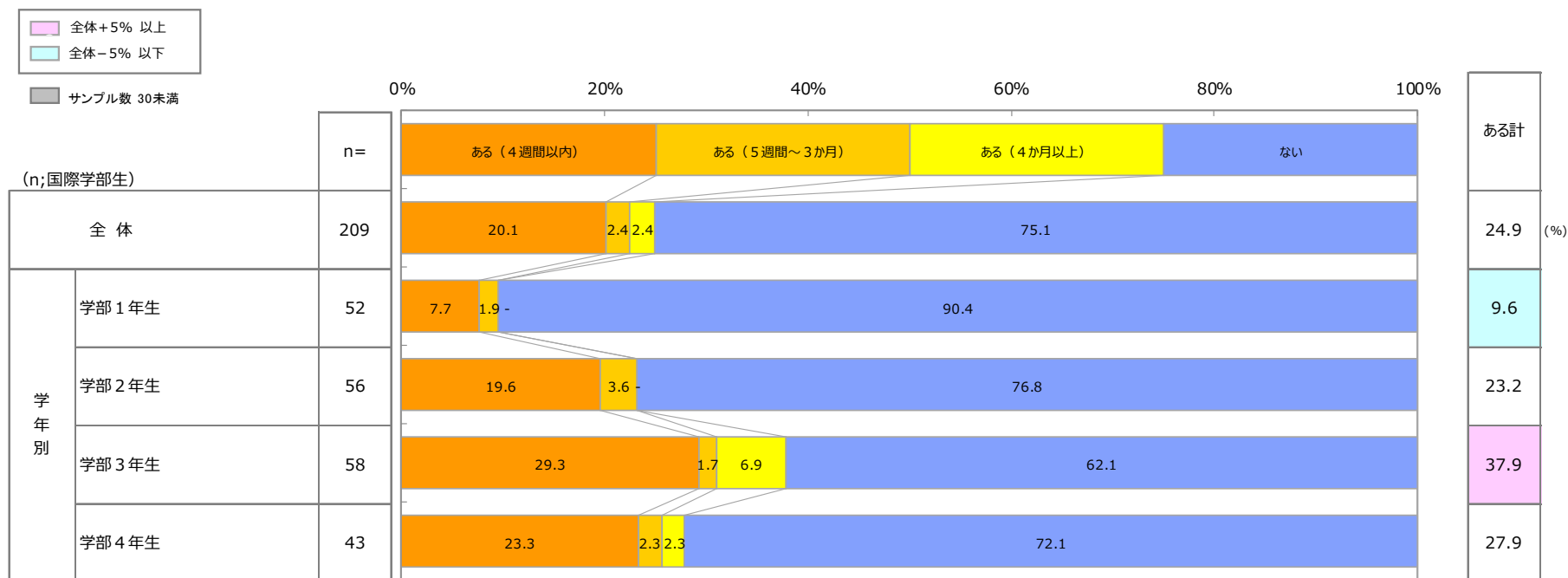
- ・コラボレーションコースでの他学科の教員や学生と話す機会が「あった計（よくあった+あった+少しあった）」は工学部生全体の23.2%。
- ・学年別でみると、学部1年生から4年生と上がるにつれ「あった計」が上がる。



海外研修経験

Q37. 海外研修に参加したことがありますか、あるいは3月までに参加する予定がありますか。(海外短期研修・語学留学、海外ゼミ合宿、個人研修奨学金、長期留学、海外インターンシップ等) (SA)
(国際学部生のみ)

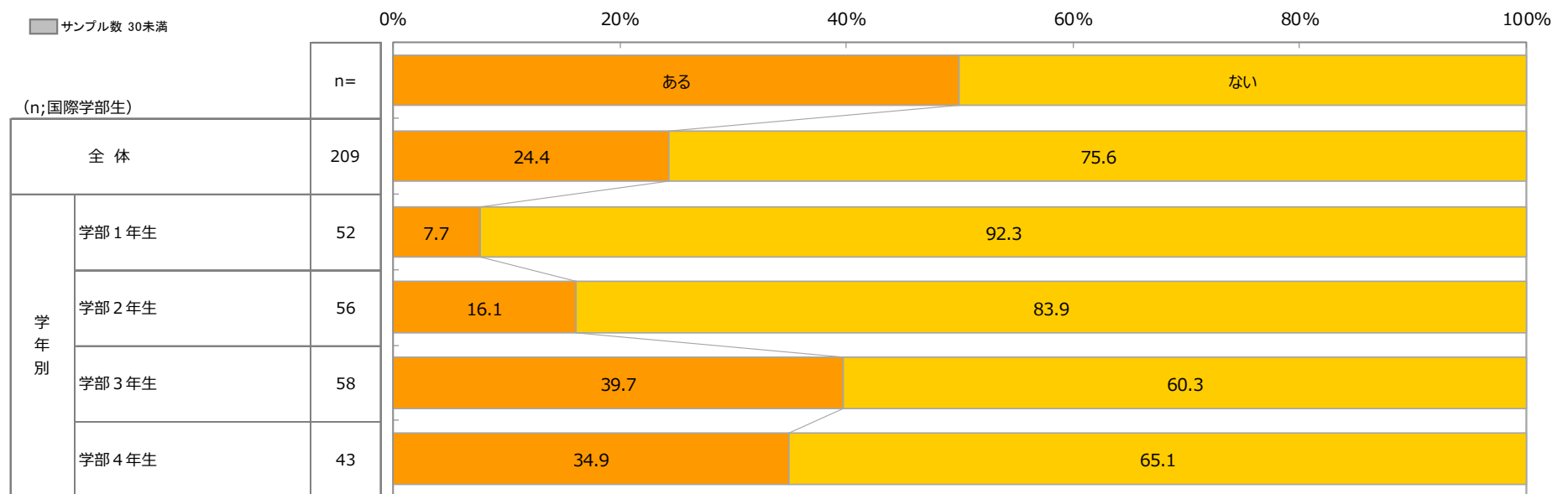
- ・国際学部生の海外研修経験が「ある計（ある（4週間以内）＋ある（5週間～3か月）＋ある（4か月以上））」は全体の24.9%、「ない」が75.1%。
- ・学年別では、「ない」を除いて全ての学年で「ある（4週間以内）」が最も多い。「ある（4週間以内）」では、学部3年生が29.3%と最も高く、4年生が23.3%で続く。また、3年生は「ある（4か月以上）」も6.9%と他の学年より高め。



国内、国外におけるボランティア・NGO活動参加有無

Q38.入学以来、国内、国外におけるボランティア活動や
NGO活動に参加したことがありますか。(SA)
(国際学部生のみ)

- ・国際学部生の国内、国外におけるボランティア・NGO活動参加経験は「ある」24.4%。
- ・学年別でみると、参加経験率は学部3年生と4年生が30%台で高く、1年生が7.7%で最も低い。



学修行動調査結果 に対する所見

大学全体

1. 本年度の授業の中での経験について

令和5年度、令和6年度（以下「過去2年間」という。）の結果と比較すると、No.3、5の設問項目は3年連続で上昇している。一方、No.1、2、4、6は前年度から低下している。学生同士で議論する授業や定期的な小テスト・レポートのある授業は進んでいる一方で、その他の項目は前年度から低下している状況である。

No.	設問項目	令和5年度	令和6年度	令和7年度
1	自分の考えや課題を発表する授業	84.8	87.6	87.2
2	教員への質問・意見を述べたことの経験	67.8	70.5	68.7
3	学生同士が議論する授業	74.0	80.0	80.6
4	演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業	60.7	67.3	64.2
5	定期的な小テスト・レポートのある授業	95.3	96.1	96.2
6	Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業	97.6	97.8	97.5

※「あった計（よくあった＋ときどきあった）」の比率（単位：％）

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

過去2年間の結果と比較すると、いずれの項目も前年度から低下しており、授業時間外の学修態度は全体として前年度より低下している状況が窺える。特にNo.2、3の低下が大きく、その背景にはAIの活用の進展が一因と考えられるほか、下記「3. 本年度の週当たりの学修等時間について」で示されている通り、学修時間自体の低下が影響している状況ともいえる。

No.	設問項目	令和5年度	令和6年度	令和7年度
1	他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験	80.3	84.0	83.6
2	教職員への学修に関する相談経験	42.6	50.5	46.4
3	授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験	52.8	63.3	54.6
4	授業や課題のためインターネットでの情報収集経験	94.8	95.1	94.0

※「あった計（よくあった＋ときどきあった）」の比率（単位：％）

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

過去2年間の結果と比較すると、No.1、3を除く4項目は前年度から増加、No.1、3は前年度から減少している。授業外の活動時間は増加している一方で、「2. 本年度の授業時間外の学修態度について」で示された状況を含め、学修に該当する授業出席科目数の減少、授業時間の減少状況が窺える。

No.	設問項目	令和5年度	令和6年度	令和7年度
1	授業出席科目数	13科目以上(32.7%)	13科目以上(33.1%)	13科目以上(32.9%)
2	授業時間以外での授業関連学修・経験時間	1～3時間(42.1%)	1～3時間(41.9%)	1～3時間(42.8%)
3	授業と関連しない読書時間	1～3時間(34.5%)	1～3時間(36.7%)	全くない(34.9%)
4	部活動・サークル活動参加時間	19時間以上(15.0%)	1～3時間(13.5%)	19時間以上(14.4%)
5	アルバイト・就労時間	19時間以上(43.1%)	19時間以上(39.6%)	19時間以上(43.6%)
6	個人的な趣味活動時間	19時間以上(39.7%)	19時間以上(36.5%)	19時間以上(39.1%)

※各設問項目において最も選択された選択肢の比率、No.4は「全くない」を除く比率（単位：％）

大学全体

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

過去2年間の結果と比較すると、No.5、7、8は3年連続で上昇している。一方、No.1、2、3、4、6、9、10、11は前年度から低下している。これらのことから、協働力や社会課題の理解、外国語運用能力については向上が見られる一方で、その他の項目については前年度から低下している状況が窺える。

No.	設問項目	令和5年度	令和6年度	令和7年度
1	一般的な教養	98.4	98.3	98.1
2	専門分野に関する知識・技能	98.5	98.1	97.8
3	情報収集力	98.6	98.7	98.1
4	課題発見・解決能力	97.4	97.9	97.7
5	協働力	94.3	95.7	96.2
6	リーダーシップ	85.4	89.6	89.2
7	社会が直面する課題の理解	92.8	94.1	94.6
8	外国語運用能力	83.6	87.3	88.3
9	発表能力	94.9	94.8	94.6
10	文章表現能力	96.3	96.6	96.5
11	パソコンで資料を作成する力	97.7	98.0	97.2

※「身に付いた計(よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた)」の比率(単位:%)

(2)長所と課題

設問項目にみる「身に付いた力」の多くは引き続き高い比率を維持しており、学修成果としても一定程度定着している状況が窺える。特に、協働力や社会課題の理解などの項目は高い水準を維持しており、対人関係や社会との関わりに関する能力の向上が見られる。一方で、リーダーシップ、外国語運用能力は他の項目と比較すると低い傾向にある。なお、前年度と比較すると多くの項目で比率の低下が見られることから、年度によって能力の定着や向上にばらつきが生じている状況も窺える。これらのことから、全体として一定の学修成果は維持されているものの、各能力のバランスの観点からは課題が見られ、引き続き教育効果向上への改善が求められる。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

今回の結果では、No.5、7は継続して上昇している一方で、多くの項目において前年度からの低下が見られる。そのため、学生の主体的な学修を促進する取組の強化が求められる。具体的には、アクティブラーニングを引き続き推進するとともに、授業時間外における学修機会の確保に向け、予習・復習課題の明確化や小テスト・レポート等の活用を通じた継続的な学修の促進が考えられる。また、リーダーシップや外国語運用能力の向上に向けては、演習科目等の内容の充実を図ることにより、段階的に能力を向上させる取組が求められる。

商学部 - 1

1. 本年度の授業の中での経験について

令和7年度は、令和6年度までとは大きく異なる改善が数値として見える。「授業の中での経験」の区分は6項目からなり、令和6年度の商学部は全学部生平均をすべての項目で下回っていたが、「自分の考えや課題を発表する授業有無」、「学生同士が議論する授業有無」、「定期的な小テスト・レポートのある授業有無」、「Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業有無」の4項目で全学部生平均を上回った。

とりわけ、「自分の考えや課題を発表する授業有無」の「あった」の計では、全学部生平均が86.8%（令和6年度86.9%、令和5年度84.3%）であるのに対し、商学部は92.5%（令和6年度84.3%、令和5年度79.2%）と、それまでのマイナスから一転して、+5.7になった。

また、「学生同士が議論する授業有無」の「あった」の計では、全学部生平均が80.2%（令和6年度79.4%、令和5年度74.0%）であるのに対し、商学部は84.5%（令和6年度79.1%、令和5年度73.7%）と、+4.3になった。

しかし、依然として「教員への質問・意見を述べたことの経験の有無」、「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業有無」の2項目が、3年間の経年資格をしても低い。

「教員への質問・意見を述べたことの経験有無」の「あった」の計では、全学部生平均が67.6%（令和6年度68.9%、令和5年度66.8%）であるのに対し、商学部は66.6%（令和6年度63.4%、令和5年度59.7%）である。

また、「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業有無」の「あった」の計の全学部生平均が63.7%（令和6年度66.4%、令和5年度60.1%）であるのに対し、商学部は60.8%（令和6年度60.8%、令和5年度51.8%）である。

それでも、いずれの項目のマイナス幅は小さくなっている。「年を重ねるごとに、商学部の教員は、一方的な授業にならないよう配慮している」ことが数値で裏付けられた形となっている。

ただし、それぞれの項目が100%ではない以上、学生理解を深めるFDの実施や、入試区分ごとの累積GPAの分析などを通じて、学力の向上と授業改善を進めていきたい。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「授業時間外の学修態度」は4項目からなっているが、以下の3項目が全学部生平均を上回っている。「他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強したりした経験有無」の「あった」の計では、全学部生平均が83.3%（令和6年度84.0%、令和5年度80.5%）であるのに対し、商学部は86.1%（令和6年度87.1%、令和5年度84.5%）となった。

「授業や課題のためインターネットでの情報収集経験有無」の「あった」の計では、全学部生平均が93.8%（令和6年度94.9%、令和5年度94.7%）であるのに対し、商学部は94.6%（令和6年度94.0%、令和5年度94.2%）となった。いずれも高い数値である。

しかし、「授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験の有無」の「あった」の計では、全学部生平均が53.1%（令和6年度61.6%、令和5年度51.7%）であるのに対し、商学部は58.2%（令和6年度62.5%、令和5年度53.5%）であり、全学部生平均よりは高いが、数値そのものが低い。

「教職員への学修に関する相談経験有無」の「あった」の計では、全学部生平均が45.0%（令和6年度48.6%、令和5年度41.5%）であるのに対し、商学部は42.6%（令和6年度43.4%、令和5年度35.6%）である。「他の学生やインターネットを頼ることはあっても、図書館利用や教職員への相談は少ない」という学生像が見えてくる。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

「週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間」では、「全くない」が9.6%（令和6年度11.1%、令和5年度10.0%）、「1～3時間」が44.0%（令和6年度

商学部 - 2

度44.3%、令和5年度45.6%)となり、改善傾向にはあるものの、商学部では依然として半数以上の学生が学修等に時間を割いていない。

「週当たりの授業と関連しない読書時間」では、「全くない」が37.1%（令和6年度33.8%、令和5年度39.2%）を占めており、「1～3時間」の35.0%（令和6年度34.3%、令和5年度33.2%）を加えると、商学部では72.1%（令和6年度68.1%、令和5年度72.4%）となり、読書離れの傾向が継続している。

「週当たりの部活動・サークル活動参加時間」では、「全くない」が60.3%（令和6年度59.8%、令和5年度61.7%）、「週当たりのアルバイト・就労時間」では、「全くない」が13.4%（令和6年度13.1%、令和5年度14.6%）、「週当たりの個人的な趣味活動時間」では、「全くない」が2.9%（令和6年度4.3%、令和5年度4.7%）となった。

これらの項目は、非認知能力の向上に繋がる活動である。数値の多寡がどれだけの意味を持つか、一概には言えないだけに、個々の学生に対しその状況を把握していく必要性を認識している。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1) 学修成果の達成状況

「入学時と比べ、身に付いた学修成果・経験」は11項目からなっているが、令和7年度は10項目（令和6年度9項目、令和5年度9項目）で、9割以上の学生が「身に付いた」と肯定的な回答を寄せている。唯一「外国語の運用能力」については89.1%（令和6年度89.5%、令和5年度85.4%）と9割に届かなかったが、トータルで考えれば、「90%超の学生が学修成果を得た」と認識している。個々の学生の学修到達度、満足度の基準は異なるが、総じて高等教育機関として満足度の高い学修成果を残している。

(2) 長所と課題

「専門分野に関する知識・技能」の「身に付いた」の計は97.9%（令和6年度97.5%、令和5年度98.9%）、「一般的な教養」の「身に付いた」の計は98.4%（令和6年度98.5%、令和5年度98.5%）である。

4年間の継続した学修を通じて100%近い学生が、学修成果を実感できている点、学力の定着を好意的に受け止めている点が商学部の長所である。

しかし、11項目すべてが100%ではない。ボトムラインの底上げをし、「身に付いた」が「よく身に付いた」に上振れするよう、FDなどの研修機会の充実や、当該「学修行動調査レポート」の周知を課題としたい。

(3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

経済社会は絶えず変化を続けているだけに、商学部の教育課程も不易と流行を見極めながら見直しを継続していく必要がある。この「見直しの継続」が教育課程の改善方策である。

また、AIの活用が日常化した今、AIをどのように学修指導に役立てていくか、より具体的に落とし込む必要がある。先進的な取り組みを行っている教員による研修の機会を設けて、AIを活用した学修指導のコンピテンシーを見出せるようにしたい。

さらには、アクティブラーニングすること自体が目的とならないよう研修の機会を設けて、知識・技能の修得のみならず、思考力、判断力、表現力の育成に資するようにしたい。これらが教育内容・方法などの改善方策である。

5. 学部・研究科設問項目について

「海外での語学研修経験」の大学主催・個人の計では、1年が5.4%（令和6年度6.0%、令和5年度7.9%）、2年が11.2%（令和6年度10.8%、令和5年度13.7%）、3年が42.0%（令和6年度17.5%、令和5年度24.2%）、4年が32.8%（令和6年度28.4%、令和5年度30.8%）となった。ただし、重複参加もあることから、全体では82.9%（令和6年度83.3%、令和5年度83.1%）の学生が「海外での語学研修経験」をしていない。

しかし、「語学検定試験受験有無」では、「受験したことがない」と回答した学生の全体の平均は18.1%（令和6年度9.4%、令和5年度7.9%）であり、資格取得への関心は高いものの、改善とは逆の傾向になっている。全体を俯瞰すると、商学部では外向きより内向きの学生が多い印象を与える数値であった。

政経学部 - 1

1. 本年度の授業の中での経験について

「自分の考えや課題を発表する授業有無」、「教員への質問・意見を述べたことの経験有無」、「学生同士が議論する授業有無」、「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業有無」の項目は、政経学部の学問的性質や定員などの要因もあり、全学の中ではやや低調であるが、令和5・6年度と比較すると、横ばい状態である。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験有無」、「教職員への学修に関する相談経験有無」、「授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験の有無」は、令和5年と比較すると上昇しているものの、令和6年度と比較すると低下している。その一方で、「授業や課題のためインターネットでの情報収集経験有無」は95%前後で横ばいである。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

「週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間」は、約60%の学生が0-3時間、「週当たりの授業と関連しない読書時間」は、約65%の学生が0-3時間、「週当たりの部活動・サークル活動参加時間」は、全くないが約55%で令和6年度と比較するとやや減少した一方1-3時間は約15%で横ばいである。「週当たりのアルバイト・就労時間」は19時間以上が約50%で令和5年度と比較すると約55ポイント増加した一方、「週当たりの個人的な趣味活動時間」は、19時間以上が約40%で横ばいである。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

「一般的な教養」、「専門分野に関する知識・技能」、「情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力」、「物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力」、「他の人と協力して物事を進めていく力」、「社会（国民・地域・国際等）が直面する課題を理解する力」、「学修した内容をまとめて、それを発表する力」、「表現すべき内容を文章にして書ける力」、「パソコンで文書や資料を作成する力」は、いずれも90%を越える水準で推移している。その一方で、「必要な場合のリーダーシップを発揮できる力」と「外国語の運用能力」は、80%台半ばで推移しており、令和5・6年度と比較すると横場合であるといえる。

(2)長所と課題

政経学部の学びでは、学習成果の達成状況において、いずれも高水準を維持しているといえる。また、従来、大講義室での講義に代表されるような単一方向での授業が多い傾向にあったが、自分の考えや課題を発表したり、教員へ質問や意見を述べたり、学生同士で議論したりするなどの学生主体の体験型授業が増加傾向にあり、この点が長所になりつつある。その一方で学生主体の体験型授業の数値は、全学的に見ればまだまだ向上の余地がある。学問分野によって授業の方法や形式にも特徴があるという理解に立ちつつ、学生主体の体験型授業をどのように増やしていくかが課題となる。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

政経学部では、近時のカリキュラム改定により、従来のプログラムによる学修に加えて、複数のプログラムを新設している。これらのプログラムは、いずれも座学のみではなく、実習なども伴う点で、学生主体の体験型学習を増やし、学びの機会を豊かに改善しうるものとなっている。もっとも、これらのプログラムは始まったばかりであることから、従来の授業における課題を解決する一助となるよう、プログラム学修を学生によりよく勧奨していくよう努めることが求められる。

政経学部 – 2

5. 学部・研究科設問項目について

なし。

外国語学部 - 1

1. 本年度の授業の中での経験について

多くの項目で高い割合が維持されているが、R6と比較すると全体的にやや低下が見られる。特に、「自分の考えや課題を発表する授業」はR6からの低下幅が比較的大きい。また、「教員への質問・意見を述べた経験」もやや減少している。授業における双方向的なかわり方については、今後の動向を注視する必要がある。

設問項目	令和4年度	令和5年度	令和6年度
自分の考えや課題を発表する授業有無	96.1	97.4	89.4
教員への質問・意見を述べた経験有無	81.9	83.8	78.7
学生同士が議論する授業有無	79.9	86.3	81.0
演習・実習・フィールドワークなど体験授業有無	59.1	73.1	66.1
定期的な小テスト・レポートのある授業有無	95.7	98.7	93.5
Bb、E-mail等で教材・課題の受け取りや提出を行う授業有無	98.8	97.9	94.2

※「あった計(よくあった+ときどきあった)」の比率(単位: %)

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

R6と比較すると全体として低下傾向にあるが、その程度には項目間で差がある。特に、「授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験」は大きく低下し、5割を下回っている。

設問項目	令和4年度	令和5年度	令和6年度
他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験	81.9	85.9	85.2
教職員への学修に関する相談経験	51.2	56.0	52.3
授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験	45.3	62.0	47.7
授業や課題のためインターネットでの情報収集経験	94.5	96.2	90.6

※「あった計(よくあった+ときどきあった)」の比率(単位: %)

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

R5, R6に比べて、「13科目以上」の授業に出席している割合が増加している。一方で、「授業と関連しない読書時間」は「全くない」という回答が最も多い状況になっている。

設問項目	令和4年度	令和5年度	令和6年度
授業出席科目数	13科目以上29.9%	13科目以上28.2%	13科目以上31.9%
授業時間外の授業関連学修・経験時間	1~3時間42.1%	1~3時間42.3%	1~3時間51.9%
授業と関連しない読書時間	全くない38.2%	1~3時間34.2%	全くない36.1%
部活動・サークル活動参加時間	全くない63.0%	全くない67.9%	全くない56.1%
アルバイト・就労時間	19時間以上48.4%	19時間以上41.5%	19時間以上43.5%
個人的な趣味活動時間	19時間以上43.7%	19時間以上38.5%	19時間以上37.4%

※各項目設問において最も選択された選択肢の比率(単位: %)

外国語学部－2

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

いずれの項目も例年同様高い割合を示しており、学修成果が実感できていることが窺える。

設問項目	令和5年度	令和6年度	令和7年度
一般的な教養	99.2	97.9	98.1
専門分野に関する知識・技能	98.4	99.1	98.1
情報収集力	98.8	99.1	98.4
課題発見・解決能力	98.8	97.4	97.1
協働力	93.7	96.6	97.4
リーダーシップ	85.8	89.3	92.6
社会が直面する課題の理解	92.5	94.9	94.8
外国語運用能力	96.1	95.7	98.1
発表能力	98.8	96.6	96.1
文章表現能力	98.0	97.4	97.4
パソコンで資料を作成する力	98.0	96.6	95.2

※「身に付いた計(よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた)」の比率(単位:%)

(2)長所と課題

学修成果に関する自己評価は、いずれの項目も高い水準にあり、学生が学びの成果を実感できている点は長所と言える。一方で、授業内外の学修活動の経験については全体としてやや低下傾向が見られるほか、図書館を利用した学修経験の減少や、授業と関連しない読書時間が少ない状況も見られ、課題と捉える必要がある。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

情報収集力が身に付いたという自己評価は高いものの、インターネットでの情報収集が中心となっていることから、今後は図書館資料や学術文献を活用した調査活動を授業に組み込むなど、資料に基づいた学修を促す仕組みの充実を図る必要がある。また、授業と関連づけながら、学生が主体的に情報収集や読書に取り組む機会を設けることが求められる。

外国語学部－3

5. 学部・研究科設問項目について

(1) 海外での語学研修経験の有無

大学主催の語学研修に参加した割合はR6より増加した。しかし、経験のない学生が依然として8割を超える状況が続いている。

設問項目	令和5年度	令和6年度	令和7年度
ない	83.1	83.3	82.9
ある(大学主催)	10.6	6.8	11.6
ある(個人)	7.1	9.8	6.8

(2) 語学検定試験受験の有無

TOEICの受験率が最も高いものの、R5、R6と比べて大きく減少した。また、語学検定を受験していない学生の割合も大幅に増加している。

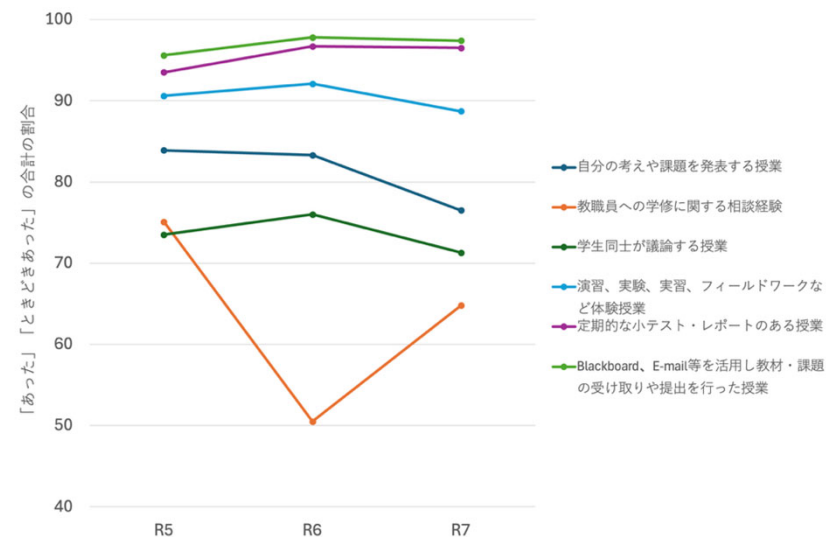
設問項目	令和5年度	令和6年度	令和7年度
TOEIC	65.0	65.0	49.4
英検	53.5	43.6	42.6
日本語能力試験	3.9	11.5	12.6
中国語検定	11.8	6.0	7.1
ない	7.9	9.4	18.1

工学部 - 1

1. 本年度の授業の中での経験について

年度別の変化を右図に示す。

「自分の考えや課題を発表する授業」での割合が低下していることが気掛りだが、「教職員への学習に関する相談経験」は回復してきている。

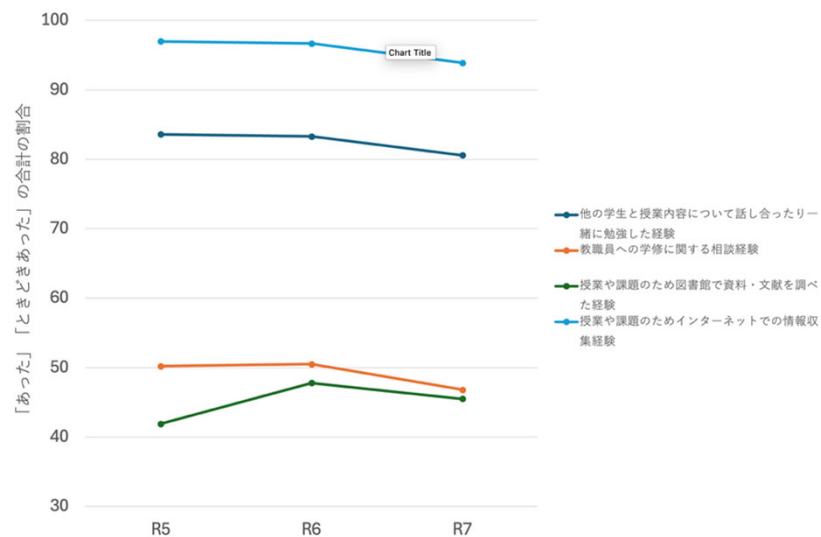


2. 本年度の授業時間外の学修態度について

年度別の変化を右図に示す。

「教職員への学習に関する相談経験」

「授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験」が他学部と比較して低いので、改善していきたい。



工学部 - 2

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

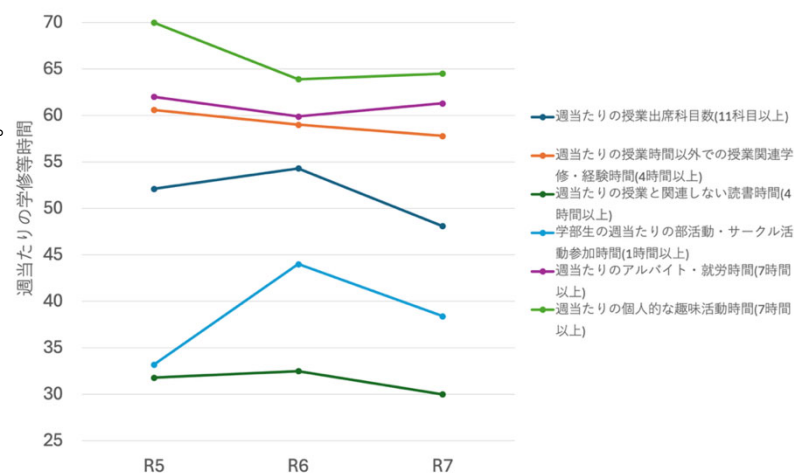
年度別の変化を右図に示す。

「週あたりの授業出席科目数」が11科目以上の人の割合が今年度は5割を下まわっている。

1科目2単位とすると年間44単位に相当するので、

卒業研究以外の科目が少なくなる4年生を除いた学年での履修状況を確認する

必要があると考えられる。



4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1) 学修成果の達成状況

「すこし身に付いた」を含めた身に付いたという回答の割合を右図に示す。

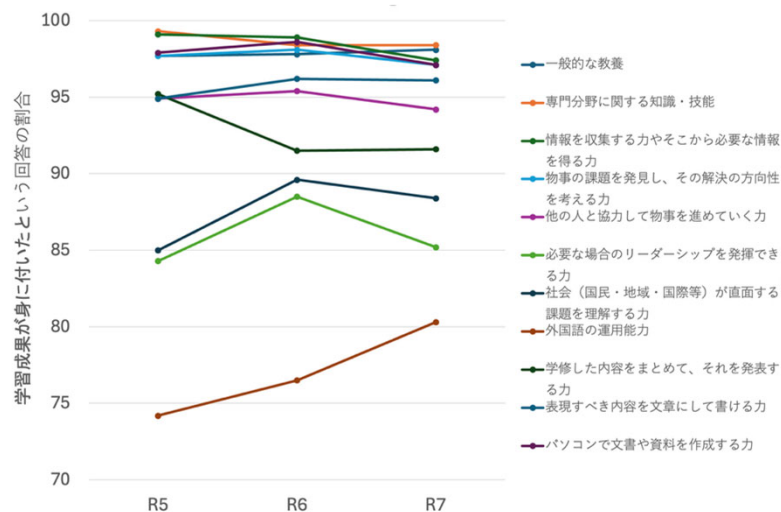
(2) 長所と課題

「パソコンで文書や資料を作成する力」は、本年度の「よく身に付いた」と

「身に付いた」の合計が81.3%で他学部よりも高い水準になっている。

「外国語の運用能力」が身に付いたという割合は他学部より低い、

年々上昇している。



(3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

工学部では、2年進級時に将来の進路に合わせて

科目を選択するためのコース選択を行う。

2026年度入学者から時代のニーズに合わせたコース変更を伴う

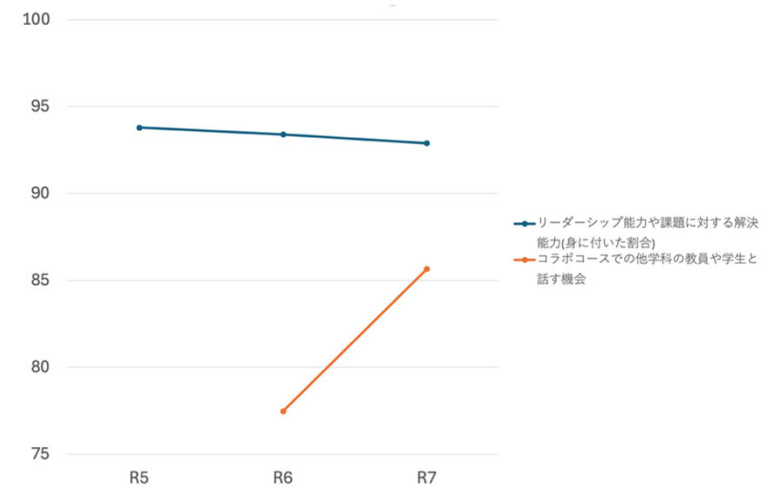
カリキュラム改定を行って、学習成果の向上を目指している。

個別の項目としては、図書館利用を促進するための問題として、雑誌などの資料が電子化されたデータベースにまとめられているため、どの雑誌がどのデータベースに収容されているのかが判りにくくなっている点が考えられる。学部学科で推奨する雑誌などを一覧にしてデータベースと対応させるようなWeb ページを用意するなどの改善が考えられる。

工学部 - 3

5. 学部・研究科設問項目について

工学部が設定した設問についての回答の割合を右図に示す。



- 1 リーダーシップ能力や問題の解決能力を合わせて身に付いたという回答は90%を越えて推移しており、十分な学習成果が得られていると考えられる。
- 2 コラボコースでの他学科の教員や学生と話す機会があったという回答の割合は、令和5年度までと集計方法が変わったため2年間の比較になるが、大きく上昇しており、学際的な領域を学びたい学生への機会提供がうまく機能していると考えられる。

国際学部 - 1

1. 本年度の授業の中での経験について

「自分の考えや課題を発表する授業の有無」では機会があったとする回答が94.7%に達し全学部中もっとも高い。過去との比較でも94.4% (R5) → 95.0% (R6) と、3年連続で極めて高い水準にある。「学生同士が議論する授業の有無」でも、あったという回答が87.1%に達し全学部中もっとも高かった。過去3年間の推移でも85.1% (R5) → 86.7% (R6) とひじょうに高い割合で推移している。国際学部が目指す人材育成の要件である、議論を重ね自らの考えを深めそれを発表していけるという特徴が、授業を通じて実践されていることが示唆されている。

一方で「教員への質問・意見を述べたことの経験有無」についても、あったとする回答が73.2%となり、68.4% (R5) → 75.4% (R6) という推移をみれば、多くの学生が授業担当教員に対し個人的な発言をした経験があることが示されており、教室において教員と話をしやすい雰囲気が保たれていると考えられる。

Blackboard、E-mailを通じた教材、課題の受け渡しについても、あったとする回答の割合が98.6% (R5) → 97.9% (R6) → 99.5% (R7) と推移しており、ほとんどの授業で活用されていることが示された。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「他の学生と授業内容について話す、一緒に勉強する」ことについて、86.6%の学生が経験ありと回答している。3年間でも78.1% (R5) → 85.4% (R6) と高い水準で推移している。「教員への学修に関する相談経験」がある学生の割合は、44.2% (R5) → 61.3% (R6) → 51.7% (R7) と推移しており、半数前後の学生が教室外で教員と学修相談の経験を有している。R7年度においては授業時間外における学修相談の経験が「まったくなかった」学生の割合は13.9%と全学部中もっとも低い。国際学部では専任教員が週3回以上オフィスアワーを設けることになっており、この仕組みが時間外における相談経験の高さと関連している可能性がある。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

「週当たり授業出席科目数」が13科目以上の学生の割合は、39.1% (R5) → 38.3% (R6) → 42.1% (R7) と推移しており、R6年度を除けば全学部中もっとも高い割合で推移している。

「週当たりの授業と関連しない読書時間」で1時間以上と回答した者の割合は、60.9% (R5) → 75.1% (R6) → 69.9% (R7) と推移しており、R5年度を除けば全学部中もっとも多い水準となっている。「週当たりの部活動・サークル活動参加時間」で1時間以上と回答した者の割合は57.8% (R5) → 53.8% (R6) → 53.1% (R7) となっており、3年連続で全学部を通じもっとも高い値で推移している。国際学部生は忙しく授業に出席しながら、授業とは直接関係しない読書にも勤しみ、部活やサークル活動にも傾注するというポジティブな学生像が浮かんでくる。

ただし、この結果は次のような別の解釈も可能である。本調査における国際学部生の学年構成は、ほぼ全学年で等しい（1年生52名、2年生56名、3年生58名、4年生43名）。国際学部生は2年次終了までに卒業所要単位の大半を取得する者が少なくない。単位を「取り急ぐ」傾向がみられるのだ。「取り急ぐ」理由のひとつとして、学生の視点として専門科目間の連携が明確ではなく、そうであるならば早い段階でできるだけ多くの単位を取得しておこうというインセンティブが働いている可能性も否定できない。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1) 学修成果の達成状況

「一般的な教養」がよく身についたと回答した学生は、29.8% (R5) → 38.8% (R6) → 34.9% (R7) と推移しており、3年間を通じ全学部中もっとも高い水準を維持している。「専門分野に関する知識・技能」がよく身についたと回答した者は25.6% (R5) → 30.4% (R6) → 27.3% (R7) と推移している。この3年間で全学部中2～5位の間で変化している。専門性の獲得という高等教育として重視すべき部分については、学部生の評価は必ずしも高いとはいえない。

一方で全学部を通じずっと1位または2位を維持している項目もある。よく身についたという回答者の割合は、「情報を収集する力、そこから必要な情報を得る力」で33.0% (R5) → 36.3% (R6) → 33.5% (R7)、「物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力」では29.8% (R5) → 32.9% (R6) → 26.8% (R7) となっている。「社会が直面する課題を理解する力」についてはよく身についた、身についた、の合計が、96.3% (R5) → 96.3% (R6) → 97.6% (R7) とひじょうに高い水準を維持している。

国際学部 - 2

(2) 長所と課題

(1) で述べたことから国際学部における学修の長所として、実践力を身につけられるという点が浮かび上がってくる（全学部を通じ過去3年間の調査結果において1位または2位を維持し続けている項目より）。ただし、問われるべきはその中身だ。国際学部で修得できる実践力とは、幅広い教養を身につけ、具体的な社会問題についての知識を吸収し、それをもって自身の考えを他者に伝え協働するという意味での実践力だと考えられる。国際学部ではR6年度まで（本調査における2～4年生の回答者が該当する）は独自の教養教育プログラムを有しており、きめ細かい教養教育が実践されていたことも、実践面での応用可能な教養の涵養に資するものがあったのではないか。一方で専門分野における知識の獲得については、全学部の中で高い位置にあるとは言いがたい。専門性を効果的、効率的に身につけさせることが課題として指摘される。

(3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

国際学部の授業は履修可能年次からは二つに分けられる。1年次から履修可能な科目群と、2年次以降で履修可能な科目群である。進路活動の超早期化など、やむを得ない事情もあるものの、専門科目間に知的習熟に対応した区分が存在しないことは、学生にとってどのような影響があるのかを検討する必要がある。科目ナンバリングは導入されているものの、制度の趣旨に沿っているか否かを検証すべきであろう。

5. 学部・研究科設問項目について

海外研修への参加者の割合は、19.5%（R5）→20.4%（R6）→24.9%（R7）と、コロナ禍によるダメージから回復する傾向がみられる。ボランティア活動への参加経験も、あると回答した学生が20.9%（R5）→22.5%（R6）→24.4%（R7）と漸増傾向にある。海外への興味、人の役に立ちたいという国際学部生の特徴が現れている。

経済学研究科

1. 本年度の授業の中での経験について

前年度に比較してM1の回答占率が上がったこともあり、自分の意見を表明する機会が全体に減っている。教員に対しても学生同士の議論も高水準を保っている。演習、実験、フィールドワークなどの体験授業は学科特性からは基本的に高くない。総じて研究活動に必要な能力を養う環境は保っている。SNS依存のためかMail、Blackboardなどの使用機会が少なくなっている。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

学友と授業の内容について話す占率は高いが、教員に相談する占率は若干低下傾向にある。回答学生の7割が女性ということもあり、女性の教員がいないことも影響している可能性はある。

図書館の使用も、インターネットでの情報収集経験も100%と全員が利用している。図書館はガイダンス、データベースが充実しており、インターネットは生成AIの発展なども影響している可能性がある。経済学研究科では電子ジャーナルや学術データベースの活用も重要であり、さらに統計的なデータベースの使用もさらに充実させるように指導していきたい。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

授業は週7-8科目という学生が多く、それほど無理はしていない。それ以外の時間も修士論文・博士論文に向けての研究活動に10-12時間以上費やしている学生が全体の4割以上と相当の時間を費やしていることがわかる。当研究科では実証分析を行う機会も多く、授業時間以外の研究活動が成果につながりやすい。研究指導教員による定期的な進捗確認を通じて計画的遂行を支援していくことが重要である。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

研究活動遂行に必要な専門分野に関する知識習得、学術文献の読解力、情報力、課題解決能力などを身につけてきている。

また語学力も含めてプレゼンテーション能力も向上してきている。留学生が多い研究の中で多様な価値観を理解しながら研究課題を分析する能力も育成されている。

(2)長所と課題

本研究科の長所は国際経済・金融、地域研究、理論と応用の各分野の高い専門性を学べる点である。

今後の課題としては研究成果を学会や学術誌、紀要に修士課程の時代から発信する能力を高める必要がある。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

研究科としては研究発表会や論文報告会の充実を図るとともに、当研究科の紀要、国内外の学会発表への参加を積極的に支援していきたい。そのために英語による研究発信能力の向上なども指導していきたい。

5. 学部・研究科設問項目について

生成AI等の新しい研究支援ツールの活用方法と研究倫理についての設問も必要になってきている。

商学研究科-1

1. 本年度の授業の中での経験について

アンケート結果において、「よくあった」「ときどきあった」を集計すると、「(Q6) 自分の考えや課題を発表する授業」(R7: 100%, R6: 100%, R5: 91.7%)、「(Q7) 教員への質問・意見を述べたことの経験」(R7: 100%, R6: 100%, R5: 91.7%)、「(Q8) 学生同士が議論する授業」(R7: 100%, R6: 95.2%, R5: 66.7%, R4: 84.2%)、「(Q9) 演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業」(R7: 60%, R6: 85.7%, R5: 83.3%)、「(Q10) 定期的な小テスト・レポートのある授業」(R7: 80%, R6: 85.7%, R5: 91.7%)、「(Q11) Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業」(R7: 100%, R6: 95.2%, R5: 100%)であった。

この結果から、令和5年度から7年度までの比較において、「(Q6) 自分の考えや課題を発表する授業」(Q7)、「教員への質問・意見を述べたことの経験」(Q8)「学生同士が議論する授業」が令和7年度において100%となっている点は好ましい結果である一方、「(Q9) 演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業」(Q10) 定期的な小テスト・レポートのある授業」が低下傾向にある点は注視していく必要がある。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

アンケート結果において、「よくあった」「ときどきあった」を集計すると、「(Q12) 他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験」(R7: 80%, R6: 85.7%, R5: 91.7%)、「(Q13) 教職員への学修に関する相談経験」(R7: 100%, R6: 85.7%, R5: 91.7%)、「(Q14) 授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験」(R7: 80%, R6: 95.2%, R5: 91.7%)、「(Q15) 授業や課題のためインターネットでの情報収集」(R7: 100%, R6: 100%, R5: 91.7%)であった。

この結果から、令和5年度から7年度までの比較において、「(Q12) 他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験」と「(Q14) 授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験」が低下している点は注視すべきである。一方、「(Q13) 教職員への学修に関する相談経験」「(Q15) 授業や課題のためインターネットでの情報収集」について100%となっている点は好ましい結果である。

3. 本年度の過当たりの学修等時間について

アンケート結果において、「(Q17) 「授業時間以外の学修時間」が過当たり、「全くない」(R7: 20%), 1～3時間(R7: 20%, R6: 19.0%, R5: 0%)、4～6時間(R7: 20%, R6: 23.8%, R5: 41.7%)、7～9時間(R7: 20%, R6: 23.8%, R5: 0%)、10～12時間(R7: 20%, R6: 9.5%, R5: 16.7%)、13～15時間(R7: 0%, R6: 0%, R5: 8.3%)、16～18時間(R7: 20%, R6: 0%, R5: 0%)、19時間以上(R7: 0%, R6: 19.0%, R5: 33.3%)であった。

令和5年度から7年度までの比較では、「4～6時間」「7～9時間」「13～15時間」「19時間以上」の学生の割合が減っている一方で、「全くない」「1～3時間」「10～12時間」「16～18時間」の学生が増えていることは、全体的に学習時間が減っている可能性があり、注視していく必要がある。

商学研究科-2

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

アンケート結果において、「よく身に付いた」「身に付いた」を集計すると、「(Q23)専門分野に関する知識・技能」(R7:80%, R6:90.5%, R5:91.7%)、「(Q24)情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力」(R7:80%, R6:95.2%, R5:100%)、「(Q25)物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力」(R7:80%, R6:90.5%, R5:91.7%)、「(Q26)他の人と協力して物事を進めていく力」(R7:60%, R6:76.1%, R5:66.7%)、「(Q27)必要な場合のリーダーシップを発揮できる力」(R7:60%, R6:76.2%, R5:66.7%)、「(Q28)社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力」(R7:60%, R6:81.0%, R5:58.4%)、「(Q29)外国語の運用能力」(R7:60%, R6:66.7%, R5:50.0%)、「(Q30)学修した内容をまとめて、それを発表する力」(R7:80%, R6:95.3%, R5:83.3%)、「(Q31)表現すべき内容を文章にして書ける力」(R7:80%, R6:85.7%, R5:83.3%)、「(Q32)パソコンで文書や資料を作成する力」(R7:60%, R6:95.3%, R5:100%)であった。

この結果から、令和5年度から7年度までの比較では、回答者が5名であることから全体的な傾向として判断することは難しいが、全ての項目において「よく身に付いた」「身に付いた」と回答した学生の割合が低下している事実については問題として受け止める必要がある。

(2)長所と課題

長所としては、「自分の考えや課題を発表する授業」「教員への質問・意見を述べたことの経験」「学生同士が議論する授業」などインタラクティブな要素について好ましい評価がなされている点は、商学研究科のこれまでの取り組みが実を結びつつあることがうかがえる。一方、「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業」「定期的な小テスト・レポートのある授業」に対する評価の低下、そして「学修時間」の減少など学習の主体的な学修に関わる項目については課題が残る。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

商学研究科では、以前より、研究進捗の確認、学生間の交流と学修機会の提供、研究成果の可視化、学生の自己成長の促進を目的として、7月と10月に修士論文中間報告会を開催している。また、「研究の進め方ワークショップ」と称して、リサーチクエスションの立て方など基本的な研究方法についての底上げに努めており、引き続きこうした取り組みを継続していきたい。

一方、授業を含めたこうした取り組みの際には学生が受動的にならないよう、ワークショップなどの際には、講師の話を聞くだけでなく、ワークのようなものを学生に課すなど、主体的に取り組めるような工夫をしていく必要がある。

工学研究科 - 1

1. 本年度の授業の中での経験について

工学研究科の回答数は、令和5年度21名、令和6年度28名、令和7年度25名であり、いずれも30名未満であるため、比率の変動には留意が必要である。本年度は「自分の考えや課題を発表する授業」と「教員への質問・意見を述べた経験」がともに96.0%であった。前者は令和5年度95.2%・令和6年度100.0%、後者は95.2%・85.7%であり、いずれも高い水準を維持し、特に教員への質問・意見は前年度の低下から回復している。

「学生同士が議論する授業」は76.2%→92.9%→88.0%と、令和6年度に大きく上昇した水準を本年度もおおむね維持しており、少人数教育の中で対話的な学修経験が定着している。一方、「演習、実験、実習、フィールドワークなどの体験授業」は90.5%→89.3%→80.0%、「定期的な小テスト・レポートのある授業」は90.5%→89.3%→84.0%、「Blackboard、E-mail等の活用」は85.7%→92.9%→80.0%となり、前年度から低下した。研究指導中心の科目構成が影響している可能性はあるが、授業内活動、課題提示、教材・提出方法の明示について、科目間での確認が必要である。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

授業時間外の学修態度では、「他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験」が76.2%→85.7%→100.0%と大きく上昇し、院生相互の学び合いが強化されている。「教職員への学修に関する相談」は76.2%→82.1%→76.0%で前年度から低下したものの、令和5年度と同程度である。

「図書館で資料・文献を調べた経験」は52.4%→78.6%→68.0%で前年度から低下したが、令和5年度よりは高い。「インターネットでの情報収集」は100.0%→100.0%→96.0%と高水準を維持している。今後は、インターネット検索に加え、学術データベース、図書館資料、先行研究レビューを組み合わせる指導を強化し、研究の質を支える文献調査力をさらに高めることが望まれる。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

授業時間以外での授業関連学修・経験時間は「19時間以上」が32.0%で最も多く、令和5年度の最多「4～6時間」33.3%から長時間の研究・学修に取り組む層が増えており、大学院全体（23.6%）および各学部を上回った。「全くない」は4.0%にとどまる。授業出席科目数も研究科として標準的な履修規模に収まっており、研究活動を軸とした学修時間は概ね確保されている。ただし、就労状況など学生ごとの生活条件には幅があるため、個々の研究進捗の確認が望ましい。

工学研究科 - 2

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

「専門分野に関する知識・技能」「情報収集力」「課題発見・解決能力」「協働力」はいずれも100.0%であり、令和6年度から高水準を維持している。「文章表現能力」「パソコンで資料を作成する力」も3年連続で100.0%である。これらから、専門性、研究遂行力、資料作成力に関する学修成果は十分に達成されている。

一方、「リーダーシップ」は95.2%→96.4%→92.0%、「社会が直面する課題の理解」は81.0%→92.9%→92.0%、「発表能力」は100.0%→100.0%→96.0%と高水準ながら一部低下が見られる。特に「外国語運用能力」は81.0%→82.1%→64.0%と大きく低下しており、重点的な改善が必要である。

(2)長所と課題

長所は、専門知識、情報収集、課題発見・解決、協働、文章表現、資料作成の各項目が極めて高く、研究指導と専門教育の成果が安定している点である。また、授業時間外の学生同士の学修経験が100.0%に達しており、研究室やゼミを基盤とした相互学修も有効に機能している。課題は、外国語運用能力の低下、体験授業・課題提示・LMS活用に関する回答比率の低下、文献調査経験の前年度からの低下である。特に工学分野では英語論文の読解、国際会議発表、英文要旨作成が研究活動と直結するため、外国語運用能力を研究実践の中で高める仕組みが求められる。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

まず、各授業・研究指導において、到達目標、事前・事後学修、提出物、評価方法をBlackboard等で明示し、継続的な学修管理を行う。次に、学術データベース検索、引用管理、研究倫理、先行研究レビューを研究初期段階から体系的に扱い、図書館資料と電子情報源を併用する力を育成する。さらに、英語論文輪読、英文アブストラクト作成、英語による研究発表、国際会議発表の準備支援を研究科内で段階的に組み込み、外国語運用能力の改善につなげる。加えて、共同研究や分野横断的な課題設定において役割分担や進捗管理を経験させることで、リーダーシップと社会課題理解を高めることが有効である。

5. 学部・研究科設問項目について

本報告書の学部・研究科設問項目のうち、工学研究科を対象とした独自設問は確認されない。そのため、本節における数値比較の対象はない。今後、研究科独自の状況把握を行う場合は、研究計画の進捗、学会発表・論文投稿、英語文献の活用、共同研究・分野横断的活動、研究倫理教育の理解度など、大学院教育の実態に即した設問を設定することが有効である。

言語教育研究科-1

1. 本年度の授業の中での経験について

本研究科では、少人数の演習・研究指導を基盤とする教育形態が引き続き有効に機能している。令和7年度の結果では、「自分の考えや課題を発表する授業」は100.0%で、前年度と同様、すべての回答者が発表経験を有している。「教員への質問・意見を述べた経験」は95.2%で、前年度96.0%から微減したものの、きわめて高い水準を維持している。「学生同士が議論する授業」は95.2%で、前年度92.0%から上昇し、院生相互の討議を通じた学修が定着していることがうかがえる。一方、「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業」は81.0%で、前年度84.0%からやや低下した。「定期的な小テスト・レポートのある授業」は81.0%、「Blackboard、E-mail等を活用した教材・課題の受け取りや提出」は95.2%であり、課題提示・提出のデジタル化は安定している。総じて、発表、質疑、討議を中心とする大学院教育の特性は十分に維持されているが、体験的・実践的学修機会については、授業形態や履修者構成に応じて充実が望まれる。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

授業時間外の学修態度については、全体として高い水準を保ちながらも、前年度から低下した項目が見られる。「他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験」は81.0%で、前年度88.0%を下回った。「教職員への学修に関する相談経験」は71.4%で、前年度92.0%から大きく低下している。この点は、研究科として最も注意すべき課題である。他方、「授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験」は100.0%、「授業や課題のためインターネットで情報を集めた経験」も100.0%であり、文献調査・情報収集に関わる学修行動はきわめて良好である。したがって、本研究科の院生は、個別の情報収集・文献調査には十分取り組んでいる一方、教職員への相談や学生間での協働的学修については、前年度ほど活発ではなかったと考えられる。今後は、研究指導の個別性を保ちつつ、相談しやすい機会と学生間交流の場を設計する必要がある。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

週当たりの授業出席科目数は、「1～2科目」と「13科目以上」がいずれも33.3%で最も多く、回答者の課程・学年・履修状況の多様性が反映されている。授業時間以外での授業関連学修・経験時間は「4～6時間」が33.3%で最も多く、前年度と同様、授業外学修は一定程度確保されている。ただし、大学院教育としては、研究計画、先行研究レビュー、データ分析、論文執筆等に要する時間を考えると、さらなる自律的学修時間の確保が望ましい。「授業と関連しない読書時間」は「1～3時間」が61.9%で最も多く、前年度と同様に個人差はあるものの、読書習慣は一定程度維持されている。「アルバイト・就労時間」は「全くない」と「10～12時間」が各28.6%、「19時間以上」が19.0%であり、仕事・生活上の負担が学修時間に影響する可能性がある。「個人的な趣味活動時間」は「1～3時間」が38.1%で最も多く、全体として、学修・就労・生活時間の配分が多様化している。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

学修成果については、全体として非常に高い達成状況が示されている。「専門分野に関する知識・技能」「情報を収集する力や必要な情報を得る力」「物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力」「学修した内容をまとめて発表する力」「表現すべき内容を文章にして書ける力」「パソコンで文書や資料を作成する力」は、いずれも「身に付いた計」が100.0%であった。これは、前年度においても多くの項目が100.0%であった傾向を継承しており、本研究科の教育が、専門的知識、調査力、課題発見・解決力、発表・文章表現力の形成において安定した成果を上げていることを示す。「他の人と協力して物事を進めていく力」は95.2%、「リーダーシップ」は90.5%、「社会が直面する課題を理解する力」は95.2%、「外国語の運用能力」は90.5%であった。特に外国語運用能力は、前年度に課題として指摘された「ほとんど身に付かなかった」回答の比率が改善しており、前進が認められる。

学生が16.0%いたので、改善を図りたい。

言語教育研究科-2

（２）長所と課題

本研究科の長所は、専門的知識・技能、情報収集力、課題発見・解決力、発表力、文章表現力、ICT活用力が、いずれも高い水準で形成されている点にある。大学院教育において必要とされる研究遂行能力の中核部分は、概ね良好に達成されていると評価できる。また、発表授業100.0%、教員への質問・意見95.2%、学生同士の議論95.2%という結果は、研究科の授業が一方的な講義にとどまらず、院生の主体的な発信と対話を重視していることを示している。一方で、課題としては、第一に、教職員への学修相談経験が71.4%に低下した点が挙げられる。第二に、学生間の授業外の話し合い・共同学修も81.0%に低下しており、院生同士の横のつながりをさらに強める必要がある。第三に、リーダーシップと外国語運用能力は90%台に達しているものの、他の学修成果項目と比べると相対的に低く、継続的な改善が求められる。

（３）教育課程や教育内容・方法などの改善方策

今後の改善方策として、以下の三点を重視したい。第一に、学生が研究上の悩みや履修上の課題を早期に相談できるよう、指導教員による個別面談に加え、研究科全体での相談機会を明示的に設定する。第二に、学年・専攻・課程を越えた院生間交流を促進する。具体的には、修士論文・博士論文中間発表会の事前合同練習、博士後期課程院生による研究相談会、英語教育学専攻と日本語教育学専攻を横断する読書会・研究会などを奨励する。第三に、リーダーシップと外国語運用能力を高めるため、院生が司会、コメンテーター、ディスカッションリーダーを担う機会を増やし、必要に応じて英語・日本語双方での発表・質疑応答の訓練を組み込む。これにより、個別研究の深化と協働的な学修環境の形成を両立させたい。

5. 学部・研究科設問項目について

本資料では、研究科固有の追加設問項目は確認できなかったため、上記の共通設問に基づいて所見を記した。今後、研究科独自の設問を設定する場合には、研究指導、論文執筆支援、学会発表準備、外国語運用、留学生支援等に関する項目を加えることで、大学院教育の質保証に資するより精緻な把握が可能になると考えられる。

国際協力学研究科 - 1

1. 本年度の授業の中での経験について

「あった計(よくあった+ときどきあった)」の比率(%)比較

設問項目	令和5年度	令和6年度	令和7年度	大学院全体
自分の考えや課題を発表する授業	100	96.8	94.1	96.6
教員への質問・意見を述べたことの経験	94.7	96.8	94.1	95.5
学生同士が議論する授業	78.9	87.1	88.2	89.9
演習、実習、フィールドワーク等体験授業	63.2	71.0	58.8	77.5
定期的な小テスト・レポートのある授業	84.2	87.1	82.4	86.5
Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業	89.5	90.3	88.2	91.0

8割以上の学生が、授業内で積極的に発表をしたり、意見を述べたり、議論をしたりしており、能動的に授業に参加する環境は確保されていることが読み取れる。「フィールドワーク」が他の研究科と比べ、若干少ないことが課題と言えるかもしれない。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「あった計(よくあった+ときどきあった)」の比率(%)比較

設問項目	令和5年度	令和6年度	令和7年度	大学院全体
他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験	68.4	74.2	82.4	88.8
教職員への学修に関する相談経験	73.7	71.0	70.6	78.7
図書館で資料・文献を調べた経験	100	96.8	94.1	88.8
インターネットでの情報収集経験	89.5	96.8	100	98.9

図書館の使用が減り、インターネット（AI）の使用率が高まっているのは、時代の流れと考えられる。また7割程度の学生が、学生同士や教員と授業外での議論を交わしたことがあることがわかる。そういう学習環境は整っているようである。

国際協力学研究科-2

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

設問項目	令和4年度	令和5年度	令和6年度	大学院全体
週当たりの授業出席科目数	1-2科目42.1%, >13科目21.1%	1-2科目32.3%, >13科目12.9%	1-2科目35.3%, 3-4科目29.4%	1-2科目27.0%, 3-4科目18.0%
週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間	13-15時間36.8% 4-6時間31.6%	7-9時間32.3% 1-3時間22.6%	>19時間35.3 10-12時間23.5	>19時間23.6 4-6時間20.2
週当たりの授業と関連しない読書時間	1-3時間31.6% >19時間21.1%	1-3時間51.6% 4-6時間22.6%	1-3時間41.2 >19時間23.5	1-3時間48.3 >19時間14.6
部活動・サークル活動時間	全くない26.3% >19時間26.3%	全くない32.3% >19時間25.8%	全くない47.1% >19時間35.3%	全くない36.0% >19時間19.1%
週当たりのアルバイト時間	1-3時間26.3% >19時間26.3%	1-3時間45.2% 7-9時間19.4%	>19時間23.5% 1-3時間17.6	1-3時間22.5% 7-9時間21.3%
週当たりの個人的な趣味活動時間	1-2科目42.1%, >13科目21.1%	1-2科目32.3%, >13科目12.9%	1-2科目35.3%, 3-4科目29.4%	1-2科目27.0%, 3-4科目18.0%

授業外での学習時間は、年によってばらつきが大きく、博士前期課程と後期課程では、大きく学習時間が異なると分析される。部活動、アルバイト等に割いている時間も2極化しており、背景には、経済的困窮があるのかもしれない。

国際協力学研究科-2

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

「身に付いた計(よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた)」の比率(%)比較

設問項目	令和5年度	令和6年度	令和7年度	大学院全体
一般的な教養	100	100	100	100
専門分野に関する知識・技能	100	100	100	100
情報を収集する力	100	100	100	100
物事の課題を発見し、解決を考える力	73.7	87.1	82.4	93.3
他の人と協力して物事を進めていく力	78.9	83.9	76.5	88.8
リーダーシップを発揮できる力	100	96.8	100	96.6
社会が直面する課題を理解する力	73.7	87.1	76.5	82.0
外国語の運用能力	94.7	100	94.1	97.8
学修した内容をまとめて、発表する力	100	100	100	100
表現すべき内容を文章にして書ける力	94.7	100	100	100
パソコンで文書や資料を作成する力	100	100	100	100

90～100%の学生が、「専門分野に関する知識・技能」「情報を収集する力」「課題を発見し、解決を考える力」「社会が直面する課題を理解する力」「学修した内容をまとめて、発表する力」「表現すべき内容を文章にして書ける力」「パソコンで文書や資料を作成する力」について「身に付いた」と回答しており、確かな手ごたえを感じていることが読み取れる。一方、「他の人と協力して物事を進めていく力」「リーダーシップを発揮できる力」の値が、決して低くはないものの、他と比べると少し数値が下がっているため、チームでの作業に少し改善点があるように見受けられる。

(2)長所と課題

長所としては、個々人が学習を深めたり、教員に相談したりする環境は十分に整っていることが読み取れる。課題としては、チームでの作業、あるいはフィールドワークなどの機会が少ないことがあげられる。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

教員の多くが、普段は八王子キャンパス、大学院のみ文京キャンパスという勤務状況であるため、フィールドワークなどを授業に取り入れることが難しくなっている。その中でできるアクティブ・ラーニングを工夫していくことが重要となってくる。

地方政治行政研究科- 1

1. 本年度の授業の中での経験について

- ・本調査時点の本研究科の在籍総数17名の内、7名が回答した。内訳は、修士課程1年3名、同2年4名であり、その内外国人留学生は5名である。
- ・本所見のカッコ付の項目は、昨年度から変化のあった項目である(全て%。左側の数値は昨年度のもの)。本所見 1 と 2 にあるいずれの項目も、「あった計(よくあった+ときどきあった)」の数値結果である。
- ・自分の考えや課題の発表経験、学生同士の議論経験(100→85.7)
- ・演習・実験・実習・フィールドワークなどの体験(69.2→100)
- ・定期的小テスト・レポート経験(84.6→100)

以上のことから、総じて、授業中の活動が活発に行われたことが分かる。前年度と比べ、学生同士の議論経験は14.3ポイント減少する一方、演習・実験・実習・フィールドワークなどの体験は30.8ポイント、定期的小テスト・レポート経験は15.4ポイント向上している。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

- ・他学生と授業内容について話し合いや勉強の経験(92.3→71.4)
- ・教職員への学修に関する相談経験(76.9→100)
- ・図書館で資料文献を調べた経験(92.3→100)

以上のことから、総じて、授業時間外の活動が活発に行われたことが分かる。前年度と比べ、他学生と授業内容について話し合いや勉強の経験は20.9ポイント減少する一方、教職員への学修に関する相談経験は23.1、図書館で資料文献を調べた経験は7.7ポイント向上している。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

・週当たりの授業出席科目数：1-2科目(0→42.9)、3-6科目(38.5→28.6)、7-12科目(30.8→0)、13科目以上(30.8→28.6)の割合である。大学院生全体の傾向と大きく異なる点は、1-2科目の割合が15.9ポイント高く、また、13科目以上の割合が11.7ポイント高い点である。

- ・週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間：4-9時間が42.9%、10時間以上が57.2%の割合である。学生間で数値の開きが見られる。
- ・週当たりの授業と関連しない読書時間：各時間帯に1名又は2名という配分になっており、数値にばらつきが見られる。
- ・週当たりのアルバイト・就労時間：各時間帯に1名又は2名という配分になっており、数値にばらつきが見られる。
- ・週当たりの個人的な趣味活動時間：7時間以上が71.4%。同時間帯の大学院生全体の傾向と比べ、13.2ポイント高い。

以上のことから、大学院生全体の傾向と比較し顕著な特徴は、授業出席科目数と、授業時間以外での授業関連学修・経験時間については、学生間で数値の開きが見られることである。また、週当たりの個人的な趣味活動時間は多めである。一方、授業と関連しない読書時間及びアルバイト・就労時間は学生間で数値にばらつきがある。

地方政治行政研究科-2

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

以下の通りの結果となった。いずれの項目も、「よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた」の数値結果である。

- ・専門分野に関する知識・技能、情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力、物事の課題を発見しその解決の方向性を考える力、社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力、学修した内容をまとめてそれを発表する力、表現すべき内容を文章にして書ける力:100%
- ・他の人と協力して物事を進めていく力:(100→)92.3%
- ・必要な場合のリーダーシップを発揮できる力:(33.3→)92.3%
- ・パソコンで文書や資料を作成する力:(100→)92.3%
- ・外国語の運用能力:(66.7→)76.9%

以上のことから、総じて、学修によって身に付けることが期待される力は向上したことが分かる。前年度と比べ、必要な場合のリーダーシップを発揮できる力は59ポイント、また、外国語の運用能力は10ポイント程向上している。

(2)長所と課題

上記10項目のうち9項目において、身に付いた(「よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた」)の数値が90%以上となっており、学修成果の高い傾向が継続している。

過年度まで数値の推移への注視を必要としていた項目について「令和4年度→5年度→6年度」の実績を見ると、リーダーシップ発揮の力(84.7→33.3→92.3%)、及び外国語の運用能力(77.0→66.7→76.9%)となっている。リーダーシップ発揮の力については、本調査結果においては、他項目と同様高い数値を示している。一方、外国語の運用能力については数値の回復傾向が見られるものの、引き続き来年度以降もその推移を注視する必要がある。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

上記に示された良好な状態を今後も持続できるよう、現在の取り組みの継続が求められている。また、外国語の運用能力については、本研究科は日本語での教育を前提としていることから留学生への支援を中心に取り組むことになる。但し、本調査の回答者の約半数は日本人学生であるにも関わらず約8割の回答者が外国語の運用能力の向上を示している現状に鑑み、現在の取り組みの継続を基本とすることが望ましいと考える。

地方政治行政研究科-3

4. 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

(1) 学修成果の達成状況

以下の通りの結果となった。いずれの項目も、「よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた」の数値結果である。

＜昨年度と同様に100%の項目＞

- ・専門分野に関する知識・技能、情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力、物事の課題を発見しその解決の方向性を考える力、社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力、学修した内容をまとめてそれを発表する力、表現すべき内容を文章にして書ける力。

＜昨年度と比べ向上した項目＞

- ・他の人と協力して物事を進めていく力(92.3→100)
- ・必要な場合のリーダーシップを発揮できる力(92.3→100)
- ・パソコンで文書や資料を作成する力(92.3→100)
- ・外国語の運用能力(76.9→85.7)

以上のことから、総じて、学修によって身に付けることが期待される力は向上したことが分かる。前年度と比べ、他の人と協力して物事を進めていく力、必要な場合のリーダーシップを発揮できる力、パソコンで文書や資料を作成する力は、7.7ポイント向上した。また、外国語の運用能力は8.8ポイント向上している。

(2) 長所と課題

上記の通り、学修成果の高い傾向が継続している。

過年度まで数値の推移への注視を必要としていた項目について「令和5年度→6年度→7年度」の実績を見ると、リーダーシップ発揮の力(33.3→92.3→100)、及び外国語の運用能力(66.7→76.9→85.7)となっている。双方において数値の回復傾向が見られる。

学生同士の議論経験(100→85.7)、他学生と授業内容について話し合いや勉強の経験(92.3→71.4)は減少傾向が見られる一方で、他の人と協力して物事を進めていく力(92.3→100)が向上している。授業における他学生との議論や勉強の経験が減少しても、他学生と協力して物事を進めていく能力が向上しているという状況は理解し難く、来年度も継続して関連する数値の動向に注意する必要がある。

(3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

上記に示された良好な状態を今後も持続できるよう、現在の取り組みの継続が求められている。特に、学生同士の議論を促進する授業運営を意識することが求められている。

5. 学部・研究科設問項目について(該当項目なし)